

2021年9月7日(火)**本部企画シンポジウム**

10:30 ~ 12:30 | 会場1 Zoom

本部企画シンポジウム 1 / 体育・スポーツ・健康科学を基盤としたEvidence Based Sport Policyの開発に向けて

コーディネーター：工藤 保子（大東文化大学）、水上 博司（日本大学）

10:30 ~ 11:00

[本部企画-S1-1] 学会の組織資源を活かしたエビデンス蓄積の仕組み

*水上 博司¹ (1. 日本大学)

11:00 ~ 11:30

[本部企画-S1-2] スマートウエルネスシティ創生のためのエビデンス蓄積と政策提言

*田邊 解¹ (1. 筑波大学)

11:30 ~ 12:00

[本部企画-S1-3] 日本学術会議における健康・スポーツ科学分野の活動と提言

*田原 淳子¹ (1. 国土館大学)

12:00 ~ 12:30

[本部企画-S1-4] 国が推進するEBPMの課題と教育現場の実際

*熊谷 哲¹ (1. 公益財団法人 笹川スポーツ財団)**本部企画シンポジウム**

10:30 ~ 12:30 | 会場2 Zoom

本部企画シンポジウム 2 / 若手研究者に求められる体育・スポーツ・健康科学の社会的使命：「学際性」のリアルとロマン

コーディネーター：藤川 和俊（帝京平成大学）、中澤 雄飛（帝京大学）

指定討論者：菊 幸一（筑波大学）

10:30 ~ 11:10

[本部企画-S2-1] スポーツ科学研究における学際性の確立に向けて

*竹村 瑞穂¹ (1. 日本福祉大学)

11:10 ~ 11:50

[本部企画-S2-2] 外からアプローチする「スポーツ科学」と中から外へのアプローチの可能性

*工藤 裕子¹ (1. 中央大学)

11:50 ~ 12:30

[本部企画-S2-3] 二流柔道家の“ありのまま”研究半生に学際性はあるか？

運動、武道、そしてeスポーツへ

*松井 崇¹ (1. 筑波大学)

テーマ別シンポジウム

15:15 ~ 17:15 | 会場4 Zoom

スポーツ文化研究部会【課題A】テーマ別シンポジウム／SDGsとスポーツとの接点を探る

コーディネーター：近藤 智靖（日本体育大学）、山崎 史恵（新潟医療福祉大学）

15:15 ~ 15:55

[スポーツ文化-SA-1] 戦略的基軸の変化

本質とその客観的可視化

*澤田 陽樹¹ (1. 一般財団法人グリーンスポーツアライアンス)

15:55 ~ 16:35

[スポーツ文化-SA-2] オリンピックから考えるSDGsとスポーツの関係性

*石坂 友司¹ (1. 奈良女子大学)

16:35 ~ 17:15

[スポーツ文化-SA-3] アダプテッド体育・スポーツがSDGsに果たす役割について

*澤江 幸則¹ (1. 筑波大学)

テーマ別シンポジウム

15:15 ~ 17:15 | 会場5 Zoom

学校保健体育研究部会【課題A】テーマ別シンポジウム／大学体育の社会的使命とその実現可能性を考える：歴史的変遷からみる大学体育の現在地

コーディネーター：高橋 浩二（長崎大学）、木村 華織（東海学園大学）

15:15 ~ 15:55

[学校保健体育-SA-1] わが国の高等教育改革にともなう大学体育の変遷とその実践に関する知見集積

*木内 敦詞¹ (1. 筑波大学)

15:55 ~ 16:35

[学校保健体育-SA-2] 大学体育授業の実践内容および大学体育の教員養成の変遷

*金谷 麻理子¹ (1. 筑波大学)

16:35 ~ 17:15

[学校保健体育-SA-3] 日本福祉大学における体育授業の運営および教員の組織づくり

*高村 秀史¹ (1. 日本福祉大学)

テーマ別シンポジウム

15:15 ~ 17:15 | 会場6 Zoom

競技スポーツ研究部会【課題A】テーマ別シンポジウム／トップアスリート養成の拠点としての大学の意義と問題点

コーディネーター：荒井 弘和（法政大学）、須甲 理生（日本女子体育大学）

15:15 ~ 15:45

[競技スポーツ-SA-1] 体育・スポーツ系大学の視点から

*山田 永子¹ (1. 筑波大学)

15:45 ~ 16:15

[競技スポーツ-SA-2] 一般大学の視点から

*田原 陽介¹ (1. 青山学院大学)

16:15 ~ 16:45

[競技スポーツ-SA-3] 女子学生のトップアスリート養成の視点から

*川本 竜史¹ (1. 大東文化大学)

16:45 ~ 17:15

[競技スポーツ-SA-4] UNIVASの視点から

*谷釜 尋徳¹ (1. 東洋大学)

テーマ別シンポジウム

15:15 ~ 17:15 | 会場7 Zoom

生涯スポーツ研究部会【課題A】テーマ別シンポジウム／共生社会と生涯スポーツは共存できるのか：スポーツのパラダイムチェンジが共存への鍵

コーディネーター：内田 匡輔（東海大学）

15:15 ~ 15:55

[生涯スポーツ-SA-1] 身体と共生社会

スポーツのパラダイムチェンジに向けて

*菊 幸一¹ (1. 筑波大学)

15:55 ~ 16:35

[生涯スポーツ-SA-2] 共生社会実現を目指す、総合型地域スポーツクラブ事例報告

*大浜 三平¹ (1. NPO法人スマイルクラブ)

16:35 ~ 17:15

[生涯スポーツ-SA-3] 子どもも親も安心できるスポーツ環境の構築へ向けて

*藤後 悦子¹ (1. 東京未来大学)

テーマ別シンポジウム

15:15 ~ 17:15 | 会場8 Zoom

健康福祉研究部会【課題A】テーマ別シンポジウム／ライフスタイルに応じた健康増進・体力向上の捉え方：「女」を生きることと健康・スポーツ

コーディネーター：高尾 将幸（東海大学）、木塚 朝博（筑波大学）

15:15 ~ 15:55

[健康福祉-SA-1] 女性の運動・スポーツ実施

社会科学の立場から

*工藤 保子¹ (1. 大東文化大学)

15:55 ~ 16:35

[健康福祉-SA-2] 発育発達、ライフスタイルに応じた女性アスリート支援

*山口 香¹ (1. 筑波大学)

16:35 ~ 17:15

[健康福祉-SA-3] スポーツを通じた女性のヘルスケアを考える

*能瀬 さやか¹ (1. 東京大学医学部附属病院 女性診療科・産科)

テーマ別研究発表

13:30～14:45 | 会場9 Zoom

スポーツ文化研究部会【課題A】口頭発表①

座長：榎本 雅之（滋賀大学）

13:30～13:45

[スポーツ文化-A-01] 開発途上国における野球伝播の過程と野球定着への課題
コスタリカ共和国の場合を事例として

*藤谷 雄平¹、山田 理恵² (1. 鹿屋体育大学大学院、2. 鹿屋体育大学)

13:45～14:05

[スポーツ文化-A-02] 蹴鞠再現研究

近代工法を用いたエゾシカ蹴鞠使用球の製作

*阿羅 功也¹ (1. 旭川高専)

14:05～14:25

[スポーツ文化-A-03] オリンピックの開催が外国イメージに与える影響のメカニズムに関する一考察
ロンドンオリンピック開催時におけるロシアと北朝鮮への態度に着目した実証的検証

*下窪 拓也¹ (1. 新潟医療福祉大学)

14:25～14:45

[スポーツ文化-A-04] 五輪事前キャンプ地のスポーツガバナンス

バブル方式のエスノグラフィー

*溝口 紀子¹ (1. 日本女子体育大学)

テーマ別研究発表

13:30～14:45 | 会場10 Zoom

スポーツ文化研究部会【課題A】口頭発表②

座長：河西 正博（同志社大学）

13:30～13:45

[スポーツ文化-A-05] 「スポーツと幸福」に関する文献研究（その1）

研究の背景と意義

*清水 紀宏¹、作野 誠一²、横山 剛士³、朝倉 雅史¹、醍醐 笑部¹、林田 敏裕⁴、柴田 紘希⁵、君塚 豊⁴ (1. 筑波大学、2. 早稲田大学、3. 金沢大学、4. 筑波大学大学院、5. 山梨学院大学)

13:45～14:05

[スポーツ文化-A-06] 「スポーツと幸福」に関する文献研究（その2）

海外レビュー論文の検討

*君塚 豊¹、清水 紀宏²、作野 誠一³、横山 剛士⁴、朝倉 雅史²、醍醐 笑部²、林田 敏裕¹、柴田 紘希⁵ (1. 筑波大学大学院、2. 筑波大学、3. 早稲田大学、4. 金沢大学、5. 山梨学院大学)

14:05～14:25

[スポーツ文化-A-07] 「スポーツと幸福」に関する文献研究（その3）

書誌情報の計量的分析

*横山 剛士¹、清水 紀宏²、作野 誠一³、醍醐 笑部²、朝倉 雅史²、林田 敏裕⁴、柴田 紘希⁵、君塚 豊⁴ (1. 金沢大学、2. 筑波大学、3. 早稲田大学、4. 筑波大学大学院、5. 山梨学院大学)

14:25～14:45

[スポーツ文化-A-08] 体育学における倫理の基盤とWell-Beingへの隘路

「完成（卓越）主義Perfectionism」そしてエグゼルスヘ

*林 洋輔¹ (1. 大阪教育大学)

テーマ別研究発表

13:30 ~ 14:59 | 会場11 Zoom

学校保健体育研究部会【課題A】口頭発表①

座長：大林 太朗（筑波大学）

13:30 ~ 13:45

[学校保健体育-A-01] 大学における体育授業によって学習が可能な身体的リテラシー

*高橋 浩二¹、久保田 もか¹、畑 孝幸² (1. 長崎大学、2. 東海学園大学)

13:46 ~ 14:01

[学校保健体育-A-02] R2年度学士課程「体育」における授業方法の変更が学生の目標到達度評価および授業評価に与えた影響

*佐橋 由美¹ (1. 大阪樟蔭女子大学)

14:02 ~ 14:17

[学校保健体育-A-03] 大学体育授業における集団凝集性の変化から見える学習者の適応感

*鳥井 淳貴¹、中須賀 巧² (1. 宝塚医療大学、2. 兵庫教育大学)

14:18 ~ 14:38

[学校保健体育-A-04] コロナ禍での大学体育授業においてダンス教育の重要性が伝わる授業デザインの研究
教員養成課程における体育授業研究でのZoomダンスの実践*山崎 正枝¹ (1. 金沢大学)

14:39 ~ 14:59

[学校保健体育-A-05] コロナ禍における対面体育実技の実施が身体不活動時間とライフスキルに与える影響
大学1年生を対象とした調査から*寺岡 英晋¹、村山 光義¹、佐々木 玲子¹、稲見 崇孝¹、東原 綾子¹、野口 和行¹、加藤 幸司¹、永田 直也¹、福士 徳文¹ (1. 慶應義塾大学 体育研究所)

テーマ別研究発表

13:30 ~ 14:59 | 会場12 Zoom

学校保健体育研究部会【課題A】口頭発表②

座長：今宿 裕（作新学院大学）

13:30 ~ 13:45

[学校保健体育-A-06] 大学体育におけるオンラインヨガの取り組み
授業方法の違いによる満足度と目標達成度の差異*鹿内 菜穂¹ (1. 亜細亜大学)

13:46 ~ 14:01

[学校保健体育-A-07] 大学体育におけるアクティブラーニングの工夫と実践
剣道形の授業実践に着目して*高瀬 武志¹、東海林 祐子² (1. 桐蔭横浜大学、2. 慶應義塾大学)

14:02 ~ 14:17

[学校保健体育-A-08] 体育実技におけるオンライン講義と対面講義の学習効果比較 II

*沖 和砂¹、中澤 謙¹ (1. 会津大学)

14:18 ~ 14:38

[学校保健体育-A-09] ADDIEモデルに基づき改善された大学体育バドミントン授業が受講者の主観的恩恵に及ぼす効果

*藤野 和樹¹、木内 敦詞²、八田 直紀³、升 佑二郎⁴、林 直樹⁵ (1. 千葉商科大学、2. 筑波大学、3. 東京工業高等専門学校、4. 健康科学大学、5. 仙台大学)

14:39 ~ 14:59

[学校保健体育-A-10] 新型コロナ禍における大学体育実技の学修成果
運動行動変容段階によるオンデマンド型遠隔授業の主観的恩恵の検討*西田 順一¹ (1. 近畿大学)

テーマ別研究発表

13:30～14:40 | 会場13 Zoom

競技スポーツ研究部会【課題A】口頭発表①

座長：内田 若希（九州大学）

13:30～13:50

[競技スポーツ-A-01] コロナ禍における東京オリンピックの開催可否に対する代表候補選手の意識調査
レスリング競技を事例にして

*前田 翔吾¹ (1. 東洋大学大学院総合情報学研究科総合情報学専攻)

13:50～14:10

[競技スポーツ-A-02] ライフスキルが引退後のキャリア選択行動に与える影響
女性トップアスリートを対象として

*東海林 祐子¹、島本 好平²、鈴木 万紀子³、錦見 綾⁴ (1. 慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科、2. 法政大学スポーツ健康学部スポーツ健康学科、3. 一般社団法人日本トップリーグ連携機構、4. 慶應義塾大学総合政策学部)

14:10～14:25

[競技スポーツ-A-03] 新型コロナウイルス感染症拡大に伴う自粛生活が大学生運動部員のストレス反応に与える影響

ライフスキルのストレス反応緩和効果に着目して

*山田 弥生子¹、守屋 麻樹²、山口 香²、土屋 裕睦³ (1. 大阪体育大学大学院、2. 筑波大学、3. 大阪体育大学)

14:25～14:40

[競技スポーツ-A-04] 大学サッカー選手の危機克服プロセスの可視化
受傷経験に着目して

*黒田 貴稔¹、豊田 則成¹ (1. びわこ成蹊スポーツ大学)

テーマ別研究発表

13:30～14:40 | 会場14 Zoom

競技スポーツ研究部会【課題A】口頭発表②

座長：荒井 弘和（法政大学）

13:30～13:50

[競技スポーツ-A-05] 陸上競技・跳躍種目における競技パフォーマンスの動態に関する研究
男女学生競技者の性差に着目して

*三木 圭太¹、青山 亜紀¹、青山 清英¹ (1. 日本大学)

13:50～14:10

[競技スポーツ-A-06] イップスチェックリストの開発および信頼性と妥当性の検討

*栗林 千聡¹、武部 匡也²、荒井 弘和³ (1. 国立スポーツ科学センター、2. 立正大学心理学部、3. 法政大学文学部)

14:10～14:25

[競技スポーツ-A-07] 筋電図を用いた社会人硬式野球チーム投手へのサポート事例報告

*太田 洋一¹、島 典広² (1. 静岡福祉大学、2. 東海学園大学)

14:25～14:40

[競技スポーツ-A-08] 人工知能に基づく人間の姿勢推定による飛び込み競技の空中運動解析の創意工夫

*野村 照夫¹、来田 宣幸¹ (1. 京都工芸繊維大学)

テーマ別研究発表

13:30～14:40 | 会場15 Zoom

競技スポーツ研究部会【課題A】口頭発表③

座長：須甲 理生（日本女子体育大学）

13:30～13:50

[競技スポーツ-A-09] 日本の大学スポーツにおける学連組織の実態と課題

*小野里 真弓¹、朝倉 雅史²、石川 智³、相原 正道⁴、木村 和彦⁵ (1. 尚美学園大学、2. 筑波大学、3. 作新学院大学、4. 大阪経済大学、5. 早稲田大学)

13:50～14:10

[競技スポーツ-A-10] 「感覚」を「言語化」することによる投球パフォーマンスの安定
プロ野球投手へのメンタルサポートの可視化*豊田 則成¹、黒田 貴稔¹ (1. びわこ成蹊スポーツ大学)

14:10～14:25

[競技スポーツ-A-11] プロのダンスアーティストの創作技術と舞踊思想に関する質的研究

*三輪 亜希子¹、高木 英樹² (1. 尚美学園大学、2. 筑波大学体育系)

14:25～14:40

[競技スポーツ-A-12] 大学サッカー部における競技力向上に向けたクラブ規範の取り組み

*東海林 毅¹、東海林 祐子² (1. 城西大学 経営学部、2. 慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科)

テーマ別研究発表

13:55～15:00 | 会場17 Zoom

生涯スポーツ研究部会【課題A】口頭発表②

座長：吉岡 尚美（東海大学）

13:55～14:10

[生涯スポーツ-A-04] オーストラリアの障害者を包摂した水泳チームに対するエスノグラフィー

*瀬川 海¹ (1. 兵庫教育大学)

14:10～14:25

[生涯スポーツ-A-05] 障害者スポーツ・レクリエーション体験会における障害者の継続的なスポーツ参加につながる主催事業体の行動について

*飯田 望見¹、澤江 幸則¹、齊藤 まゆみ¹、松原 豊¹ (1. 筑波大学)

14:25～14:40

[生涯スポーツ-A-06] パラスポーツ観戦意欲向上のための要因
パラ陸上における競技者意識と観戦者意識の関係性に着目して*井上 幹智¹、齊藤 まゆみ²、澤江 幸則²、松原 豊² (1. 筑波大学大学院、2. 筑波大学)

14:40～15:00

[生涯スポーツ-A-07] わが国の障害者スポーツ推進のあり方に関する試論

*藤田 紀昭¹ (1. 日本福祉大学)

テーマ別研究発表

14:05～15:00 | 会場16 Zoom

生涯スポーツ研究部会【課題A】口頭発表①

座長：後藤 光将（明治大学）

14:05～14:20

[生涯スポーツ-A-01] 台湾における野球振興計画の事業化の現状と課題

S社による大学グラウンドの再利用の事例から

*童 安佚¹ (1. 鳴門教育大学)

14:20～14:40

[生涯スポーツ-A-02] 総合型地域スポーツクラブにおけるミッションの形成過程

行政主導型クラブに着目して

*柴田 紘希¹、清水 紀宏² (1. 山梨学院大学、2. 筑波大学)

14:40～15:00

[生涯スポーツ-A-03] 総合型地域スポーツクラブにおける市民の自主運営構築プロセス

*千葉 洋平¹ (1. 岐阜薬科大学)

テーマ別研究発表

13:30～14:40 | 会場18 Zoom

健康福祉研究部会【課題A】口頭発表①

座長：大塚 隆（東海大学）

13:30～13:45

[健康福祉-A-01] 大学教育における健康持続のためのレジリエンスプログラム開発

*高橋 和子¹ (1. 静岡産業大学)

13:45～14:05

[健康福祉-A-02] メディカルフィットネスにおける利用者の口コモ度と性格特性の関連の検討

*高士 真奈¹、武市 寿子³、梅本 安則^{1,2}、上條 義一郎⁴、指宿 立⁵、川端 浩一⁶、中山 亜未⁷、三井 利仁^{8,1}、田島 文博^{1,2}
(1. 和歌山県立医科大学げんき開発研究所、2. 和歌山県立医科大学リハビリテーション医学講座、3. 和歌山県立紀伊コスモス支援学校、4. 濁協医科大学埼玉医療センターリハビリテーション科、5. 医療法人温和会 明野中央病院リハビリテーション科、6. 宝塚医療大学理学療法学科、7. 大阪体育大学、8. 日本福祉大学スポーツ科学部)

14:05～14:20

[健康福祉-A-03] コロナ禍における精神障害のある人の運動・スポーツ参加

就労継続支援B型事業所の調査から

*永田 真一¹、八重田 淳¹ (1. 筑波大学)

14:20～14:40

[健康福祉-A-04] オンライン社会における「社会的健康」を問い直す

「かかわる」とはどのような身体活動なのか

*田中 愛¹ (1. 明星大学)

各種会議・ミーティング

12:30～13:30 | 会場3 Zoom

名誉会員懇談会

本部総会

9:00～10:20 | 会場1 Zoom

オープニング・本部総会

交流企画

17:30～19:00 | 会場3 Zoom

若手研究者委員会プレゼンツ「学会の未来を語る会」

本部企画シンポジウム**■** 2021年9月7日(火) 10:30～12:30 | 会場1 Zoom**本部企画シンポジウム1／体育・スポーツ・健康科学を基盤としたEvidence Based Sport Policyの開発に向けて**

コーディネーター：工藤 保子（大東文化大学）、水上 博司（日本大学）

ちょうど10年前、本学会の本部企画シンポジウムのテーマは「日本体育学会の中・長期戦略：政策提言に向けた学会の構造改革」（第62回大会：鹿屋体育大学）であった。その後、このテーマは本学会の重要な課題となっていく。背景には体育・スポーツ・健康科学の専門分化の加速があった。専門領域別の独立学会化と独立ジャーナル化が相次ぐ。研究はより細部化し分析は精緻化する。個々の専門研究は飛躍的な進歩とスピード感で成果を上げ続けた。しかしながら、専門のタコツボ化と専門間の断絶は緩やかにすすんだ。気づけば研究成果は体育・スポーツ・健康科学の「社会還元」という目的からも乖離しつつあった。

こうした状況の中、本学会は専門領域間の「橋渡し」と応用研究への「問い直し」へ向けた構造改革をすすめる。第71回大会から専門領域枠を縮小化し、5つの応用部会のシンポジウムテーマ別に研究発表枠が設けられた。10年前に提唱された中・長期戦略（構造改革）は具現化しつつある。加えて重要視されたのは、体育・スポーツ・健康に係る政策立案・評価過程への組織的参画（Evidence-based Sports Policy＝EBSP）であった。2020年3月政策検討・諮問委員会は「日本体育学会における日常的なEvidence Based Sport Policy（EBSP）蓄積に向けた仕組みづくりに関する提言」を発表した。本提言では政策エビデンスを「つくる」「つかう」「つたえる」という3つの局面から想定される学会の構造改革プランが描かれている。しかしながら、このプランの背後には数多くの困難が待ち受けている。本シンポジウムでは、こうした困難を共有し、体育・スポーツ・健康科学の「社会還元」という目的を果たすためのEBSP開発の道筋を提示したい。

10:30～11:00

[本部企画-S1-1] 学会の組織資源を活かしたエビデンス蓄積の仕組み

*水上 博司¹ (1. 日本大学)

11:00～11:30

[本部企画-S1-2] スマートウェルネスシティ創生のためのエビデンス蓄積と政策提言

*田邊 解¹ (1. 筑波大学)

11:30～12:00

[本部企画-S1-3] 日本学術会議における健康・スポーツ科学分野の活動と提言

*田原 淳子¹ (1. 国士館大学)

12:00～12:30

[本部企画-S1-4] 国が推進するEBPMの課題と教育現場の実際

*熊谷 哲¹ (1. 公益財団法人 笹川スポーツ財団)

本部企画シンポジウム

本部企画シンポジウム 1 / 体育・スポーツ・健康科学を基盤とした Evidence Based Sport Policyの開発に向けて

コーディネーター：工藤 保子（大東文化大学）、水上 博司（日本大学）

2021年9月7日(火) 10:30 ～ 12:30 会場1 (Zoom)

ちょうど10年前、本学会の本部企画シンポジウムのテーマは「日本体育学会の中・長期戦略：政策提言に向けた学会の構造改革」（第62回大会：鹿屋体育大学）であった。その後、このテーマは本学会の重要な課題となっていく。背景には体育・スポーツ・健康科学の専門分化の加速があった。専門領域別の独立学会化と独立ジャーナル化が相次ぐ。研究はより細部化し分析は精緻化する。個々の専門研究は飛躍的な進歩とスピード感で成果を上げ続けた。しかしながら、専門のタコソボ化と専門間の断絶は緩やかにすすんだ。気づけば研究成果は体育・スポーツ・健康科学の「社会還元」という目的からも乖離しつつあった。

こうした状況の中、本学会は専門領域間の「橋渡し」と応用研究への「問い直し」へ向けた構造改革をすすめる。第71回大会から専門領域枠を縮小化し、5つの応用部会のシンポジウムテーマ別に研究発表枠が設けられた。10年前に提唱された中・長期戦略（構造改革）は具現化しつつある。加えて重要視されたのは、体育・スポーツ・健康に係る政策立案・評価過程への組織的参画（Evidence-based Sports Policy=EBSP）であった。2020年3月政策検討・諮問委員会は「日本体育学会における日常的なEvidence Based Sport Policy (EBSP) 蓄積に向けた仕組みづくりに関する提言」を発表した。本提言では政策エビデンスを「つくる」「つかう」「つたえる」という3つの局面から想定される学会の構造改革プランが描かれている。しかしながら、このプランの背後には数多くの困難が待ち受けている。本シンポジウムでは、こうした困難を共有し、体育・スポーツ・健康科学の「社会還元」という目的を果たすためのEBSP開発の道筋を提示したい。

10:30 ～ 11:00

[本部企画-S1-1]学会の組織資源を活かしたエビデンス蓄積の仕組み

*水上 博司¹ (1. 日本大学)

<演者略歴>

17-18年の政策検討・諮問委員会分科会座長を務め「日本体育学会が恒常的にEBSPへ関わるためのevidenceの蓄積を可能にする仕組み」をとりまとめた。1998年には自らNPO法人を創設し、公益社団法人セーブ・ザ・チルドレン・ジャパンや三菱財団、住友生命健康財団など数多くの民間援助団体との協働・研究事業を実施してきた。

個人から組織へ。政策立案や身体活動基準、指針策定、そしてそれらの検証・評価プロセスでは、学会構成員個人の研究インフラに依存し、立案・策定に係る委員会やプロジェクトのもとでエビデンスの収集・蓄積に成果を上げてきた。さらに指導実践と研究のギャップを埋める記述言語やアウトリーチ活動の工夫を通じてより質の高いエビデンスの収集を目指す個人の熱情も感じる。しかしながら、たとえばシステマティックレビューの対象が国外のエビデンスに偏っているように国内でのエビデンスの収集・蓄積には高いハードルがあることが指摘されてきた。また大規模な横断的・縦断的なエビデンスの収集には、産官学民の組織間連携の必要性も指摘されている。個人では困難なエビデンスの収集・蓄積を学会という組織資源の動員によって、それがどこまで可能であるのか。2020年3月、エビデンスという言葉イデオロギーの支配性にも注意しながら、その可能性を問うべく政策検討・諮問委員会は「日本体育学会が恒常的に EBSPへ関わるための evidenceの蓄積を可能にする仕組み」を発表した。本シンポジウムでは、この仕組みの限界と可能性を睨みつつ各報告者の議論を深めていただきたい。

本部企画シンポジウム

本部企画シンポジウム 1 / 体育・スポーツ・健康科学を基盤とした Evidence Based Sport Policyの開発に向けて

コーディネーター：工藤 保子（大東文化大学）、水上 博司（日本大学）

2021年9月7日(火) 10:30 ～ 12:30 会場1 (Zoom)

ちょうど10年前、本学会の本部企画シンポジウムのテーマは「日本体育学会の中・長期戦略：政策提言に向けた学会の構造改革」（第62回大会：鹿屋体育大学）であった。その後、このテーマは本学会の重要な課題となっていく。背景には体育・スポーツ・健康科学の専門分化の加速があった。専門領域別の独立学会化と独立ジャーナル化が相次ぐ。研究はより細部化し分析は精緻化する。個々の専門研究は飛躍的な進歩とスピード感で成果を上げ続けた。しかしながら、専門のタコツボ化と専門間の断絶は緩やかにすすんだ。気づけば研究成果は体育・スポーツ・健康科学の「社会還元」という目的からも乖離しつつあった。

こうした状況の中、本学会は専門領域間の「橋渡し」と応用研究への「問い直し」へ向けた構造改革をすすめる。第71回大会から専門領域枠を縮小化し、5つの応用部会のシンポジウムテーマ別に研究発表枠が設けられた。10年前に提唱された中・長期戦略（構造改革）は具現化しつつある。加えて重要視されたのは、体育・スポーツ・健康に係る政策立案・評価過程への組織的参画（Evidence-based Sports Policy=EBSP）であった。2020年3月政策検討・諮問委員会は「日本体育学会における日常的なEvidence Based Sport Policy (EBSP) 蓄積に向けた仕組みづくりに関する提言」を発表した。本提言では政策エビデンスを「つくる」「つかう」「つたえる」という3つの局面から想定される学会の構造改革プランが描かれている。しかしながら、このプランの背後には数多くの困難が待ち受けている。本シンポジウムでは、こうした困難を共有し、体育・スポーツ・健康科学の「社会還元」という目的を果たすためのEBSP開発の道筋を提示したい。

11:00 ～ 11:30

[本部企画-S1-2]スマートウエルネスシティ創生のためのエビデンス蓄積と 政策提言

*田邊 解¹ (1. 筑波大学)

<演者略歴>

成蹊大学工学部工業化学科卒業。筑波大学大学院体育科学研究科博士課程修了（博士（体育科学）取得）。筑波大学大学院人間総合科学研究科研究員及び同大学体育系研究員、駒沢女子大学人間健康学部健康栄養学科准教授を経て、2021年4月より筑波大学体育系／筑波大学SWC政策開発研究センター准教授。

人生100年時代を迎え、我が国では個人のみならず、組織、住むまち、そして国全体としてライフコースを再設計する必要に迫られている。また、COVID-19感染拡大、超高齢社会、人口減少あるいはSDGsなど国内外の様々な課題や潮流に対しいかに取り組むか、その方向性を定めるエビデンスの蓄積とそれを基にした政策化が求められる。特に世界に先んじて超高齢社会を迎えた我が国においては国民の健康増進に関わるエビデンス集積が必須である。しかしながら、健康増進の政策化拠点は未だ整備されていない。そうした状況下で、演者が所属する筑波大学は2020年11月にスマートウエルネスシティ政策開発研究センターを設立した。同センターは、健康長寿社会を実現できる都市の創生に資するため、超高齢社会に起因した諸課題に関する開発研究を推進し、その成果としての政策を社会に提言するとともに、これらを実現できる高度職業人の養成機能を確認することを目的としている。本発表では同センター設立に至った背景と経緯、そして複数自治体で行った社会実証実験とその成果を礎とした政策提言への動きを紹介しながら、本学会におけるEBSP開発の道筋を学会員の皆様とともに思索したい。

本部企画シンポジウム

本部企画シンポジウム 1 / 体育・スポーツ・健康科学を基盤とした Evidence Based Sport Policyの開発に向けて

コーディネーター：工藤 保子（大東文化大学）、水上 博司（日本大学）

2021年9月7日(火) 10:30 ～ 12:30 会場1 (Zoom)

ちょうど10年前、本学会の本部企画シンポジウムのテーマは「日本体育学会の中・長期戦略：政策提言に向けた学会の構造改革」（第62回大会：鹿屋体育大学）であった。その後、このテーマは本学会の重要な課題となっていく。背景には体育・スポーツ・健康科学の専門分化の加速があった。専門領域別の独立学会化と独立ジャーナル化が相次ぐ。研究はより細部化し分析は精緻化する。個々の専門研究は飛躍的な進歩とスピード感で成果を上げ続けた。しかしながら、専門のタコソボ化と専門間の断絶は緩やかにすすんだ。気づけば研究成果は体育・スポーツ・健康科学の「社会還元」という目的からも乖離しつつあった。

こうした状況の中、本学会は専門領域間の「橋渡し」と応用研究への「問い直し」へ向けた構造改革をすすめる。第71回大会から専門領域枠を縮小化し、5つの応用部会のシンポジウムテーマ別に研究発表枠が設けられた。10年前に提唱された中・長期戦略（構造改革）は具現化しつつある。加えて重要視されたのは、体育・スポーツ・健康に係る政策立案・評価過程への組織的参画（Evidence-based Sports Policy=EBSP）であった。2020年3月政策検討・諮問委員会は「日本体育学会における日常的なEvidence Based Sport Policy (EBSP) 蓄積に向けた仕組みづくりに関する提言」を発表した。本提言では政策エビデンスを「つくる」「つかう」「つたえる」という3つの局面から想定される学会の構造改革プランが描かれている。しかしながら、このプランの背後には数多くの困難が待ち受けている。本シンポジウムでは、こうした困難を共有し、体育・スポーツ・健康科学の「社会還元」という目的を果たすためのEBSP開発の道筋を提示したい。

11:30 ～ 12:00

[本部企画-S1-3]日本学術会議における健康・スポーツ科学分野の活動と提言

*田原 淳子¹ (1. 国土館大学)

<演者略歴>

第20-24期（2006-2020年）日本学術会議連携会員として「健康・スポーツ科学分科会」に所属した。その間、同分科会の活動以外に、第21期では「日本の展望委員会 世界とアジアのなかの日本分科会」、第24期には「科学的エビデンスに基づく『スポーツの価値』の普及の在り方に関する委員会」の委員を務めた。

日本学術会議は、「行政、産業及び国民生活に科学を反映、浸透させることを目的」として、政府から独立して職務を行う機関として、1949年に設立された。その職務は、「科学に関する重要事項を審議し、その実現を図ること」及び「科学に関する研究の連絡を図り、その能率を向上させること」であり、その役割は「政府に対する政策提言」「国際的な活動」「科学者間ネットワークの構築」「科学の役割についての世論啓発」の4点が掲げられている。

本発表では、日本学術会議における健康・スポーツ科学分野の提言の作成や関連する活動に携わった経験から、科学的エビデンスに基づく提言についての考え方、審議の過程、採択までの審査手続き、提言発出後の影響調査（インパクトレポート）等について紹介し、本シンポジウムの目的に資するような議論の材料を提供したい。

本部企画シンポジウム

本部企画シンポジウム 1 / 体育・スポーツ・健康科学を基盤とした Evidence Based Sport Policyの開発に向けて

コーディネーター：工藤 保子（大東文化大学）、水上 博司（日本大学）

2021年9月7日(火) 10:30 ～ 12:30 会場1 (Zoom)

ちょうど10年前、本学会の本部企画シンポジウムのテーマは「日本体育学会の中・長期戦略：政策提言に向けた学会の構造改革」（第62回大会：鹿屋体育大学）であった。その後、このテーマは本学会の重要な課題となっていく。背景には体育・スポーツ・健康科学の専門分化の加速があった。専門領域別の独立学会化と独立ジャーナル化が相次ぐ。研究はより細部化し分析は精緻化する。個々の専門研究は飛躍的な進歩とスピード感で成果を上げ続けた。しかしながら、専門のタコツボ化と専門間の断絶は緩やかにすすんだ。気づけば研究成果は体育・スポーツ・健康科学の「社会還元」という目的からも乖離しつつあった。

こうした状況の中、本学会は専門領域間の「橋渡し」と応用研究への「問い直し」へ向けた構造改革をすすめる。第71回大会から専門領域枠を縮小化し、5つの応用部会のシンポジウムテーマ別に研究発表枠が設けられた。10年前に提唱された中・長期戦略（構造改革）は具現化しつつある。加えて重要視されたのは、体育・スポーツ・健康に係る政策立案・評価過程への組織的参画（Evidence-based Sports Policy=EBSP）であった。2020年3月政策検討・諮問委員会は「日本体育学会における日常的なEvidence Based Sport Policy (EBSP) 蓄積に向けた仕組みづくりに関する提言」を発表した。本提言では政策エビデンスを「つくる」「つかう」「つたえる」という3つの局面から想定される学会の構造改革プランが描かれている。しかしながら、このプランの背後には数多くの困難が待ち受けている。本シンポジウムでは、こうした困難を共有し、体育・スポーツ・健康科学の「社会還元」という目的を果たすためのEBSP開発の道筋を提示したい。

12:00 ～ 12:30

[本部企画-S1-4]国が推進する EBPMの課題と教育現場の実際

*熊谷 哲¹ (1. 公益財団法人 笹川スポーツ財団)

<演者略歴>

慶應義塾大学卒業。京都府議会議員（3期）を務めた後に内閣府に転じ、内閣官房行政改革推進本部審議官、内閣府規制・制度改革事務局長等を経て、2017年より笹川スポーツ財団へ。京都府福知山市特別参与、龍谷大学地域公共人材・政策開発リサーチセンター（LORC）客員研究員等を現任。

2011年に始まった政府の行政事業レビューでは、根拠やゴールが曖昧であったり、方便に過ぎなかったりする事業が次々に顕わになった。今日、EBPM（証拠に基づく政策立案）が強く推進されている背景には、レビューの現場における官僚の悲喜交々があり、より合理的で、より機能的な政府を希求する国民の声がある。予算編成プロセスでのロジックモデルの活用や、各評価段階での実践と並行したエビデンスの蓄積や実証研究など実務面に重きがおかれているのも、早急に具現化・定常化させたいという意志の現れと言えよう。

しかしながら、エビデンスの精緻化を進めたからといって、より良い政策が当然に得られるわけではない。現実には、EBPMならぬPBEM（政策に基づく証拠形成）と思しきロジックモデルやデータ解釈も散見される。また、政策形成段階では目標設定と達成方策の関係について議論されていても、実施現場や評価分析段階ではその意図するところが十分に咀嚼されていないケースも見受けられる。そうしたEBPM推進上の課題について、国の取り組みや教育現場における事例を引きながら、EBSP構築に資する問題提起を行いたい。

本部企画シンポジウム

■ 2021年9月7日(火) 10:30 ~ 12:30 | 会場2 Zoom

本部企画シンポジウム2／若手研究者に求められる体育・スポーツ・健康科学の社会的使命：「学際性」のリアルとロマン

コーディネーター：藤川 和俊（帝京平成大学）、中澤 雄飛（帝京大学）

指定討論者：菊 幸一（筑波大学）

2021年度、本学会の名称は日本体育・スポーツ・健康学会へと変更され、第71回大会では学際的研究の推進が標榜されている。その背景には、めまぐるしく変化する社会情勢に応じた体育・スポーツ・健康科学の学術的な知が求められていることが挙げられよう。複雑・多様化する社会の課題に対して個別の専門領域で蓄積された知見を応用ないしは統合し、社会の要請と対峙していくことはこれからの研究に欠かせない要素である。若手研究者委員会においても、「学際性」を主軸として今年度のシンポジウムの企画を検討してきたが、そこで浮かび上がってきたのは学際的研究における憧憬と現実に横たわる諸々の課題である。それは言わば、若手研究者が学際的研究に対して抱く「リアル」と「ロマン」である。よって、本シンポジウムでは学際的研究に挑まれている3名の演者と指定討論者の先生方をお招きし、研究の方法やそこでの経験、さらには現在の環境に至るまでの経緯等、研究のリアルとロマンを辿りつつ、多方面から「学際性」について探求することとした。それにより、体育・スポーツ・健康科学の現在地を把捉しつつ、若手研究者に課せられた社会的使命について展望したい。

10:30 ~ 11:10

[本部企画-S2-1] スポーツ科学研究における学際性の確立に向けて

*竹村 瑞穂¹ (1. 日本福祉大学)

11:10 ~ 11:50

[本部企画-S2-2] 外からアプローチする「スポーツ科学」と中から外へのアプローチの可能性

*工藤 裕子¹ (1. 中央大学)

11:50 ~ 12:30

[本部企画-S2-3] 二流柔道家の“ありのまま”研究半生に学際性はあるか？

運動、武道、そしてeスポーツへ

*松井 崇¹ (1. 筑波大学)

本部企画シンポジウム

本部企画シンポジウム2／若手研究者に求められる体育・スポーツ・健康科学の社会的使命：「学際性」のリアルとロマン

コーディネーター：藤川 和俊（帝京平成大学）、中澤 雄飛（帝京大学）

指定討論者：菊 幸一（筑波大学）

2021年9月7日(火) 10:30 ～ 12:30 会場2 (Zoom)

2021年度、本学会の名称は日本体育・スポーツ・健康学会へと変更され、第71回大会では学際的研究の推進が標榜されている。その背景には、めまぐるしく変化する社会情勢に応じた体育・スポーツ・健康科学の学術的な知が求められていることが挙げられよう。複雑・多様化する社会の課題に対して個別の専門領域で蓄積された知見を応用ないしは統合し、社会の要請と対峙していくことはこれからの研究に欠かせない要素である。若手研究者委員会においても、「学際性」を主軸として今年度のシンポジウムの企画を検討してきたが、そこで浮かび上がってきたのは学際的研究における憧憬と現実と横たわる諸々の課題である。それは言わば、若手研究者が学際的研究に対して抱く「リアル」と「ロマン」である。よって、本シンポジウムでは学際的研究に挑まれている3名の演者と指定討論者の先生方をお招きし、研究の方法やそこでの経験、さらには現在の環境に至るまでの経緯等、研究のリアルとロマンを辿りつつ、多方面から「学際性」について探求することとした。それにより、体育・スポーツ・健康科学の現在地を把握しつつ、若手研究者に課せられた社会的使命について展望したい。

10:30 ～ 11:10

[本部企画-S2-1]スポーツ科学研究における学際性の確立に向けて

*竹村 瑞穂¹ (1. 日本福祉大学)

<演者略歴>

筑波大学大学院博士課程単位取得満期退学。博士（体育科学）。早稲田大学助教を経て現職。専門はスポーツ哲学、スポーツ倫理学、生命倫理学。

体育、スポーツ、健康科学分野における「若手研究者の社会的使命」というテーマのもと、キャリアパス・リサーチパス、研究者の社会的使命という三つのトピックについて話題提供を行う。

キャリアパスでは、現在振り返ってみて大学院時代に養うべき力について、学際性という視点から読み解いていく。とくに、スポーツ科学領域における研究方法の確立についての困難性と必要性について指摘する。

また、リサーチパスにおいては、研究活動内容について学際性という視点から事例を紹介する。現在進めている、遺伝子ドーピングに関する研究プロジェクトにおいては、生命医科学領域・スポーツ科学領域・哲学領域という領域横断的な関係性を構築して進めていることから、なぜ学際性が求められるのかという点について、社会状況に照らし合わせて説明する。

最後に、（若手）研究者の使命の一つとして、自由な個の確立について提案したい。この点は、目的合理性に陥りがちな現代社会であるからこそリベラルアーツがより重要になることや、組織内における多様性という点にもつながるものである。

本部企画シンポジウム

本部企画シンポジウム2／若手研究者に求められる体育・スポーツ・健康科学の社会的使命：「学際性」のリアルとロマン

コーディネーター：藤川 和俊（帝京平成大学）、中澤 雄飛（帝京大学）

指定討論者：菊 幸一（筑波大学）

2021年9月7日(火) 10:30～12:30 会場2 (Zoom)

2021年度、本学会の名称は日本体育・スポーツ・健康学会へと変更され、第71回大会では学際的研究の推進が標榜されている。その背景には、めまぐるしく変化する社会情勢に応じた体育・スポーツ・健康科学の学術的な知が求められていることが挙げられよう。複雑・多様化する社会の課題に対して個別の専門領域で蓄積された知見を応用ないしは統合し、社会の要請と対峙していくことはこれからの研究に欠かせない要素である。若手研究者委員会においても、「学際性」を主軸として今年度のシンポジウムの企画を検討してきたが、そこで浮かび上がってきたのは学際的研究における憧憬と現実と横たわる諸々の課題である。それは言わば、若手研究者が学際的研究に対して抱く「リアル」と「ロマン」である。よって、本シンポジウムでは学際的研究に挑まれている3名の演者と指定討論者の先生方をお招きし、研究の方法やそこでの経験、さらには現在の環境に至るまでの経緯等、研究のリアルとロマンを辿りつつ、多方面から「学際性」について探求することとした。それにより、体育・スポーツ・健康科学の現在地を把握しつつ、若手研究者に課せられた社会的使命について展望したい。

11:10～11:50

[本部企画-S2-2]外からアプローチする「スポーツ科学」と中から外へのアプローチの可能性

*工藤 裕子¹ (1. 中央大学)

<演者略歴>

イタリア共和国ヴェネツィア大学より1998年Ph.D.（公共政策学）受領。愛知淑徳大学専任講師、早稲田大学専任講師・助教授等を経て2005年より中央大学法学部教授。中大フェンシング部長。フェンシング日本代表チームのテクニカル・スタッフとしてロンドン五輪に参加。イタリア観光乗馬協会（FITETREC-ANTE）会員。

「スポーツは出来ない」と周囲、特に教員から評価されていた演者は、高校卒業までは「体育・スポーツ苦手」な生徒の一人として人生最初のサイクルを終えた。しかし、自身の個人的なスポーツ経験、また、専門分野の研究との関係で得た語学や学術的な知識との幸運な組み合わせから、2010年から2015年の五年余にわたり、フェンシングの全日本代表チームの諸活動に参加する機会を得た。その際の経験、疑問、新しい知見などから、科研費の「スポーツ科学」分野において、学際的な研究を実施するに至った。この過程において、スポーツ科学の専門家、データ分析の専門家、スポーツ心理やその他の専門家と接する機会があったが、それらを統合することの必要性と同時に困難も認識した。また、スポーツ科学領域ではない公共経営などの国際学会において「スポーツ政策・マネジメント」に関する分科会を立ち上げた中で、学際連携および国際協力について見えてきたものもある。今回の報告では、これらから得られた知見を学会員と共有しつつ、国際水準と日本の相違、特に、日本の特徴や特殊性などについて指摘出来れば幸いである。

本部企画シンポジウム

本部企画シンポジウム2／若手研究者に求められる体育・スポーツ・健康科学の社会的使命：「学際性」のリアルとロマン

コーディネーター：藤川 和俊（帝京平成大学）、中澤 雄飛（帝京大学）

指定討論者：菊 幸一（筑波大学）

2021年9月7日(火) 10:30～12:30 会場2 (Zoom)

2021年度、本学会の名称は日本体育・スポーツ・健康学会へと変更され、第71回大会では学際的研究の推進が標榜されている。その背景には、めまぐるしく変化する社会情勢に応じた体育・スポーツ・健康科学の学術的な知が求められていることが挙げられよう。複雑・多様化する社会の課題に対して個別の専門領域で蓄積された知見を応用ないしは統合し、社会の要請と対峙していくことはこれからの研究に欠かせない要素である。若手研究者委員会においても、「学際性」を主軸として今年度のシンポジウムの企画を検討してきたが、そこで浮かび上がってきたのは学際的研究における憧憬と現実と横たわる諸々の課題である。それは言わば、若手研究者が学際的研究に対して抱く「リアル」と「ロマン」である。よって、本シンポジウムでは学際的研究に挑まれている3名の演者と指定討論者の先生方をお招きし、研究の方法やそこでの経験、さらには現在の環境に至るまでの経緯等、研究のリアルとロマンを辿りつつ、多方面から「学際性」について探求することとした。それにより、体育・スポーツ・健康科学の現在地を把握しつつ、若手研究者に課せられた社会的使命について展望したい。

11:50～12:30

[本部企画-S2-3] 二流柔道家の“ありのまま” 研究半生に学際性はあるか？

運動、武道、そしてeスポーツへ

*松井 崇¹ (1. 筑波大学)

＜演者略歴＞

筑波大学体育専門学群（柔道部）卒業。同大学院体育科学専攻（運動生化学）修了。博士（体育科学）。新潟医療福祉大学（学振特別研究員SPD）、スペイン国立カハール研究所神経生物学部門を経て2015年より現職。全柔連科学研究部基礎研究部門長、筑波大学スポーツイノベーション開発研究センタースポーツIT分野長を兼務。

哲学者ロラン・バルトは、「真の学際性は、1つのテーマを選びそのまわりに2、3の諸科学を集めるだけでは不十分で、どの学問領域にも属さない新しい対象を生み出すところにある」という。

私は二流柔道家としての競技生活を送った。競技につきものである疲労の正体を暴き、なんとか克服できないか。その思いひとつで学生時代から動物実験に取り組み、ポストク時代に細胞実験を取り入れ、今はそこに進化生物学的視点も盛り込みながら、運動疲労要因としての脳グリコーゲンの役割とそれを踏まえた疲労予防策を究明する「スポーツ神経生物学」を進める。

現職では新たに「柔道生理学」を開始し、今は武道の教育的効果に生化学で迫る「自他共栄の科学」に挑戦中である。「バーチャルスポーツ」としてのeスポーツが柔道や武道の教育効果をどこまで再現するのかにも興味が尽きない。

神経科学の父であるラモニ・カハールは、脳細胞を顕微鏡で観察する傍ら、天体望遠鏡で宇宙の星々を見つめ、この世界と人間の構造と機能に思いを馳せたという。一見無関係なものになぜか惹かれる。そうしたところで学際性は生まれるのかもしれない。体育学には昔も今も学際的な場であり続けて欲しい。

テーマ別シンポジウム

■ 2021年9月7日(火) 15:15 ~ 17:15 | 会場4 Zoom

| スポーツ文化研究部会【課題A】テーマ別シンポジウム／SDGsとスポーツとの接点を探る

コーディネーター：近藤 智靖（日本体育大学）、山崎 史恵（新潟医療福祉大学）

現在社会は、ヒト・モノ・カネが容易に国境を越えていく時代である。こうしたグローバルな社会は、人々に多くの利益をもたらすと同時に、負の問題を突きつけてくる。たとえば、新型コロナウイルスの急速な感染拡大や地球規模の気候変動はその一例でもある。

こうした動きに対して国連では2015年に「持続可能な開発目標（SDGs）」を採択し、各国で様々な取り組みがなされている。スポーツ関係者の中でもSDGsの理念を踏まえた、取り組みが多数生まれている。しかしながら、オリ・パラをはじめとしたスポーツのメガイベントでは、ジェンダー、インテグリティ、コマースリズム等の視点から様々な課題が指摘されており、スポーツの在り方や意味が問い直されている。今般の東京大会も同様の課題がみられている。

こうしたグローバル課題とスポーツの課題といった2つの側面がある中で、本部会ではシンポジウム（1年目）として、SDGsとスポーツを取り上げ、その接点について議論をしたいと考えている。「そもそも」といった根源的な問いを大切にし、たとえば、「そもそも両者の接点は本当にあり得るのか？」「そもそも双方にとっての利益は何か？」といった点から議論を展開する。

15:15 ~ 15:55

[スポーツ文化-SA-1] 戦略的基軸の変化

本質とその客観的可視化

*澤田 陽樹¹ (1. 一般財団法人グリーンスポーツアライアンス)

15:55 ~ 16:35

[スポーツ文化-SA-2] オリンピックから考えるSDGsとスポーツの関係性

*石坂 友司¹ (1. 奈良女子大学)

16:35 ~ 17:15

[スポーツ文化-SA-3] アダプテッド体育・スポーツがSDGsに果たす役割について

*澤江 幸則¹ (1. 筑波大学)

テーマ別シンポジウム | スポーツ文化研究部会 | 【課題A】 グローバル課題の解決に向けてスポーツから何が提案できるか

スポーツ文化研究部会【課題 A】 テーマ別シンポジウム／ SDGsとスポーツとの接点を探る

コーディネーター：近藤 智靖（日本体育大学）、山崎 史恵（新潟医療福祉大学）

2021年9月7日(火) 15:15 ～ 17:15 会場4 (Zoom)

現在社会は、ヒト・モノ・カネが容易に国境を越えていく時代である。こうしたグローバルな社会は、人々に多くの利益をもたらすと同時に、負の問題を突きつけてくる。たとえば、新型コロナウイルスの急速な感染拡大や地球規模の気候変動はその一例でもある。

こうした動きに対して国連では2015年に「持続可能な開発目標（SDGs）」を採択し、各国で様々な取り組みがなされている。スポーツ関係者の中でもSDGsの理念を踏まえた、取り組みが多数生まれている。しかしながら、オリ・パラをはじめとしたスポーツのメガイイベントでは、ジェンダー、インテグリティ、コマーシャリズム等の視点から様々な課題が指摘されており、スポーツの在り方や意味が問い直されている。今般の東京大会も同様の課題がみられている。

こうしたグローバル課題とスポーツの課題といった2つの側面がある中で、本部会ではシンポジウム（1年目）として、SDGsとスポーツを取り上げ、その接点について議論をしたいと考えている。「そもそも」といった根源的な問いを大切に、たとえば、「そもそも両者の接点は本当にあり得るのか？」「そもそも双方にとっての利益は何か？」といった点から議論を展開する。

15:15 ～ 15:55

[スポーツ文化-SA-1]戦略的基軸の変化

本質とその客観的可視化

*澤田 陽樹¹ (1. 一般財団法人グリーンスポーツアライアンス)

<演者略歴>

2002年京都大学経済学部卒、三菱商事入社。台湾・ドイツ駐在を経て2017年同社退職後、露LUKOILに勤務。現在は、(一財)グリーンスポーツアライアンス代表理事、(一社)京都スマートシティ推進協議会理事兼事務局長を務める。本年4月より三重大学大学院生物資源学研究科(生物圏生命科学専攻)博士後期課程に進学。

2018年12月 COP24 で国連 UNFCCCより発表された「Sports for Climate Action Framework」は国連広報センターの日本語訳を参照すると、地球の気温上昇を 1.5°C に抑え、気候変動の最悪の影響を回避するためには、政府、民間セクターおよび市民社会のあらゆるレベルでより野心的で実効的な気候変動対策が今すぐ必要であるという認識は普遍的であると綴られている。18のスポーツ団体（内日本から8団体）で発足した同 Frameworkは2021年現在で200以上の団体に膨らんでいる。パリ協定と SDGs は、私たちの気候を安定化させ平和と豊かさを広げ、数十億人に機会を与える大きな潜在性を備えたビジョンに富む 2 つの合意であると同 Frameworkは続ける。Ecologicalなもののみならず、Socioculturalな取組も含めて各国のスポーツ団体で SDGsに関連する様々な取組が行われているが、それぞれの取組の客観的評価は、例えば上記気候科学のそれとは種類の異なるものに見受けられるケースもある。本質は何か、そしてその客観的な可視化とはどうあるべきか考察する。なお、本発表では、前半に SDGsの概説を行い、後半では上記の点に触れていくこととする。

テーマ別シンポジウム | スポーツ文化研究部会 | 【課題A】 グローバル課題の解決に向けてスポーツから何が提案できるか

スポーツ文化研究部会【課題 A】 テーマ別シンポジウム／ SDGsとスポーツとの接点を探る

コーディネーター：近藤 智靖（日本体育大学）、山崎 史恵（新潟医療福祉大学）

2021年9月7日(火) 15:15 ～ 17:15 会場4 (Zoom)

現在社会は、ヒト・モノ・カネが容易に国境を越えていく時代である。こうしたグローバルな社会は、人々に多くの利益をもたらすと同時に、負の問題を突きつけてくる。たとえば、新型コロナウイルスの急速な感染拡大や地球規模の気候変動はその一例でもある。

こうした動きに対して国連では2015年に「持続可能な開発目標（SDGs）」を採択し、各国で様々な取り組みがなされている。スポーツ関係者の中でもSDGsの理念を踏まえた、取り組みが多数生まれている。しかしながら、オリ・パラをはじめとしたスポーツのメガイイベントでは、ジェンダー、インテグリティ、コマーシャルリズム等の視点から様々な課題が指摘されており、スポーツの在り方や意味が問い直されている。今般の東京大会も同様の課題がみられている。

こうしたグローバル課題とスポーツの課題といった2つの側面がある中で、本部会ではシンポジウム（1年目）として、SDGsとスポーツを取り上げ、その接点について議論をしたいと考えている。「そもそも」といった根源的な問いを大切に、たとえば、「そもそも両者の接点は本当にあり得るのか？」「そもそも双方にとっての利益は何か？」といった点から議論を展開する。

15:55 ～ 16:35

[スポーツ文化-SA-2]オリンピックから考える SDGsとスポーツの関係性

*石坂 友司¹ (1. 奈良女子大学)

<演者略歴>

奈良女子大学准教授。専門分野はスポーツ社会学。オリンピックをはじめとしたスポーツ・メガイイベントが地域・都市・国家に及ぼす影響について研究。著書に『現代オリンピックの発展と危機 1940-2020』（人文書院）、共編著に『未完のオリンピック』（かもがわ出版）、『〈ニッポン〉のオリンピック』（青弓社）など。

17のゴールを持つ SDGs達成に向けた取り組みが多様な領域で開始されている。スポーツとの接点もさまざまに考えられるところだが、「開発と平和のためのスポーツ」（SDP）に関する領域を除けば、議論が進んでいるとは言いがたい。スポーツ界では未だ、SDGsを引き受けるべき自らの課題として認識していないのが現状ではないだろうか。本報告ではこのことの意味を考えるために、近年 SDGsの推進者としても位置づけられているオリ・パラ、特にオリンピックを題材にして考察を加えたい。IOCは自らの使命と役割について環境問題を柱の一つに据え、スポーツにおける持続可能性について議論してきた経緯を持つ。また、認知度は低いものの、東京大会では持続可能な大会の準備・運営に向けて5つの主要テーマが掲げられてきた。最終局面で別の意味の持続可能性が問われているオリンピックだが、開催準備を通して、ジェンダー平等や都市開発のあり方など、スポーツを通して見える社会に改善すべき点が多く含まれていることを明らかにしてきた。SDGsがなぜスポーツに必要なのかに加え、議論が進まないことにどのような問題がはらまれているのかについて考えたい。

テーマ別シンポジウム | スポーツ文化研究部会 | 【課題A】 グローバル課題の解決に向けてスポーツから何が提案できるか

スポーツ文化研究部会【課題A】 テーマ別シンポジウム／SDGsとスポーツとの接点を探る

コーディネーター：近藤 智靖（日本体育大学）、山崎 史恵（新潟医療福祉大学）

2021年9月7日(火) 15:15 ～ 17:15 会場4 (Zoom)

現在社会は、ヒト・モノ・カネが容易に国境を越えていく時代である。こうしたグローバルな社会は、人々に多くの利益をもたらすと同時に、負の問題を突きつけてくる。たとえば、新型コロナウイルスの急速な感染拡大や地球規模の気候変動はその一例でもある。

こうした動きに対して国連では2015年に「持続可能な開発目標（SDGs）」を採択し、各国で様々な取り組みがなされている。スポーツ関係者の中でもSDGsの理念を踏まえた、取り組みが多数生まれている。しかしながら、オリ・パラをはじめとしたスポーツのメガイイベントでは、ジェンダー、インテグリティ、コマーシャリズム等の視点から様々な課題が指摘されており、スポーツの在り方や意味が問い直されている。今般の東京大会も同様の課題がみられている。

こうしたグローバル課題とスポーツの課題といった2つの側面がある中で、本部会ではシンポジウム（1年目）として、SDGsとスポーツを取り上げ、その接点について議論をしたいと考えている。「そもそも」といった根源的な問いを大切に、たとえば、「そもそも両者の接点は本当にあり得るのか？」「そもそも双方にとっての利益は何か？」といった点から議論を展開する。

16:35 ～ 17:15

[スポーツ文化-SA-3]アダプテッド体育・スポーツがSDGsに果たす役割について

*澤江 幸則¹ (1. 筑波大学)

<演者略歴>

筑波大学体育系准教授。筑波大学大学院修士課程体育学専攻修了後、横浜市北部地域療育センターで障害児の療育に携わっていた。その後東北大学大学院博士課程に編入学、修了。文京学院大学を経て、現職に至る。専門はアダプテッド体育・スポーツで、特に発達障害児の運動発達支援、インクルーシブ体育の実践に詳しい。

私が専門とするアダプテッド体育・スポーツ領域が、SDGsが掲げる目標に貢献できる可能性として、2つの面があると考えている。ひとつは、本研究領域はそもそも障害のある者に対して、運動やスポーツ、体育機会を保障すべき、アドボカシーとして機能を果たしてきた。そのため、本領域の研究・実践の充実を図ることは、SDGsの目標3（保健）や目標4（教育）に加え、目標8（成長・雇用）や目標10（不平等）、目標11（都市）の達成に寄与する可能性がある。加えて本研究領域は、障害のある者への体育・スポーツ指導からの帰納的枠組みとして、「その人に合わせて」スポーツや体育を変更し運動のもつ本来の楽しさを享受できる方法論（Adaptationアダプテッド）を確立してきた。そしてアダプテッドは、対象を障害だけにとどめず、体育・スポーツ場面から排除されている人たちを包摂する手段として活用されるようになった。こうした実践・研究は、先にあげた目標のなかの対象を拡充することに貢献するだろう。しかしアダプテッドに関する我が国の体育・スポーツ実践には、いまだ多くの課題が残されている。その解決のためには、本研究領域にとじない複合的な視点からの議論が求められることになる。

テーマ別シンポジウム

■ 2021年9月7日(火) 15:15 ~ 17:15 | 会場5 Zoom

学校保健体育研究部会【課題A】テーマ別シンポジウム／大学体育の社会的使命とその実現可能性を考える：歴史的変遷からみる大学体育の現在地

コーディネーター：高橋 浩二（長崎大学）、木村 華織（東海学園大学）

本シンポジウムでは、「大学体育の授業をいかに良質なものにするか」という課題を達成するために、3年間のテーマ「大学体育から提案する質の高い学校保健体育の提供、実現」を設定した。1年目は「歴史的変遷からみる大学体育の現在地」について確認する。1つ目は大学体育授業の制度や仕組みの変遷である。木内氏から、高等教育改革に伴う要請を受けて教養教育としての保健体育の授業がどのように実施され、大学体育に関わる知が集積されてきたのかについて検討して頂く。2つ目は大学体育授業の実践内容及び大学体育の教員養成の変遷である。金谷氏から、大学体育の独自性や可能性について検討し、大学教育における体育の教育的価値や大学体育に対する内外の評価を洗い出して頂く。3つ目は大学体育授業の運営及びそれを通じた教員の組織作りの変遷である。高村氏から、大学体育の運営や教育・研究を通じた養成の内容を、共通の知見として提出するために必要な事柄を示して頂く。以上の検討から、これまでの大学教育の制度や大学体育の実践によって積み重ねられてきた知を歴史的変遷から読み直し、現代社会に求められる大学体育のあり方について探究する。

15:15 ~ 15:55

[学校保健体育-SA-1] わが国の高等教育改革にともなう大学体育の変遷とその実践に関する知見集積

*木内 敦詞¹ (1. 筑波大学)

15:55 ~ 16:35

[学校保健体育-SA-2] 大学体育授業の実践内容および大学体育の教員養成の変遷

*金谷 麻理子¹ (1. 筑波大学)

16:35 ~ 17:15

[学校保健体育-SA-3] 日本福祉大学における体育授業の運営および教員の組織づくり

*高村 秀史¹ (1. 日本福祉大学)

テーマ別シンポジウム | 学校保健体育研究部会 | 【課題A】大学体育の授業をいかに良質なものにするか

学校保健体育研究部会【課題A】テーマ別シンポジウム／大学体育の社会的使命とその実現可能性を考える：歴史的変遷からみる大学体育の現在地

コーディネーター：高橋 浩二（長崎大学）、木村 華織（東海学園大学）

2021年9月7日(火) 15:15 ～ 17:15 会場5 (Zoom)

本シンポジウムでは、「大学体育の授業をいかに良質なものにするか」という課題を達成するために、3年間のテーマ「大学体育から提案する質の高い学校保健体育の提供、実現」を設定した。1年目は「歴史的変遷からみる大学体育の現在地」について確認する。1つ目は大学体育授業の制度や仕組みの変遷である。木内氏から、高等教育改革に伴う要請を受けて教養教育としての保健体育の授業がどのように実施され、大学体育に関わる知が集積されてきたのかについて検討して頂く。2つ目は大学体育授業の実践内容及び大学体育の教員養成の変遷である。金谷氏から、大学体育の独自性や可能性について検討し、大学教育における体育の教育的価値や大学体育に対する内外の評価を洗い出して頂く。3つ目は大学体育授業の運営及びそれを通じた教員の組織作りの変遷である。高村氏から、大学体育の運営や教育・研究を通じた養成の内容を、共通の知見として提出するために必要な事柄を示して頂く。以上の検討から、これまでの大学教育の制度や大学体育の実践によって積み重ねられてきた知を歴史的変遷から読み直し、現代社会に求められる大学体育のあり方について探究する。

15:15 ～ 15:55

[学校保健体育-SA-1]わが国の高等教育改革にともなう大学体育の変遷とその実践に関する知見集積

*木内 敦詞¹ (1. 筑波大学)

<演者略歴>

筑波大学体育系教授。大阪工業大学准教授を経て2014年より現職。専門は大学体育論。筑波大学と鹿屋体育大学による3年制博士課程「大学体育スポーツ高度化共同専攻」に従事。（公社）全国大学体育連合常務理事／研究部長。「大学体育スポーツ学研究（旧大学体育学）」「大学教育学会誌」「スポーツパフォーマンス研究」編集委員。

大学体育は、わが国の高等教育改革の荒波の中でどのように変遷してきたのか。1991年の大学設置基準大綱化以降、多くの大学で体育の必修から選択への移行が進み、実技と講義からなる演習授業が増え、シラバス公開やFD授業アンケートの実施は常態化した。このように、大学体育が苦境に立たされたり、教員の負担が増えたことは事実だが、その一方で勝ち得た成果もある。その1つに、大学体育の実践に関する学術的知見の集積を挙げることができる。大学体育は何を学ぶ科目なのか、どのような体育授業がどのような点で高い学修効果を発揮するのか、などに関する「大学体育の授業研究」の蓄積である。これは、1990年代後半から米国高等教育界で広まった Scholarship of Teaching and Learning (SoTL) の概念と一致する。SoTLとは、専門分野の研究と同様に、教育活動を論文として公表し他者からの批判的評価にさらすことで、教授・学習過程のレベルを向上させようという学術的探究をさす。高等教育に体育が堅固に位置づくためには、大学体育における SoTLの推進は必須であることを、最後に主張したい。

テーマ別シンポジウム | 学校保健体育研究部会 | 【課題A】大学体育の授業をいかに良質なものにするか

学校保健体育研究部会【課題A】テーマ別シンポジウム／大学体育の社会的使命とその実現可能性を考える：歴史的変遷からみる大学体育の現在地

コーディネーター：高橋 浩二（長崎大学）、木村 華織（東海学園大学）

2021年9月7日(火) 15:15 ～ 17:15 会場5 (Zoom)

本シンポジウムでは、「大学体育の授業をいかに良質なものにするか」という課題を達成するために、3年間のテーマ「大学体育から提案する質の高い学校保健体育の提供、実現」を設定した。1年目は「歴史的変遷からみる大学体育の現在地」について確認する。1つ目は大学体育授業の制度や仕組みの変遷である。木内氏から、高等教育改革に伴う要請を受けて教養教育としての保健体育の授業がどのように実施され、大学体育に関わる知が集積されてきたのかについて検討して頂く。2つ目は大学体育授業の実践内容及び大学体育の教員養成の変遷である。金谷氏から、大学体育の独自性や可能性について検討し、大学教育における体育の教育的価値や大学体育に対する内外の評価を洗い出して頂く。3つ目は大学体育授業の運営及びそれを通じた教員の組織作りの変遷である。高村氏から、大学体育の運営や教育・研究を通じた養成の内容を、共通の知見として提出するために必要な事柄を示して頂く。以上の検討から、これまでの大学教育の制度や大学体育の実践によって積み重ねられてきた知を歴史的変遷から読み直し、現代社会に求められる大学体育のあり方について探究する。

15:55 ～ 16:35

[学校保健体育-SA-2]大学体育授業の実践内容および大学体育の教員養成の変遷

*金谷 麻理子¹ (1. 筑波大学)

<演者略歴>

筑波大学体育系准教授。鹿屋体育大学助手を経て2002年に筑波大学に着任。専門種目は体操競技。筑波大学に着任以降現在まで主に大学体育における実技授業を担当すると共に、2017～2019年度には博士課程（大学体育スポーツ高度化専攻）にも在籍し、自身の教育活動を学問的見地から分析することに継続的に取り組んでいる。

自身は大学体育で何を教えることができるのか、その目標を達成するためにはどのようなプログラムを構成すべきなのか、また受講生の学修効果をより高めるためにはどのような能力の向上に努めるべきなのか、さらにはそもそも大学体育の独自性とは何か…。これらは筆者がこれまで大学体育を担当する中で常に自問自答してきた問いである。

今回はこのような背景をもつ筆者が、自身が大学教員になるまでのプロセスや、大学体育で専門あるいは非専門のスポーツ種目を通して行ってきた教育活動、大学院において大学体育教員養成の一端に携わっている現状、さらには現職教員でありながら大学体育教員の養成課程で学んだ経験にもとづいて、大学体育の学修内容とその効果、そしてそれらを実現するための要因について検討した結果を発表する。この発表をきっかけに、体育の中核的な学修活動のひとつであるスポーツの運動学習に着目した場合の大学体育の学修内容とその効果がより広く理解され、それに関連して今後の大学体育教員の養成方法について議論を深めていければ幸いである。

テーマ別シンポジウム | 学校保健体育研究部会 | 【課題A】大学体育の授業をいかに良質なものにするか

学校保健体育研究部会【課題A】テーマ別シンポジウム／大学体育の社会的使命とその実現可能性を考える：歴史的変遷からみる大学体育の現在地

コーディネーター：高橋 浩二（長崎大学）、木村 華織（東海学園大学）

2021年9月7日(火) 15:15 ～ 17:15 会場5 (Zoom)

本シンポジウムでは、「大学体育の授業をいかに良質なものにするか」という課題を達成するために、3年間のテーマ「大学体育から提案する質の高い学校保健体育の提供、実現」を設定した。1年目は「歴史的変遷からみる大学体育の現在地」について確認する。1つ目は大学体育授業の制度や仕組みの変遷である。木内氏から、高等教育改革に伴う要請を受けて教養教育としての保健体育の授業がどのように実施され、大学体育に関わる知が集積されてきたのかについて検討して頂く。2つ目は大学体育授業の実践内容及び大学体育の教員養成の変遷である。金谷氏から、大学体育の独自性や可能性について検討し、大学教育における体育の教育的価値や大学体育に対する内外の評価を洗い出して頂く。3つ目は大学体育授業の運営及びそれを通じた教員の組織作りの変遷である。高村氏から、大学体育の運営や教育・研究を通じた養成の内容を、共通の知見として提出するために必要な事柄を示して頂く。以上の検討から、これまでの大学教育の制度や大学体育の実践によって積み重ねられてきた知を歴史的変遷から読み直し、現代社会に求められる大学体育のあり方について探究する。

16:35 ～ 17:15

[学校保健体育-SA-3]日本福祉大学における体育授業の運営および教員の組織づくり

*高村 秀史¹ (1. 日本福祉大学)

<演者略歴>

日本福祉大学全学教育センター助教。専門はICTやキャンプを活用した学び。所属大学では全学部に跨る一般体育授業のコーディネートを担当。FD研修会等を開催し、非常勤、専任を問わず学びあえる組織づくりに取り組んでいる。また、高校教員時代の実践経験を活かし、初年次教育に資する体育授業の展開にも取り組んでいる。

日本福祉大学（以下、本学）では、大学設置基準の「大綱化」による必修から選択科目へ移行する状況を迎える以前から、大学体育の在り方について検討を行ってきた。目的は、大学で学ぶに値する体育の在り方の検討であり、体育科目を「必修」として存続するための学内理解を求めるための改革であった。検討の結果、大学体育の成果の到達点として「20歳の学力」を設定し、一般体育授業を運営している。

現在、多くの大学で体育授業を非常勤講師が担当する現状がある一方、非常勤講師の担い手は年々減少している。本学においても、初年次の一般体育授業の8割を大学での教育活動未経験者を含む、非常勤講師に委嘱している。「20歳の学力」の考え方に基づく質の高い学びを学生に提供するためには、専任、非常勤を問わず、体育授業の理念の理解をはじめ、授業実戦や問題点の共有、解決方法などをお互いに学び合い、研鑽を重ねる必要があった。本報告では、本学における「20歳の学力」を柱とした体育授業の運営と、コミュニケーションを深め、学びあえる教員の組織づくりのために開催しているFD研修会や懇親会等の取り組みについて報告を行う。

テーマ別シンポジウム

■ 2021年9月7日(火) 15:15 ~ 17:15 | 会場6 Zoom

競技スポーツ研究部会【課題A】テーマ別シンポジウム／トップアスリート養成の拠点としての大学の意義と問題点

コーディネーター：荒井 弘和（法政大学）、須甲 理生（日本女子体育大学）

本シンポジウムでは、トップアスリート養成の拠点としての大学の意義と問題点について、4つの視点（①体育・スポーツ系大学、②一般大学、③女子学生、④UNIVAS）から議論する。具体的には、以下のような論点を考えている。体育・スポーツ系大学と一般大学には、それぞれどのような機能が求められており、両者はどのように連携すればよいのか。トップアスリート養成の拠点として大学が位置づくならば、どのような組織と、どのように協働することが期待されるのか。学生アスリートは、どのようなコーチから、どのようなコーチングを受けているのか。そして、そのコーチを取り巻く環境はどのように変わっているのか。大幅な発展が見込まれている女子学生アスリートを取り巻く環境は、今後どのように変化してゆくのか。大学は、どのようなトップアスリートを養成すればよいのか。そしてそのために、大学はどのような支援を行うべきなのか。

批判的でありつつも、前向きに、そして専門領域の越境を恐れぬシームレスな対話を期待したい。

15:15 ~ 15:45

[競技スポーツ-SA-1] 体育・スポーツ系大学の視点から

*山田 永子¹ (1. 筑波大学)

15:45 ~ 16:15

[競技スポーツ-SA-2] 一般大学の視点から

*田原 陽介¹ (1. 青山学院大学)

16:15 ~ 16:45

[競技スポーツ-SA-3] 女子学生のトップアスリート養成の視点から

*川本 竜史¹ (1. 大東文化大学)

16:45 ~ 17:15

[競技スポーツ-SA-4] UNIVASの視点から

*谷釜 尋徳¹ (1. 東洋大学)

テーマ別シンポジウム | 競技スポーツ研究部会 | 【課題A】 トップアスリート養成をいかに効果的に行うか

競技スポーツ研究部会【課題A】 テーマ別シンポジウム／トップアスリート養成の拠点としての大学の意義と問題点

コーディネーター：荒井 弘和（法政大学）、須甲 理生（日本女子体育大学）

2021年9月7日(火) 15:15 ～ 17:15 会場6 (Zoom)

本シンポジウムでは、トップアスリート養成の拠点としての大学の意義と問題点について、4つの視点（①体育・スポーツ系大学、②一般大学、③女子学生、④UNIVAS）から議論する。具体的には、以下のような論点を考えている。体育・スポーツ系大学と一般大学には、それぞれどのような機能が求められており、両者はどのように連携すればよいのか。トップアスリート養成の拠点として大学が位置づくならば、どのような組織と、どのように協働することが期待されるのか。学生アスリートは、どのようなコーチから、どのようなコーチングを受けているのか。そして、そのコーチを取り巻く環境はどのようになっているのか。大幅な発展が見込まれている女子学生アスリートを取り巻く環境は、今後どのように変化してゆくのか。大学は、どのようなトップアスリートを養成すればよいのか。そしてそのために、大学はどのような支援を行うべきなのか。

批判的でありつつも、前向きに、そして専門領域の越境を恐れぬシームレスな対話を期待したい。

15:15 ～ 15:45

[競技スポーツ-SA-1] 体育・スポーツ系大学の視点から

*山田 永子¹ (1. 筑波大学)

<演者略歴>

元日本代表女子ハンドボール選手、元日本代表女子コーチ、元日本代表女子ジュニアコーチ。

現在、筑波大学女子ハンドボール部監督、国際ハンドボール連盟Handball @ School（学校体育におけるハンドボール）講師を務める。

筑波大学体育系は、「競技力向上に関する研究、その研究成果を生かした競技実践・指導実践、そして指導者養成が高度なレベルで三位一体となって機能する高度競技力強化拠点」として、わが国の競技力向上に寄与することを使命のひとつとして掲げている。研究、競技実践、指導実践をどのように循環させているのかを体育系と自身のチームそれぞれで紹介する。体育系では、学群、大学院（前期・後期）の教育プログラムと課外活動によって、学生アスリートおよび大学院生コーチが学びと実践の好循環を実現している。自身が監督を務める女子ハンドボール部では、学生の目標を最大限サポートするために様々な取り組みを行っている。ほかに、ハンドボール競技におけるヨーロッパの学生アスリートの現状など紹介した後、自身が考える学生トップアスリートを取り巻く課題を挙げていきたい。

テーマ別シンポジウム | 競技スポーツ研究部会 | 【課題A】 トップアスリート養成をいかに効果的に行うか

競技スポーツ研究部会【課題A】 テーマ別シンポジウム／トップアスリート養成の拠点としての大学の意義と問題点

コーディネーター：荒井 弘和（法政大学）、須甲 理生（日本女子体育大学）

2021年9月7日(火) 15:15 ～ 17:15 会場6 (Zoom)

本シンポジウムでは、トップアスリート養成の拠点としての大学の意義と問題点について、4つの視点（①体育・スポーツ系大学、②一般大学、③女子学生、④UNIVAS）から議論する。具体的には、以下のような論点を考えている。体育・スポーツ系大学と一般大学には、それぞれどのような機能が求められており、両者はどのように連携すればよいのか。トップアスリート養成の拠点として大学が位置づくならば、どのような組織と、どのように協働することが期待されるのか。学生アスリートは、どのようなコーチから、どのようなコーチングを受けているのか。そして、そのコーチを取り巻く環境はどのようになっているのか。大幅な発展が見込まれている女子学生アスリートを取り巻く環境は、今後どのように変化してゆくのか。大学は、どのようなトップアスリートを養成すればよいのか。そしてそのために、大学はどのような支援を行うべきなのか。

批判的でありつつも、前向きに、そして専門領域の越境を恐れぬシームレスな対話を期待したい。

15:45 ～ 16:15

[競技スポーツ-SA-2]一般大学の視点から

*田原 陽介¹ (1. 青山学院大学)

<演者略歴>

青山学院大学 コミュニティ人間科学部 准教授 陸上競技部短距離ブロック コーチ。

日本オリンピック委員会強化スタッフ(マネジメント)。

日本陸上競技連盟 ダイヤモンドアスリート コーディネーター。

2012年に EUが、デュアルキャリアをはじめて提唱してから、日本でも「スポーツ振興計画」にて、デュアルキャリアの理解が進んできた。アスリートの多様な社会進出を支えるには、アスリートの大学進学においては、体育・スポーツ系大学(学部)以外の選択肢も用意する必要があるが、同時にアスリートを養成する環境が問題となってくる。体育・スポーツ系大学(学部)は、スポーツ科学の研究施設、そしてトレーニング施設など、競技力推進のための施設を有しており、人的資源、情報資源も含めて国際競技力向上のための環境が整えられているケースが多い。一方で、体育・スポーツ系大学以外の一般大学においては、そのような環境が整っている大学ばかりではなく、学内のスポーツ資源はもとより学外との連携も必要となってくる。

本報告では、一般大学がトップアスリートの養成についてどのような現状や課題を有しているのか、いくつかの大学を事例に考察したい。

テーマ別シンポジウム | 競技スポーツ研究部会 | 【課題A】 トップアスリート養成をいかに効果的に行うか

競技スポーツ研究部会【課題A】 テーマ別シンポジウム／トップアスリート養成の拠点としての大学の意義と問題点

コーディネーター：荒井 弘和（法政大学）、須甲 理生（日本女子体育大学）

2021年9月7日(火) 15:15 ～ 17:15 会場6 (Zoom)

本シンポジウムでは、トップアスリート養成の拠点としての大学の意義と問題点について、4つの視点（①体育・スポーツ系大学、②一般大学、③女子学生、④UNIVAS）から議論する。具体的には、以下のような論点を考えている。体育・スポーツ系大学と一般大学には、それぞれどのような機能が求められており、両者はどのように連携すればよいのか。トップアスリート養成の拠点として大学が位置づくならば、どのような組織と、どのように協働することが期待されるのか。学生アスリートは、どのようなコーチから、どのようなコーチングを受けているのか。そして、そのコーチを取り巻く環境はどのように変わっているのか。大幅な発展が見込まれている女子学生アスリートを取り巻く環境は、今後どのように変化してゆくのか。大学は、どのようなトップアスリートを養成すればよいのか。そしてそのために、大学はどのような支援を行うべきなのか。

批判的でありつつも、前向きに、そして専門領域の越境を恐れぬシームレスな対話を期待したい。

16:15 ～ 16:45

[競技スポーツ-SA-3]女子学生のトップアスリート養成の視点から

*川本 竜史¹ (1. 大東文化大学)

<演者略歴>

慶應義塾大学環境情報学部卒（1996年）、東京大学大学院総合文化研究科博士課程修了（2001年）、大東文化大学スポーツ・健康科学部講師（2005年～）、教授（2016年～現在に至る）、（一財）全日本大学女子サッカー連盟理事長（2014年～現在に至る）。

2011年ドイツワールドカップの優勝によって一躍注目を浴びた女子サッカー。2021年9月には日本初のプロリーグである WEリーグが開幕する。一方、女子サッカー部のある大学は全国でも90校程度であり、登録選手数も2,000名程度という現状にある。Jリーグ選手や日本代表選手を数多く輩出している男子と比べると足元にも及ばない。大学が女子サッカーの普及・発展に更なる貢献を果たすための方向性と方法について、皆さまとともに考えたい。

テーマ別シンポジウム | 競技スポーツ研究部会 | 【課題A】 トップアスリート養成をいかに効果的に行うか

競技スポーツ研究部会【課題A】 テーマ別シンポジウム／トップアスリート養成の拠点としての大学の意義と問題点

コーディネーター：荒井 弘和（法政大学）、須甲 理生（日本女子体育大学）

2021年9月7日(火) 15:15 ～ 17:15 会場6 (Zoom)

本シンポジウムでは、トップアスリート養成の拠点としての大学の意義と問題点について、4つの視点（①体育・スポーツ系大学、②一般大学、③女子学生、④UNIVAS）から議論する。具体的には、以下のような論点を考えている。体育・スポーツ系大学と一般大学には、それぞれどのような機能が求められており、両者はどのように連携すればよいのか。トップアスリート養成の拠点として大学が位置づくならば、どのような組織と、どのように協働することが期待されるのか。学生アスリートは、どのようなコーチから、どのようなコーチングを受けているのか。そして、そのコーチを取り巻く環境はどのようにになっているのか。大幅な発展が見込まれている女子学生アスリートを取り巻く環境は、今後どのように変化してゆくのか。大学は、どのようなトップアスリートを養成すればよいのか。そしてそのために、大学はどのような支援を行うべきなのか。

批判的でありつつも、前向きに、そして専門領域の越境を恐れぬシームレスな対話を期待したい。

16:45 ～ 17:15

[競技スポーツ-SA-4]UNIVASの視点から

*谷釜 尋徳¹ (1. 東洋大学)

<演者略歴>

東洋大学 法学部 教授。

UNIVAS（一般社団法人 大学スポーツ協会）デュアルキャリア委員会 研修部会員。

歴史的にみて、日本の大学は「トップアスリート養成の拠点」としての機能を担ってきた。今日においても、大学在学中に国際舞台にチャレンジするアスリートは多く、大学で蓄えた競技力をもって卒業後に華々しく活躍する例も少なくない。

しかしながら、学生アスリートは、競技面のほかにも学業との両立やキャリア形成をはじめ、在学中に種々の問題に直面しているのが現状である。今後も、大学スポーツがトップアスリート養成の拠点たりえるには、解決すべき課題が山積しているといえよう。

2019年に発足した UNIVAS（大学スポーツ協会）は、大学スポーツを総合的に振興すべく誕生した競技横断的な組織である。UNIVASは、「卓越性を有する人材の育成」を理念の一つに掲げ、トップアスリートを含めたすべての学生アスリートを対象に、様々なサポート事業を展開している。

本報告では、大学がトップアスリート養成というテーマとどのように向き合っていくべきなのか、大学スポーツを俯瞰的に捉える UNIVASの視点から考察したい。

テーマ別シンポジウム

■ 2021年9月7日(火) 15:15 ~ 17:15 | 会場7 Zoom

生涯スポーツ研究部会【課題A】テーマ別シンポジウム／共生社会と生涯スポーツは共存できるのか：スポーツのパラダイムチェンジが共存への鍵

コーディネーター：内田 匡輔（東海大学）

本テーマ研究部会では、「生涯スポーツ」と「共生社会」を軸に検討し、「共生社会」の捉え方が漠然としているのではないかという結論を得た。そこでまず「共生社会」とはどのようなものかという、根本的な話し合いを持つことを目的に企画している。その上で、共生社会において生涯スポーツは、どのような機能を果たすのかを検討する必要があると考えた。テーマにある「共存できるのか」には、生涯スポーツが共生社会で果たす役割や、具体的に何ができるのか、またはできないのかを含め問い直す意味を込めている。

このような趣旨を踏まえ、パラリンピック後の共生社会について、筑波大学の菊幸一氏から発表をいただく。次に、NPO法人スマイルクラブ代表、大浜三平氏から、誰もが地域でスポーツを楽しめる環境づくりと共生社会についてお話をいただく。重ねて、東京未来大学の藤後悦子氏から、スポーツの指導現場で起こっている様々な壁や問題について保護者の視点から、共生社会の理想と現実についてお話をいただく。発表を踏まえ、共生社会と生涯スポーツの共存について意見交換し、どのようなスポーツのパラダイムチェンジが、具体的に必要となるのかについて討議を深めてゆく。

15:15 ~ 15:55

[生涯スポーツ-SA-1] 身体と共生社会

スポーツのパラダイムチェンジに向けて

*菊 幸一¹ (1. 筑波大学)

15:55 ~ 16:35

[生涯スポーツ-SA-2] 共生社会実現を目指す、総合型地域スポーツクラブ事例報告*大浜 三平¹ (1. NPO法人スマイルクラブ)

16:35 ~ 17:15

[生涯スポーツ-SA-3] 子どもも親も安心できるスポーツ環境の構築へ向けて*藤後 悦子¹ (1. 東京未来大学)

テーマ別シンポジウム | 生涯スポーツ研究部会 | 【課題A】 共生社会の実現に向けた生涯スポーツ政策と協働システムをいかに構築するか

生涯スポーツ研究部会【課題 A】 テーマ別シンポジウム／共生社会と生涯スポーツは共存できるのか：スポーツのパラダイムチェンジが共存への鍵

コーディネーター：内田 匡輔（東海大学）

2021年9月7日(火) 15:15 ～ 17:15 会場7 (Zoom)

本テーマ研究部会では、「生涯スポーツ」と「共生社会」を軸に検討し、「共生社会」の捉え方が漠然としているのではないかという結論を得た。そこでまず「共生社会」とはどのようなものかという、根本的な話し合いを持つことを目的に企画している。その上で、共生社会において生涯スポーツは、どのような機能を果たすのかを検討する必要があると考えた。テーマにある「共存できるのか」には、生涯スポーツが共生社会で果たす役割や、具体的に何ができるのか、またはできないのかを含め問い直す意味を込めている。

このような趣旨を踏まえ、パラリンピック後の共生社会について、筑波大学の菊幸一氏から発表をいただく。次に、NPO法人スマイルクラブ代表、大浜三平氏から、誰もが地域でスポーツを楽しめる環境づくりと共生社会についてお話をいただく。重ねて、東京未来大学の篠後悦子氏から、スポーツの指導現場で起こっている様々な壁や問題について保護者の視点から、共生社会の理想と現実についてお話をいただく。

発表を踏まえ、共生社会と生涯スポーツの共存について意見交換し、どのようなスポーツのパラダイムチェンジが、具体的に必要となるのかについて討議を深めてゆく。

15:15 ～ 15:55

[生涯スポーツ-SA-1]身体と共生社会

スポーツのパラダイムチェンジに向けて

*菊 幸一¹ (1. 筑波大学)

<演者略歴>

1957年富山県生まれ。筑波大学大学院博士課程体育科学研究科単位取得退学。体育社会学、スポーツ社会学を専攻。九州大学、奈良女子大学を経て、現在、筑波大学体育系教授。教育学博士（筑波大学）。日本体育・スポーツ・健康学会副会長、日本スポーツ社会学会会長、文部科学省学習指導要領作成協力者（高校保健体育、座長）など。

近代スポーツは、それまでのスポーツと異なり、明らかに自由な身体を「あえて」不自由（＝障害者）にするルール（拘束）を設けることで、身体の楽しさを安全な状態で長引かせる享受の仕方として発明された。それが特権階級（レジャークラス）から労働者階級まで、等しく享受されるべきであるとするのが「みんなのスポーツ」である。これに対して、生涯スポーツは、その身体の不自由さの許容範囲をライフステージに応じて自由に改変し、スポーツの自己目的的な楽しさ享受自体が、全生涯にわたる自己開発享受につながる自発的な学習を導くとする概念である。そこでは、結果を求めているながら、その過程自体を重視するパラダイムが生まれる。共生社会とは、誰しもが、どのような年齢や環境においてもそのような学習が保障されることを認め合い、QOLを実現する楽しさを共に享受する社会であるとすれば、生涯スポーツにおけるスポーツの概念自体がそれを内包していると考えることができよう。したがって、ここでの議論は、現代スポーツが、なぜ競争の結果のみを社会的に重要視し、本来の共生社会を実現する社会的パラダイムを見失うことになったのかを明らかにすることである。

テーマ別シンポジウム | 生涯スポーツ研究部会 | 【課題A】 共生社会の実現に向けた生涯スポーツ政策と協働システムをいかに構築するか

生涯スポーツ研究部会【課題 A】 テーマ別シンポジウム／共生社会と生涯スポーツは共存できるのか：スポーツのパラダイムチェンジが共存への鍵

コーディネーター：内田 匡輔（東海大学）

2021年9月7日(火) 15:15 ～ 17:15 会場7 (Zoom)

本テーマ研究部会では、「生涯スポーツ」と「共生社会」を軸に検討し、「共生社会」の捉え方が漠然としているのではないかと結論を得た。そこでまず「共生社会」とはどのようなものかという、根本的な話し合いを持つことを目的に企画している。その上で、共生社会において生涯スポーツは、どのような機能を果たすのかを検討する必要があると考えた。テーマにある「共存できるのか」には、生涯スポーツが共生社会で果たす役割や、具体的に何ができるのか、またはできないのかを含め問い直す意味を込めている。

このような趣旨を踏まえ、パラリンピック後の共生社会について、筑波大学の菊幸一氏から発表をいただく。次に、NPO法人スマイルクラブ代表、大浜三平氏から、誰もが地域でスポーツを楽しめる環境づくりと共生社会についてお話をいただく。重ねて、東京未来大学の篠後悦子氏から、スポーツの指導現場で起こっている様々な壁や問題について保護者の視点から、共生社会の理想と現実についてお話をいただく。

発表を踏まえ、共生社会と生涯スポーツの共存について意見交換し、どのようなスポーツのパラダイムチェンジが、具体的に必要となるのかについて討議を深めてゆく。

15:55 ～ 16:35

[生涯スポーツ-SA-2]共生社会実現を目指す、総合型地域スポーツクラブ事例報告

*大浜 三平¹ (1. NPO法人スマイルクラブ)

<演者略歴>

筑波大学大学院修士（スポーツ学）、NPO法人スマイルクラブ理事、バレーボール国際公認コーチ。

スマイルクラブはもともと体育教師であった理事長大浜あつ子が、自閉症児の母親から「学校の体育授業についていけないので、自分の子どもを見てくれませんか？」との依頼から2000年に NPO（兼 文科省の総合型地域スポーツクラブ）としてスタートし、主に発達障がい者（児含む）を対象に運動やスポーツによる社会的自立を目的として運動教室「運動が苦手な子の教室（以下 「苦手教室」）」（学校体育館等で実施）をおこなってきた。またバレーボールを大学まで実践してきたこともあり、一般のバレーボール種目を中心としたスポーツ教室もスタートし、元オリンピック選手もコーチとして教室指導に携わっていただいている。現在は、バレーボールのほかに、バスケットボールやバドミントン種目も追加し、教室も開催している。

2016年から新たに放課後等デイサービス事業（障がい者の個別運動指導に特化した事業）もスタートし、現在約400人（苦手教室約200人、放課後等デイサービス事業約200人 計400人）の障がい者が在籍し、毎日スポーツや運動を楽しんでいる。

このような、障がいのあるなしに関わらず、多様なスポーツを楽しめる環境づくりを進めるには何が必要となるのかを議論していきたい。

テーマ別シンポジウム | 生涯スポーツ研究部会 | 【課題A】 共生社会の実現に向けた生涯スポーツ政策と協働システムをいかに構築するか

生涯スポーツ研究部会【課題A】 テーマ別シンポジウム／共生社会と生涯スポーツは共存できるのか：スポーツのパラダイムチェンジが共存への鍵

コーディネーター：内田 匡輔（東海大学）

2021年9月7日(火) 15:15 ～ 17:15 会場7 (Zoom)

本テーマ研究部会では、「生涯スポーツ」と「共生社会」を軸に検討し、「共生社会」の捉え方が漠然としているのではないかという結論を得た。そこでまず「共生社会」とはどういうものかという、根本的な話し合いを持つことを目的に企画している。その上で、共生社会において生涯スポーツは、どのような機能を果たすのかを検討する必要があると考えた。テーマにある「共存できるのか」には、生涯スポーツが共生社会で果たす役割や、具体的に何ができるのか、またはできないのかを含め問い直す意味を込めている。

このような趣旨を踏まえ、パラリンピック後の共生社会について、筑波大学の菊幸一氏から発表をいただく。次に、NPO法人スマイルクラブ代表、大浜三平氏から、誰もが地域でスポーツを楽しめる環境づくりと共生社会についてお話をいただく。重ねて、東京未来大学の篠後悦子氏から、スポーツの指導現場で起こっている様々な壁や問題について保護者の視点から、共生社会の理想と現実についてお話をいただく。

発表を踏まえ、共生社会と生涯スポーツの共存について意見交換し、どのようなスポーツのパラダイムチェンジが、具体的に必要となるのかについて討議を深めてゆく。

16:35 ～ 17:15

[生涯スポーツ-SA-3]子どもも親も安心できるスポーツ環境の構築へ向けて

*藤後 悦子¹ (1. 東京未来大学)

<演者略歴>

福岡県出身。筑波大学教育研究科修了、東京学芸大学大学院単位修得満期退学。筑波大学にて博士号を取得。公認心理師、臨床心理士、臨床発達心理士。現在、東京未来大学こども心理学部教授。新宿区社会教育委員、足立区区民評価委員会副会長、足立区文化・読書・スポーツ推進委員会副会長（運動・スポーツ部会会長）。日本中学校体育連盟の研修、民間スポーツ団体でのペアレント教室や心理サポートなどを担当してきた。

生涯スポーツの入り口となるジュニア期のスポーツの受け皿としては、地域スポーツの役割が大きい。地域スポーツは、一般的に入会制限などはなく、特別な配慮が必要な子ども達も多く参加している。地域スポーツへの参加は、親の支えになしには成り立たず、練習や試合会場への送迎、当番、応援など様々な場面で親は子どものスポーツに関わっていく。そのため地域スポーツの場では、指導者と子どもとの関係のみでなく、親と子どもの関係、応援席の親集団と子どもとの関係、親同士の関係、子ども同士の関係など多層的な人間関係が交差する。そこには多様なニーズや価値観も存在することとなる。本来であれば、多様なニーズに対応できるスポーツ環境を整える必要があるが、勝利至上主義に傾くことで、技術力が低い子どもや配慮が必要な子がスケープゴートになりやすい。

3人の子どもの親として地域スポーツに関わってきた経験や、臨床心理士としての相談活動を通して、スポーツの魅力を実感するとともに課題とも直面してきた。演者らが行ってきた研究結果や実践をもとに、親も子も安心できるスポーツ環境を構築するためには何が必要であるのかを議論していきたい。

テーマ別シンポジウム

■ 2021年9月7日(火) 15:15 ~ 17:15 | 会場8 Zoom

健康福祉研究部会【課題A】テーマ別シンポジウム／ライフスタイルに応じた健康増進・体力向上の捉え方：「女」を生きることと健康・スポーツ

コーディネーター：高尾 将幸（東海大学）、木塚 朝博（筑波大学）

これまで健康や体力を語る際の中心であった「青年・壮年期の健常男性」に対し、多様なライフスタイルやライフコースを念頭において、これからの健康増進や体力向上のあり方を考えることが狙いである。特に、“「女」を生きることと健康・スポーツ”というサブタイトルのもと、ジェンダー／セックスとしての女性のスポーツ経験や健康増進のあり方に焦点をあてる。その際、まずは自然科学および社会科学の立場から女性に特有のスポーツ参加および健康増進の現状や展望を明確化する。さらに、競技を続けながら「女」を生きることの困難や価値について、当事者の生きられた経験や現場での課題を踏まえつつ、議論を深めていく。

15:15 ~ 15:55

[健康福祉-SA-1] 女性の運動・スポーツ実施

社会科学の立場から

*工藤 保子¹ (1. 大東文化大学)

15:55 ~ 16:35

[健康福祉-SA-2] 発育発達、ライフスタイルに応じた女性アスリート支援

*山口 香¹ (1. 筑波大学)

16:35 ~ 17:15

[健康福祉-SA-3] スポーツを通じた女性のヘルスケアを考える

*能瀬 さやか¹ (1. 東京大学医学部附属病院 女性診療科・産科)

テーマ別シンポジウム | 健康福祉研究部会 | 【課題A】健康増進につながる体力・運動の在り方をいかに考えるか

健康福祉研究部会【課題A】テーマ別シンポジウム／ライフスタイルに応じた健康増進・体力向上の捉え方：「女」を生きることと健康・スポーツ

コーディネーター：高尾 将幸（東海大学）、木塚 朝博（筑波大学）

2021年9月7日(火) 15:15 ～ 17:15 会場8 (Zoom)

これまで健康や体力を語る際の中心であった「青年・壮年期の健常男性」に対し、多様なライフスタイルやライフコースを念頭において、これからの健康増進や体力向上のあり方を考えることが狙いである。特に、

“「女」を生きることと健康・スポーツ”というサブタイトルのもと、ジェンダー／セックスとしての女性のスポーツ経験や健康増進のあり方に焦点をあてる。その際、まずは自然科学および社会科学の立場から女性に特有のスポーツ参加および健康増進の現状や展望を明確化する。さらに、競技を続けながら「女」を生きることの困難や価値について、当事者の生きられた経験や現場での課題を踏まえつつ、議論を深めていく。

15:15 ～ 15:55

[健康福祉-SA-1]女性の運動・スポーツ実施

社会科学の立場から

*工藤 保子¹ (1. 大東文化大学)

<演者略歴>

鹿屋体育大学大学院修了。2017年より現職。1991年4月から2017年3月まで笹川スポーツ財団に在席し、前項調査「スポーツライフ・データ」等に携わる。専門分野はスポーツ社会学。日本スポーツとジェンダー学会理事、一般社団法人 スポーツ・コンプライアンス教育振興機構理事、日本スポーツクラブ協会評議員等を現任。

改めて、8年前の2013年第64回大会（立命館大学）の過去大会から、本部企画や組織委員会企画、各専門領域のシンポジウムやキーノートレクチャーなどのタイトルを見返してみたところ、テーマに「女性」というキーワードが含まれていたのは、7年前の2014年第65回大会（岩手大学）、体育史専門領域のキーノートレクチャー「日本における女子体育教師史研究」の1題のみであった。しかしながら、現状の健康・スポーツ政策においては「女性の健康」や「スポーツを通じた女性の活躍促進」が課題とされている。

私からは、社会科学の立場から、成人女性の運動・スポーツ実施率の50年間の推移や、女児・女子の運動・スポーツ実施の現状も併せて紹介したい。また、健康の主観的評価や健康状態に関するデータも踏まえて、今後の展望など、問題提起を行いたい。

テーマ別シンポジウム | 健康福祉研究部会 | 【課題A】健康増進につながる体力・運動の在り方をいかに考えるか

健康福祉研究部会【課題A】テーマ別シンポジウム／ライフスタイルに応じた健康増進・体力向上の捉え方：「女」を生きることと健康・スポーツ

コーディネーター：高尾 将幸（東海大学）、木塚 朝博（筑波大学）

2021年9月7日(火) 15:15 ～ 17:15 会場8 (Zoom)

これまで健康や体力を語る際の中心であった「青年・壮年期の健常男性」に対し、多様なライフスタイルやライフコースを念頭において、これからの健康増進や体力向上のあり方を考えることが狙いである。特に、

“「女」を生きることと健康・スポーツ”というサブタイトルのもと、ジェンダー／セックスとしての女性のスポーツ経験や健康増進のあり方に焦点をあてる。その際、まずは自然科学および社会科学の立場から女性に特有のスポーツ参加および健康増進の現状や展望を明確化する。さらに、競技を続けながら「女」を生きることの困難や価値について、当事者の生きられた経験や現場での課題を踏まえつつ、議論を深めていく。

15:55 ～ 16:35

[健康福祉-SA-2]発育発達、ライフスタイルに応じた女性アスリート支援

*山口 香¹ (1. 筑波大学)

<演者略歴>

元女子柔道選手。世界女子柔道選手権（1984）で日本女子として初めて優勝。ソウル五輪(1988)では銅メダルを獲得。現役引退後は、指導者としてシドニー五輪(2000)、アテネ五輪(2004)のコーチを務めた。現在は、筑波大学で教鞭をとるかたわら、女性アスリート支援にも努めている。

スポーツ界では長年に渡り、女性アスリートの育成強化は、男子とは違う発育発達や生理的な機能等に特化して行われてはこなかった。また、競技を継続しながら女性特有のライフイベントである妊娠・出産を迎えることも希少であった。指導者の多くが男性であることから、競技を行う上での女性特有の問題を意識せずに指導が行われたり、アスリートも相談しづらい環境でもあった。日本における女性アスリートの競技力は年々向上しているが、男性に比べて競技を行う環境やサポート体制には依然として課題が残る。女兒や一般女性のスポーツ実施率も低いことも問題視されている。女性アスリートへの支援から女性全体がスポーツを生涯にわたって親しむための環境、サポートについて考えたい。

テーマ別シンポジウム | 健康福祉研究部会 | 【課題A】健康増進につながる体力・運動の在り方をいかに考えるか

健康福祉研究部会【課題A】テーマ別シンポジウム／ライフスタイルに応じた健康増進・体力向上の捉え方：「女」を生きることと健康・スポーツ

コーディネーター：高尾 将幸（東海大学）、木塚 朝博（筑波大学）

2021年9月7日(火) 15:15 ～ 17:15 会場8 (Zoom)

これまで健康や体力を語る際の中心であった「青年・壮年期の健常男性」に対し、多様なライフスタイルやライフコースを念頭において、これからの健康増進や体力向上のあり方を考えることが狙いである。特に、

“「女」を生きることと健康・スポーツ”というサブタイトルのもと、ジェンダー／セックスとしての女性のスポーツ経験や健康増進のあり方に焦点をあてる。その際、まずは自然科学および社会科学の立場から女性に特有のスポーツ参加および健康増進の現状や展望を明確化する。さらに、競技を続けながら「女」を生きることの困難や価値について、当事者の生きられた経験や現場での課題を踏まえつつ、議論を深めていく。

16:35 ～ 17:15

[健康福祉-SA-3]スポーツを通じた女性のヘルスケアを考える

*能瀬 さやか¹ (1. 東京大学医学部附属病院 女性診療科・産科)

<演者略歴>

2003年北里大学医学部卒業、2006年東京大学産婦人科学教室入局後、関連病院で研修、2012年～2017年国立スポーツ科学センターメディカルセンター勤務、2017年～東京大学医学部附属病院 女性診療科・産科勤務となり同年女性アスリート外来開設、国立スポーツ科学センタースポーツメディカルセンター婦人科非常勤。

スポーツは思春期から性成熟期、さらに更年期、高齢期の女性のヘルスケアにおいて身体機能の維持、増進に大きく貢献する。また、骨粗鬆症や糖尿病、妊娠高血圧症候群等の疾病に対し、予防医学の観点からも医療や社会の生産性に大きな役割を担うと考えられる。しかし、日常の臨床において、適切な医学的知識の不足によりスポーツに参加する女性の健康がかえって害されているケースも少なくない。当科では、2017年4月より女性アスリート外来を開設しているが、受診する選手のもっとも多い主訴は、利用可能エネルギー不足による無月経である。若年アスリートにおいて無月経や低体重、摂食障害、骨粗鬆症と診断され、生涯にわたり治療が必要となるケースもみられる。これらの課題解決に向けて、10代からの継続したヘルスケア教育とスクリーニング体制の構築、医療機関への受診環境整備が課題である。

本講演では、スポーツが女性のヘルスケアにどのように貢献できるかをライフステージ毎に考えるとともに、過度なスポーツによる健康問題の現状について紹介する。

テーマ別研究発表

■ 2021年9月7日(火) 13:30 ~ 14:45 | 会場9 Zoom

■ スポーツ文化研究部会【課題A】口頭発表①

座長：榎本 雅之（滋賀大学）

13:30 ~ 13:45

[スポーツ文化-A-01] 開発途上国における野球伝播の過程と野球定着への課題
コスタリカ共和国の場合を事例として*藤谷 雄平¹、山田 理恵² (1. 鹿屋体育大学大学院、2. 鹿屋体育大学)

13:45 ~ 14:05

[スポーツ文化-A-02] 蹴鞠再現研究
近代工法を用いたエゾシカ蹴鞠使用球の製作*阿羅 功也¹ (1. 旭川高専)

14:05 ~ 14:25

[スポーツ文化-A-03] オリンピックの開催が外国イメージに与える影響のメカニズムに関する一考察

ロンドンオリンピック開催時におけるロシアと北朝鮮への態度に着目した実証的検証

*下窪 拓也¹ (1. 新潟医療福祉大学)

14:25 ~ 14:45

[スポーツ文化-A-04] 五輪事前キャンプ地のスポーツガバナンス
バブル方式のエスノグラフィー*溝口 紀子¹ (1. 日本女子体育大学)

テーマ別研究発表 | スポーツ文化研究部会 | 【課題A】グローバル課題の解決に向けてスポーツから何が提案できるか

スポーツ文化研究部会【課題A】口頭発表①

座長：榎本 雅之（滋賀大学）

2021年9月7日(火) 13:30 ～ 14:45 会場9 (Zoom)

13:30 ～ 13:45

[スポーツ文化-A-01]開発途上国における野球伝播の過程と野球定着への課題

コスタリカ共和国の場合を事例として

*藤谷 雄平¹、山田 理恵² (1. 鹿屋体育大学大学院、2. 鹿屋体育大学)

近年日本では、独立行政法人国際協力機構（以下、「JICA」とする）を筆頭に開発途上国において野球の普及・振興活動が盛んに行われている。例えば、中米にあるコスタリカ共和国（以下、「コスタリカ」とする）では、1974年からJICAによる野球の普及・振興活動が開始され、現在においても野球隊員の派遣が継続されている（宮崎、2016；藤谷ほか、2019）。

しかしながら、野球は、未だに世界的に普及度が低く（IOC、online）、定着している国は少ないと考えられている。また、開発途上国を対象に野球の普及・振興活動が盛んに行われているのに対して、これらを対象とした研究は少なく、学術的な知見が蓄積されていない。

一方、日本における野球の伝播過程および定着の歴史に関する研究は、すでに蓄積されている。日本が野球の定着に至った過程とその社会的、文化的背景に関する知見を、開発途上国の野球伝播の過程と比較することで、開発途上国の野球定着への課題について考察することができると考えられる。

そこで、本研究では、長年、野球の普及・振興活動が行われているコスタリカを事例として取り上げ、スポーツを通じた開発の観点から、コスタリカにおける野球伝播の過程を考察するとともに、定着への課題について検討することとした。具体的には、フィールドワーク、史料調査を通して、コスタリカの野球伝播の過程について明らかにするとともに、すでに先行研究によって明らかにされている、日本における野球定着の過程の事例と比較・検討し、開発途上国における野球定着への課題について検討する。

テーマ別研究発表 | スポーツ文化研究部会 | 【課題A】グローバル課題の解決に向けてスポーツから何が提案できるか

スポーツ文化研究部会【課題A】口頭発表①

座長：榎本 雅之（滋賀大学）

2021年9月7日(火) 13:30 ～ 14:45 会場9 (Zoom)

13:45 ～ 14:05

[スポーツ文化-A-02]蹴鞠再現研究

近代工法を用いたエゾシカ蹴鞠使用球の製作

*阿羅 功也¹ (1. 旭川高専)

球技において使用される球（ボール）にはそれぞれ特徴が現れている。これは日本の伝統的な文化である蹴鞠についても共通している。蹴鞠で使用されている鞠は鹿革（夏の雌鹿）を用いており、2枚の面を括り合わせることで球体を描いている。中は空洞で紙風船のような特徴を持ち合わせている。鞠を製作する鞠師の減少と鹿革の入手が困難であることから、鞠の希少価値は高い。他の球技と比較すると蹴鞠は「球（ボール）」に触れられる機会が乏しく、これは蹴鞠文化継承・普及という観点から解決すべき課題である。

そこで本研究の目的は蹴鞠文化の継承・普及に寄与するために蹴鞠使用球の製作に新たな手法を提案していくこと。鹿革使用と鞠師不足による希少価値の高さを解決することを目的とする。

蹴鞠の作業工程は「けまり鞠遊会」発足者であり鞠師でもある池田遊達氏の鞠製作を調査した。調査した作業工程の中で「目打ち」と「括り紐作成」をレーザー加工機やシャーリングマシンを使用した近代工法にて実施した。革は入手ルートが確率されているエゾシカ革を選定した。

製作したエゾシカ鞠は、紙風船のような特徴的な鞠の構造を再現することができ、耐久性も高く蹴鞠をプレーする上での機能を十分に果たすことができた。さらに製作コストにおいては十分な削減が可能となり、作業工程においても製作時間の短縮が可能となった。しかし、エゾシカ革は鹿革と比較するとやや柔らかく、「穀つめ」において伸びやすい傾向にあった。これにより括り紐が荷重に耐えきれず亀裂が入る箇所が確認されたことは課題であったため、括り紐の強度を高めるためにさらに硬化剤を使用するか別の素材を検討する。

鞠師による「伝統工法を用いた歴史的な鞠製作」を参考した「近代工法を用いたエゾシカ蹴鞠使用球製作」は、従来抱えていた課題の解決に貢献できることが明らかとなった。

テーマ別研究発表 | スポーツ文化研究部会 | 【課題A】グローバル課題の解決に向けてスポーツから何が提案できるか

スポーツ文化研究部会【課題A】口頭発表①

座長：榎本 雅之（滋賀大学）

2021年9月7日(火) 13:30 ～ 14:45 会場9 (Zoom)

14:05 ～ 14:25

[スポーツ文化-A-03]オリンピックの開催が外国イメージに与える影響のメカニズムに関する一考察

ロンドンオリンピック開催時におけるロシアと北朝鮮への態度に着目した実証的検証

*下窪 拓也¹ (1. 新潟医療福祉大学)

本研究の目的は、メガスポーツイベントの開催が、外国イメージに与える影響を明らかにすることである。代表的なメガスポーツイベントであるオリンピックは、国際的な友好関係を深めることを目的の一つに謳っており、「平和の祭典」という言葉がしばしば用いられる。一方で、スポーツを通じて国同士の優劣を競い合うことから「疑似戦争」という言葉が用いられることもある。このように、メガスポーツイベントの開催は、外国への認識に影響を及ぼすものであることが、議論されてきた。

先行研究では、オリンピックの開催は、外国のイメージを向上させる可能性がある一方で、日本との対立関係が顕在化している国およびその国民のイメージは、大会を通じて否定的な変化をする傾向にあることが示唆されている。しかし、大会の開催が外国イメージを否定的な方向に変化させるメカニズムは未だ明らかにされていない。メガスポーツイベントの開催が、外国への態度を悪化させるメカニズムを解明することは、メガスポーツイベントが持つ社会的なリスクの解決にも貢献する。本研究は、2012年ロンドンで開催された夏季オリンピックの前後で実施された社会調査の二次データを基に、大会の開催がロシアおよび北朝鮮のイメージに与えた影響を分析する。

分析の結果、以下のことが明らかになった。まず大会終了後ロシアのイメージの悪化が確認された。そして、大会がロシアのイメージに与える影響は、日本とロシアとの関係性に関する認識を媒介に生じていることが明らかになった。このことから、外国イメージの悪化は、大会を通じた敵対的な国際関係の顕在化が原因であると考えられる。一方で、北朝鮮のイメージは大会を通じた変化は確認されなかった。ただし、北朝鮮のイメージは極端に悪く、床効果の可能性が考えられる。以上、本研究結果は大会の開催が外国イメージに与えるメカニズムの解明に貢献するものである。

テーマ別研究発表 | スポーツ文化研究部会 | 【課題A】 グローバル課題の解決に向けてスポーツから何が提案できるか

スポーツ文化研究部会【課題 A】 口頭発表①

座長：榎本 雅之（滋賀大学）

2021年9月7日(火) 13:30 ～ 14:45 会場9 (Zoom)

14:25 ～ 14:45

[スポーツ文化-A-04]五輪事前キャンプ地のスポーツガバナンス

バブル方式のエスノグラフィー

*溝口 紀子¹ (1. 日本女子体育大学)

2021年2月、新型コロナウイルス（Covid 19）が感染拡大する中、東京五輪大会組織委員会が公表した規則集には、バブル方式が採用された。バブル方式とは、開催地を大きな泡で包むように大会を運営し、選手や関係者の外部との接触を遮断する「バブル」方式である。

入国前後や大会期間中の定期的な PCR検査に加え、大会開催地では厳しい外出制限を設け隔離対応をする。このようなバブル方式は、現在、国際スポーツ大会の「新しい様式」として定着しつつある。

東京五輪の感染対策としてのバブル方式の具体例とは、選手は出国前72時間以内にCovid19検査を受け、大会期間中も定期的に実施される検査を受ける。次にCOCOAや健康管理アプリをダウンロードしなければならない。また行動範囲は選手村と競技会場、練習会場に限定され、移動に公共交通機関を利用することはできない。入国後も、選手の行動範囲を競技会場と練習会場、選手村に制限される。さらに大会終了後は原則、48時間以内に出国しなくてはならない。

とはいえ、このように厳格で徹底した感染対策を実施することは、感染リスクを減少させる一方で、バブル（外部隔離）内に置かれる選手はストレスが増すと考えられる。五輪という極限の緊張感の中で、バブル内に置かれた選手はどのようなストレスを抱え、バブルの環境を受け入れ大会を迎えるのだろうか。

本研究では、海外チームの現地アテンドとして、チームの事前キャンプに帯同し、バブル内での五輪選手の生活環境における心境の変化や組織内のガバナンスについてエスノグラフィの手法で分析を行う。とりわけ海外選手が抱える環境のストレスや行動変容、バブル方式の課題について明らかにすることを目的とする。

テーマ別研究発表

■ 2021年9月7日(火) 13:30 ~ 14:45 | 会場10 Zoom

スポーツ文化研究部会【課題A】口頭発表②

座長：河西 正博（同志社大学）

13:30 ~ 13:45

[スポーツ文化-A-05] 「スポーツと幸福」に関する文献研究（その1）

研究の背景と意義

*清水 紀宏¹、作野 誠一²、横山 剛士³、朝倉 雅史¹、醍醐 笑部¹、林田 敏裕⁴、柴田 紘希⁵、君塚 豊⁴ (1. 筑波大学、2. 早稲田大学、3. 金沢大学、4. 筑波大学大学院、5. 山梨学院大学)

13:45 ~ 14:05

[スポーツ文化-A-06] 「スポーツと幸福」に関する文献研究（その2）

海外レビュー論文の検討

*君塚 豊¹、清水 紀宏²、作野 誠一³、横山 剛士⁴、朝倉 雅史²、醍醐 笑部²、林田 敏裕¹、柴田 紘希⁵ (1. 筑波大学大学院、2. 筑波大学、3. 早稲田大学、4. 金沢大学、5. 山梨学院大学)

14:05 ~ 14:25

[スポーツ文化-A-07] 「スポーツと幸福」に関する文献研究（その3）

書誌情報の計量的分析

*横山 剛士¹、清水 紀宏²、作野 誠一³、醍醐 笑部²、朝倉 雅史²、林田 敏裕⁴、柴田 紘希⁵、君塚 豊⁴ (1. 金沢大学、2. 筑波大学、3. 早稲田大学、4. 筑波大学大学院、5. 山梨学院大学)

14:25 ~ 14:45

[スポーツ文化-A-08] 体育学における倫理の基盤とWell-Beingへの隘路

「完成（卓越）主義Perfectionism」そしてエグゼルスヘ

*林 洋輔¹ (1. 大阪教育大学)

テーマ別研究発表 | スポーツ文化研究部会 | 【課題A】 グローバル課題の解決に向けてスポーツから何が提案できるか

スポーツ文化研究部会【課題 A】口頭発表②

座長：河西 正博（同志社大学）

2021年9月7日(火) 13:30 ～ 14:45 会場10 (Zoom)

13:30 ～ 13:45

[スポーツ文化-A-05] 「スポーツと幸福」に関する文献研究（その1）

研究の背景と意義

*清水 紀宏¹、作野 誠一²、横山 剛士³、朝倉 雅史¹、醍醐 笑部¹、林田 敏裕⁴、柴田 紘希⁵、君塚 豊⁴ (1. 筑波大学、2. 早稲田大学、3. 金沢大学、4. 筑波大学大学院、5. 山梨学院大学)

新しい学術体系（日本学術会議、2003）において、「設計科学」と性格づけられる体育学／スポーツ・健康科学の研究者集団であるこの学会は、「社会のための学術」としてのミッションを強く自覚して2021年度より定款上の「目的」改正を行った。設計科学とは、認識科学（あるものの探求／対象の認識による法則性の発見）とは異なり、「ある目的」をもった人工物（モノあるいはシステム）の創造・制作・改変・利用に関連する、あるべきものを探求する学術ジャンルである。従って、設計科学は何らかの実践上の価値の導入なしには存立できない。では一体、専門分科した諸学間で合意可能な設計目的となる社会的使命とは、いかに構想したらよいのであろうか。

他方、わが国のスポーツ政策（スポーツ推進システムの整備が使命）の基盤となるスポーツ基本法の制定から10年が過ぎた。この法律の前文には、スポーツを権利の「対象」とする「スポーツのためのスポーツ権」ではなく、「スポーツを通じて幸福で豊かな生活を営むことは、全ての人々の権利」とスポーツ「による」幸福追求権が法理念として謳われた。が、果たして、スポーツを「したり、見たり、支えたり」する活動が豊かに展開されたならば、個人と社会全体の幸福にとって本当に有用なのであろうか。残念ながら、わが国における「スポーツと幸福（不幸）」研究の蓄積はとても乏しい（但し、高齢者・患者×身体活動（量）×（健康関連）QOLという治療・介護・福祉的観点からの研究の蓄積は豊富）。そこで本共同研究では、「スポーツと幸福（不幸）」に関する国際的な研究動向を包括的にレビューすることで、「スポーツと幸福（不幸）」研究の到達点と課題を明らかにするとした。

テーマ別研究発表 | スポーツ文化研究部会 | 【課題A】グローバル課題の解決に向けてスポーツから何が提案できるか

スポーツ文化研究部会【課題A】口頭発表②

座長：河西 正博（同志社大学）

2021年9月7日(火) 13:30 ～ 14:45 会場10 (Zoom)

13:45 ～ 14:05

[スポーツ文化-A-06]「スポーツと幸福」に関する文献研究（その2）

海外レビュー論文の検討

*君塚 豊¹、清水 紀宏²、作野 誠一³、横山 剛士⁴、朝倉 雅史²、醍醐 笑部²、林田 敏裕¹、柴田 紘希⁵ (1. 筑波大学大学院、2. 筑波大学、3. 早稲田大学、4. 金沢大学、5. 山梨学院大学)

本研究では「スポーツと幸福」に関する海外研究の動向を掴むための手がかりとして、先行するレビュー論文を収集しその傾向の整理を行った。まず、主要な論文検索データベース（Web of scienceとSPORTDiscus）を用いて先行のレビュー論文を収集した。キーワードにはスポーツ関連のものとして“sport”、“physical-activity”を、幸福関連のものとして“well-being”、“happiness”、“positive-psychology”を用いてタイトル検索を行った。また追加条件として「英語のみ」、「論文タイプ=レビュー」などの設定を施した。収集された論文数は全部で101編であった。そこから重複した論文やレビュー論文ではないものを除外し、最終的に35編の論文を分析の対象とした。分析の結果、第一に従来のレビュー論文においては幸福の指標について、高齢者や妊婦といった特定の対象に限定して測定された研究に絞ってそれぞれのレビューが行われている傾向がみられた。そのため包括的に研究動向を把握するようなレビューは行われてきていない。第二に、半数以上のレビュー論文の掲載ジャーナルはその名称に“sport”などの語を含まない、主に心理学や医科学系のジャーナルであった。第三に、スポーツや身体活動の種類や内容が個々の研究間で統一されていないことや、幸福に関する指標とその測定方法に課題が残ることを指摘する論文が多くみられた。第四に、スポーツや身体活動が幸福に資するという関係だけでなく、アスリートのパフォーマンスにWell-beingが影響するといった逆の関係性を想定した研究を扱うものもみられた。これらの結果を踏まえ、今後の課題として「スポーツと幸福」に関する研究知見のより包括的なレビュー、ならびに説明変数としてのスポーツや身体活動の検討などが挙げられる。

テーマ別研究発表 | スポーツ文化研究部会 | 【課題A】 グローバル課題の解決に向けてスポーツから何が提案できるか

スポーツ文化研究部会【課題 A】 口頭発表②

座長：河西 正博（同志社大学）

2021年9月7日(火) 13:30 ～ 14:45 会場10 (Zoom)

14:05 ～ 14:25

[スポーツ文化-A-07] 「スポーツと幸福」に関する文献研究（その3）

書誌情報の計量的分析

*横山 剛士¹、清水 紀宏²、作野 誠一³、醍醐 笑部²、朝倉 雅史²、林田 敏裕⁴、柴田 紘希⁵、君塚 豊⁴ (1. 金沢大学、2. 筑波大学、3. 早稲田大学、4. 筑波大学大学院、5. 山梨学院大学)

「スポーツと幸福」との関係についてはこれまでに数多くの研究がなされ、得られた知見はシステマティックレビュー等を用いたレビュー論文に集約されてきた。これらの研究では、文献検索やデータ抽出の方法が厳密に規定されているため、高齢者や子どもなど特定の対象者やキーワードに限定してレビューが行われている。こうした研究では、条件を満たした研究のみが分析対象となっており、収集された文献のほとんどが分析の対象外である。そのため、「スポーツと幸福」に関する研究は多くの研究蓄積があるものの、そもそもの程度の論文がこれまでに生産され、論文内ではどのような対象に焦点が当てられているかなど、「スポーツと幸福」に関する研究の全体像を包括的に明らかにした研究は管見の限り見当たらない。

そこで本研究では、「スポーツと幸福」に関する研究動向を数量的に整理・把握することを通じ、体育・スポーツ・健康科学領域における幸福に関する研究の課題を明らかにすることを目的とした。

本研究は計量的分析を研究方法として採用した。具体的には、SPORTDiscusをはじめとする複数の論文検索データベースから“happiness”、“well-being”、“sport”、“exercise”などをキーワードに含む、研究論文を抽出検出し、それらのタイトル、キーワード、アブストラクトなどの書誌情報をリスト化したデータセットを作成した。その後、当該データセットをもとにジャーナル別にみた論文の集計、タイトル等のテキストマイニングといった計量的分析を行った。その結果、「スポーツと幸福」に関する研究の年次推移、学問領域、調査対象の属性、調査手法、スポーツや幸福の測定尺度などが明らかとなった。これらの結果を踏まえて、幸福概念の定義やその操作化の方法、特定研究領域における研究蓄積の必要性など、今後求められる研究課題を提示する。

テーマ別研究発表 | スポーツ文化研究部会 | 【課題A】グローバル課題の解決に向けてスポーツから何が提案できるか

スポーツ文化研究部会【課題 A】口頭発表②

座長：河西 正博（同志社大学）

2021年9月7日(火) 13:30 ～ 14:45 会場10 (Zoom)

14:25 ～ 14:45

[スポーツ文化-A-08]体育学における倫理の基盤と Well-Beingへの隘路

「完成（卓越）主義 Perfectionism」そしてエグゼルシスへ

*林 洋輔¹ (1. 大阪教育大学)

本発表は体育学に属する各領域の研究を支える倫理基盤の実質を問い、その基盤に位置付く思想の端緒を剔抉し向後の研究指針を明らかにする。体育学が人間の身体運動を研究対象の基幹とする以上、斯学における「体育」を単に PEとして一義的に捉える見方は適切ではない。近年の研究では体育学における「体育」を広く捉え、「人間の幸福（Well-Being）に対する身体的・社会的基盤をつくる身体運動の総称」として捉える見方が提唱された。ところで体育学における「体育 Taiiku」——狭義の体育（PE）とスポーツ、さらに健康増進を志向する各種の身体運動——の実質を議論する際、次の二つの問いがさらに問われねばならない。第一に、体育学に属する各領域が最終的に到達を期する達成目標、すなわち「幸福 Well-Being」の実質とは何か。第二に、体育学はいかなる倫理基盤に支えられつつ「幸福 Well-Being」に向けた学術研究を遂行するのか。本発表では双方への関心を議論の機軸とし、特に後者の議論を主題として扱う。というのも本発表の関心に照らせば、「幸福 Well-Being」への到達を可能にするのは倫理基盤に裏付けられた学術研究であるからだ。

本論と結論の概要は以下の通りである。体育学に属する研究は、とりわけ社会科学ならびに自然科学が体育学の特徴をよく示し、その起源と歴史や現状さらに未来が人文科学によって示される。「人間の身体運動」を研究対象として勝利・達成・習得・改善・治癒・解決などを期する諸研究は、倫理学の語彙における「完成（卓越）主義 Perfectionism」に裏付けられたものであることが明らかである。結論としては、この「完成（卓越）主義 Perfectionism」を学術史上に最も善く体現した「エグゼルシス Exercice」の概念を以後に討究する意義が明示されることで本発表は終着する。

テーマ別研究発表

■ 2021年9月7日(火) 13:30 ~ 14:59 | 会場11 Zoom

■ 学校保健体育研究部会【課題A】口頭発表①

座長：大林 太朗（筑波大学）

13:30 ~ 13:45

[学校保健体育-A-01] 大学における体育授業によって学習が可能な身体的リテラシー

*高橋 浩二¹、久保田 もか¹、畑 孝幸² (1. 長崎大学、2. 東海学園大学)

13:46 ~ 14:01

[学校保健体育-A-02] R2年度学士課程「体育」における授業方法の変更が学生の目標到達度評価および授業評価に与えた影響

*佐橋 由美¹ (1. 大阪樟蔭女子大学)

14:02 ~ 14:17

[学校保健体育-A-03] 大学体育授業における集団凝集性の変化から見える学習者の適応感

*鳥井 淳貴¹、中須賀 巧² (1. 宝塚医療大学、2. 兵庫教育大学)

14:18 ~ 14:38

[学校保健体育-A-04] コロナ禍での大学体育授業においてダンス教育の重要性が伝わる授業デザインの研究

教員養成課程における体育授業研究でのZoomダンスの実践

*山崎 正枝¹ (1. 金沢大学)

14:39 ~ 14:59

[学校保健体育-A-05] コロナ禍における対面体育実技の実施が身体不活動時間とライフスキルに与える影響

大学1年生を対象とした調査から

*寺岡 英晋¹、村山 光義¹、佐々木 玲子¹、稲見 崇孝¹、東原 綾子¹、野口 和行¹、加藤 幸司¹、永田 直也¹、福士 徳文¹ (1. 慶應義塾大学 体育研究所)

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会 | 【課題A】大学体育の授業をいかに良質なものにするか

学校保健体育研究部会【課題A】口頭発表①

座長：大林 太朗（筑波大学）

2021年9月7日(火) 13:30 ～ 14:59 会場11 (Zoom)

13:30 ～ 13:45

[学校保健体育-A-01]大学における体育授業によって学習が可能な身体的リテラシー

*高橋 浩二¹、久保田 もか¹、畑 孝幸² (1. 長崎大学、2. 東海学園大学)

中央教育審議会(2018)による『2040年に向けた高等教育のグランドデザイン(答申)』が契機となって高等教育の改革が進められている。改革の内容は、「初等中等教育と高等教育の接続のあるべき姿」や「教員が『何を教えたか』から、学修者が『何を学び、身に付けることができたのか』への転換を図ること」等である。これらの改革に伴って大学における体育授業は、学生に対して何を提供することができるのか。本発表では大学における体育授業によって学習が可能な身体的リテラシーについて提案する。身体的リテラシーは、M.Whitehead(2019)によって「生涯にわたって継続して身体的活動を行うことを評価し責任を負う動機、自信、身体的能力、知識及び理解」と簡潔に説明されている。高橋・畑(2021)によれば、身体的リテラシーの獲得によって自己の身体と他者に対応する能力を高めることが期待されるという。そのためには、ローレンス(2016)の「身体化された学習」から身体的リテラシーを捉え直して、学習方法を一般化する必要があるという。また、久保田(2021)によれば、小学校から高等学校を通じて系統立てた学習が可能なバレーボールのスパイクを教材とした大学における体育授業では、学習者のスパイク技術に対する理解度の差によって技術の習得が異なるため、指導者は彼らに対して技術習得に必要な知識を理解できるように指導し、比較的単純な技術練習を反復させて指導することが重要であるという。この指摘は学修者と授業者との関わり方の転換を示しているといえるだろう。大学における体育授業では、運動技術を学ぶ具体的な方法を学修者に提示し、彼らはそれを知識として理解しつつ、自らの身体運動として実践することによって「身体化された学習」を展開すること、すなわち、身体的リテラシーとしての技術や知識を学習するという関わり方への転換が重要である。

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会 | 【課題A】大学体育の授業をいかに良質なものにするか

学校保健体育研究部会【課題A】口頭発表①

座長：大林 太朗（筑波大学）

2021年9月7日(火) 13:30 ～ 14:59 会場11 (Zoom)

13:46 ～ 14:01

[学校保健体育-A-02]R2年度学士課程「体育」における授業方法の変更が学生の目標到達度評価および授業評価に与えた影響

*佐橋 由美¹ (1. 大阪樟蔭女子大学)

全国の他大学と同様、当大学も学士課程科目（教職必修）である体育授業において、昨年春学期を通じて遠隔授業への授業方法の変更を迫られたわけであるが、本報告はこの授業方法の変更が学生の授業への取り組み姿勢や授業満足度等にどのような影響をもたらしたのかを、授業アンケート等により把握することを目的としたものである。

本学では、いわゆる教養課程「体育」は「運動と健康（A）（B）」という科目名で、春（A）1単位、秋（B）1単位が1回生を中心に選択科目として開講されている。ただ、位置づけは選択科目であるが、教職免許の法令科目ということもあって、資格取得の必要から受講する学生が多いため、毎年、学科別に13クラスを開講している。この授業の他に体育・スポーツ実習科目は開講されていない。

春学期を通して ICT ツールを利用し遠隔実施した授業は、秋学期になると、受講生全員が一度に対面授業を受講する方法ー通常の実施方法ーへと戻った。秋学期は、大きなインタラプションなく、シラバスに示した授業計画をほぼ完全に消化することができた。

「全面遠隔」と「全面对面」という授業実施方法の違いが、秋学期終了時の受講者、とりわけ、(A)(B)通年受講者の到達度評価（学習成果の自己評価）や授業満足度にどのような影響をもたらしたのかについて、アンケートデータの分析を行って検討していく。

分析する授業アンケートデータは主に、①「全面遠隔」で実施された春学期「運動と健康 A」については、最終授業において課題レポートとして収集した「春期授業を終えて」という学生の自由コメント（形式なし）と、②秋学期「運動と健康 B」の最終第15回授業にて収集した「授業アンケート」である。②の調査は、例年最終授業の際に続けて実施しているもので、過去の収集データとの比較も一部可能となっている。

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会 | 【課題A】大学体育の授業をいかに良質なものにするか

学校保健体育研究部会【課題A】口頭発表①

座長：大林 太朗（筑波大学）

2021年9月7日(火) 13:30 ～ 14:59 会場11 (Zoom)

14:02 ～ 14:17

[学校保健体育-A-03]大学体育授業における集団凝集性の変化から見える学習者の適応感

*鳥井 淳貴¹、中須賀 巧² (1. 宝塚医療大学、2. 兵庫教育大学)

本研究は、大学体育授業における学習者の集団凝集性の得点変化と適応感との関係を検討することを目的とした。関西地区にある4年制大学において必修開講されている体育授業を履修した大学1年生63名を対象に、質問紙調査を実施した。調査内容は体育授業における集団凝集性尺度（阿江、1986）、学校適応感尺度（大久保、2005）、体育適応感尺度（佐々木、2003）を使用した。対象場面は全15回で構成される授業の内、第11回目（初回）から第15回目（最終回）の屋外グラウンドで90分間実施されたソフトボール授業であった。次に、体育授業での集団凝集性を捉えるために、野球またはソフトボール経験者1名をキャプテンとし、力量差が均一になるように9チームを編成した。研究対象者の集団凝集性の下位尺度得点の合計を集団凝集性得点とし、最終回の集団凝集性得点から初回の集団凝集性得点を引いたものを、集団凝集性得点の変化量とした。そして、初回調査時よりも集団凝集性得点が向上した者を「集団凝集性向上群」、低下した者を「集団凝集性低下群」とした。なお、得点変化が認められなかった4名は分析対象から除外し、最終的に分析に用いられた対象者は59名（男性40名、女性19名；平均年齢 18.7 ± 0.5 歳）であった。最後に、尺度得点ごとに二元配置分散分析を行い、交互作用が認められた場合は単純主効果の検定を行った。本研究で得られた結果は以下の通りである。(1)集団凝集性向上群と低下群で調査初回時には差が認められなかったが、調査最終回時には向上群よりも低下群の方が有意に低いことが認められた。(2)集団凝集性向上群は調査初回時と最終回時に差は認められなかったが、低下群には調査初回時と最終回時に有意な低下が認められた。以上のことから、体育授業を行うことによって集団凝集性が低下した場合は、大学適応感も低下させる可能性があることが示唆された。

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会 | 【課題A】大学体育の授業をいかに良質なものにするか

学校保健体育研究部会【課題A】口頭発表①

座長：大林 太朗（筑波大学）

2021年9月7日(火) 13:30 ～ 14:59 会場11 (Zoom)

14:18 ～ 14:38

[学校保健体育-A-04] コロナ禍での大学体育授業においてダンス教育の重要性が伝わる授業デザインの研究

教員養成課程における体育授業研究での Zoom ダンスの実践

*山崎 正枝¹ (1. 金沢大学)

2020年度新型コロナウイルス感染症パンデミックや北陸の大寒波に大学授業はハイブリッド対応となった。大学体育をいかに実施するか教育的観点で対面授業の意義から授業デザインを検証する。対象者は、教員養成課程の体育専門研究ダンス領域の20名、実践研究に関するインフォームドコンセントを得た。前期（Fs）は、感染防止対策と猛暑による熱中症を配慮して夏季集中授業（IC）とした。ダンス教育の重要性をいかに伝えるか教育目標に沿った期間中は対面授業時の課題の提出にてイメージづくりの働き掛けをした。後期（Ss）は、時間割通りの対面後にリモート（RC）にて Zoom ダンスとなった。ダンスの評価すべき要点を理解することが学びに繋がると考え、具体的な項目の自己評価と振り返りの自由記述を実施した。検定方法は、教育評価に度数に関する適合度の検定を実施、変数の関係の把握に相関を使用した。結果は、授業で伝えたい視点に関する主体的な学びや発見・問題解決学習に関する理解率は、Fsが75%でSsは83%を示した。授業デザインに対するFDと学びの理解率は、Fsに比べてSsの相関は高い関係を示し、特に主体的な学びとの相関関係が高く見られた。同じ授業内容であるが、共有できた時間が異なると結果は異なることが示唆された。対話的な学びと主体的な学びと相関関係は高く($r=0.8150$)、深い学びは対話により高くなる傾向も示された。毎週の授業時間を共有することにより対話から発見や学びが深まること、継続的な学びの時間が必要であることが示唆される。Zoomダンスでは、運動強度は劣るが、ライブにより互いの表情が見えた双方で繋がる楽しさの価値も示された。予期せぬ状況下にも、教育の本質を熟慮不動にて、様々な状況に対応できるカリキュラム・マネジメントを考案、伝えるべきことが伝わる授業デザインの研究は、教育を担う者として重視していきたい。

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会 | 【課題A】大学体育の授業をいかに良質なものにするか

学校保健体育研究部会【課題A】口頭発表①

座長：大林 太朗（筑波大学）

2021年9月7日(火) 13:30 ～ 14:59 会場11 (Zoom)

14:39 ～ 14:59

[学校保健体育-A-05]コロナ禍における対面体育実技の実施が身体不活動時間とライフスキルに与える影響

大学1年生を対象とした調査から

*寺岡 英晋¹、村山 光義¹、佐々木 玲子¹、稲見 崇孝¹、東原 綾子¹、野口 和行¹、加藤 幸司¹、永田 直也¹、福士 徳文¹ (1. 慶應義塾大学 体育研究所)

【諸言】コロナ禍の外出自粛や遠隔授業の実施による身体活動制限下において大学生の心身の健康に関わる諸問題が懸念されている。そうした中、大学の体育実技について、2020年度春学期は対面形式での実施を見送った大学が多かったが、秋学期には一部の大学で対面形式による実施が再開された。本研究では、春学期の休講措置の後、秋学期に対面形式で実施された体育実技が大学1年生の身体不活動時間とライフスキルに与える影響・効果について検討することを目的として調査を実施した。【方法】対象は首都圏の私立大学に在籍している1年生277名とした（男性136名、女性141名）。体育実技履修者は201名、非履修者は76名であった。調査は Webアンケートにより2020年度秋学期授業期間（10月-12月）の前後で計2回実施した。調査内容は（1）身体不活動時間（2）ライフスキル尺度（目標設定・考える力・謙虚な心・感謝する心）について質問項目を設定した。【結果】2要因の分散分析（時間要因×履修要因）の結果、身体不活動時間について履修者と非履修者ともに授業期間前後で減少傾向にあり、有意な交互作用は認められなかった。ライフスキル尺度の「目標設定」と「感謝する心」においては交互作用効果が認められた。さらに、運動部に所属していない学生に限定した比較では、身体不活動時間については有意な交互作用が認められなかったが、ライフスキル尺度の4因子すべてにおいて交互作用効果が認められた。【まとめ】本研究の結果は、対面形式で再開した体育実技履修が秋学期中の身体活動量の増加を有意に促進したものではないが、体育実技が大学1年生のライフスキルの獲得に貢献することを示した。特に、運動部に所属していない大学1年生にとって体育実技履修の効果が顕著に見られたことは、対面による体育実技実施の教育的意義を高めると考えられる。

テーマ別研究発表

■ 2021年9月7日(火) 13:30 ~ 14:59 | 会場12 Zoom

■ 学校保健体育研究部会【課題A】口頭発表②

座長：今宿 裕（作新学院大学）

13:30 ~ 13:45

[学校保健体育-A-06] 大学体育におけるオンラインヨガの取り組み

授業方法の違いによる満足度と目標達成度の差異

*鹿内 菜穂¹ (1. 亜細亜大学)

13:46 ~ 14:01

[学校保健体育-A-07] 大学体育におけるアクティブラーニングの工夫と実践

剣道形の授業実践に着目して

*高瀬 武志¹、東海林 祐子² (1. 桐蔭横浜大学、2. 慶應義塾大学)

14:02 ~ 14:17

[学校保健体育-A-08] 体育実技におけるオンライン講義と対面講義の学習効果比較 II

*沖 和砂¹、中澤 謙¹ (1. 会津大学)

14:18 ~ 14:38

[学校保健体育-A-09] ADDIEモデルに基づき改善された大学体育バドミントン授業が受講者の主観的恩恵に及ぼす効果

*藤野 和樹¹、木内 敦詞²、八田 直紀³、升 佑二郎⁴、林 直樹⁵ (1. 千葉商科大学、2. 筑波大学、3. 東京工業高等専門学校、4. 健康科学大学、5. 仙台大学)

14:39 ~ 14:59

[学校保健体育-A-10] 新型コロナ禍における大学体育実技の学修成果

運動行動変容段階によるオンデマンド型遠隔授業の主観的恩恵の検討

*西田 順一¹ (1. 近畿大学)

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会 | 【課題A】大学体育の授業をいかに良質なものにするか

学校保健体育研究部会【課題A】口頭発表②

座長：今宿 裕（作新学院大学）

2021年9月7日(火) 13:30 ～ 14:59 会場12 (Zoom)

13:30 ～ 13:45

[学校保健体育-A-06]大学体育におけるオンラインヨガの取り組み

授業方法の違いによる満足度と目標達成度の差異

*鹿内 菜穂¹ (1. 亜細亜大学)

新型コロナウイルス感染症の拡大とその対策として、体育やスポーツ関連の実習／実技科目においても、オンライン授業の実施が余儀なくされた。複数の種目がある中、球技と異なり、ヨガは比較的場所を選ばず、用具も不要で、体一つで実施できる。そして、教員と学生が必要最低限の ICT機器を備えていれば、オンライン授業でも同時双方型の授業運営は可能である。対面授業からオンライン授業に切り替わった際に、到達目標は知識や技術の習得が中心に変更せざるを得なかった一方で、学生の孤独感や孤立感を低減し、「今、ここ」にいる実感を持たせることも目標にして、ヨガを同時双方型のオンライン授業で行った。本研究では、同時双方型オンライン授業の中でも、学生のヨガ実施中に教員は観察して指導する回と、学生と教員が同時にヨガを実施して指導する回との、満足度と目標達成度を比較検討した。その結果、回によって満足度に差は見られなかったが、何に満足したかについて違いが見られ、目標達成度も異なっていた。この結果は、今後も続くと思われるオンライン授業改善のための資料となり、またヨガの指導方法と教育効果をあらためて見直す機会になると考える。授業におけるオンラインヨガの課題や限界も報告する。

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会 | 【課題A】大学体育の授業をいかに良質なものにするか

学校保健体育研究部会【課題A】口頭発表②

座長：今宿 裕（作新学院大学）

2021年9月7日(火) 13:30 ～ 14:59 会場12 (Zoom)

13:46 ～ 14:01

[学校保健体育-A-07]大学体育におけるアクティブラーニングの工夫と実践

剣道形の授業実践に着目して

*高瀬 武志¹、東海林 祐子² (1. 桐蔭横浜大学、2. 慶應義塾大学)

本研究発表では、体育実技系の授業として開講している「剣道形」の授業におけるアクティブラーニングの工夫と実践について発表する。「剣道形」の授業は、木刀を使用し、二人一組で「打太刀」「仕太刀」という役割に分かれて各々の決められた動作を型として演武する中で、相手との関係性や呼吸や気の合わせ方、刀の太刀筋や技の原理、足捌きや体捌きを学ぶものである。従来、「剣道形」の授業は、教員から受講生への一方通行的な一斉教授型の授業が主流であるが、本授業では教員から受講生への教授に加え、受講生間の双方向の学習を促すために、演武の動画撮影やユニバーサルデザイン化した教材の使用、受講生間の協働学習や創作した「形」の発表など従来にはない「剣道形」の授業を展開した。本研究発表では、授業内で実践した工夫や内容に加え、受講生の得た学びについて言及すると同時に剣道形における斬新な授業デザインを発表する。

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会 | 【課題A】大学体育の授業をいかに良質なものにするか

学校保健体育研究部会【課題A】口頭発表②

座長：今宿 裕（作新学院大学）

2021年9月7日(火) 13:30 ～ 14:59 会場12 (Zoom)

14:02 ～ 14:17

[学校保健体育-A-08]体育実技におけるオンライン講義と対面講義の学習効果比較 II

*沖 和砂¹、中澤 謙¹ (1. 会津大学)

本研究は、体育実技をオンライン講義と対面講義で実施した場合の学習効果について明らかにすることを目的とした。

2019年度末より、国内においても新型コロナウイルス感染症の感染者が増加し、大学教育も対面では実施できない状況であった。しかし、大学の体育実技は、「身体運動の実践を通して規範と役割に基づく、学生間の相互関係を中心として展開されるもの」（全国大学体育連合、1990）であり、対面で実施することが前提となっている。2020年度は前代未聞の事態であり、オンラインでも体育実技を実施せざるを得ない状況となった。このような状況下で、体育実技をオンラインと対面で受講した学生は、学習の効果をどのように捉えているのか、主観的評価によって調査することとなった。

調査対象は、体育実技を受講した学生247名であった。講義中に質問紙を配布・回収した。質問項目は、属性（年齢、性別、現在の運動頻度、受講前の運動頻度）、身体面に関する項目、コミュニケーションに関する項目、心理面に関する項目であった。各質問項目は、①オンライン学習（課題を視聴・実践する自主学習）、②オンライン講義（zoomで同じ時間帯にクラス全員で実技を行う講義）、③対面講義（グラウンド・体育館での実技）の3つの場面について、それぞれ7件法（7.とてもよくできた、6.よくできた、5.まあまあできた、4.どちらともいえない、3.あまりできなかった、2.ほとんどできなかった、1.まったくできなかった）にて回答を得た。

調査の結果、対面講義についての回答は、オンライン学習やオンライン講義場面よりも全ての質問において平均値が高かった。この結果から、体育実技は対面で実施することにより、学生の主観的な学習効果は高いことが明らかになった。

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会 | 【課題A】大学体育の授業をいかに良質なものにするか

学校保健体育研究部会【課題A】口頭発表②

座長：今宿 裕（作新学院大学）

2021年9月7日(火) 13:30 ～ 14:59 会場12 (Zoom)

14:18 ～ 14:38

[学校保健体育-A-09]ADDIEモデルに基づき改善された大学体育バドミントン授業が受講者の主観的恩恵に及ぼす効果

*藤野 和樹¹、木内 敦詞²、八田 直紀³、升 佑二郎⁴、林 直樹⁵ (1. 千葉商科大学、2. 筑波大学、3. 東京工業高等専門学校、4. 健康科学大学、5. 仙台大学)

本研究の目的は、ADDIEモデルに基づき改善された大学体育バドミントン授業が受講者の主観的恩恵に及ぼす効果を検証することとした。この目的にアプローチするため、授業改善プロセスであるADDIEモデルに基づき、研究1、2、3を構成した。研究対象者は、首都圏にあるC大学及びD大学におけるバドミントン授業を履修している計595名（従前授業177名、改善授業418名）であった。研究1では、従前授業における受講者のバドミントン技能水準が主観的恩恵に与える影響を検討した。その結果、技能水準の高い受講者のほうが低い受講者よりも高い学修成果を実感していたことが明らかとなった。研究2では、受講者の難しいと感じている主観的な技能課題を受講者の自由記述回答から技能水準別に抽出した。その結果、技能水準によって課題認知が異なること、すなわち初級群は自身の動作ではなくシャトルのフライトにより自己の技能評価を行っていることが明らかとなり、それに基づくルーブリックを作成した。最後に研究3では、改善設計した授業の効果を検討するため、学修者の主観的恩恵評価を用い、従前授業と改善授業との比較を行った。その結果、改善授業は、協同プレーの価値理解および体力・身体活動の増強において、初級群の有意な向上により技能水準に関わらず学修成果を実感させる授業であったことが示唆された。以上より、ADDIEモデルに基づき改善された授業では、技能水準の低い受講生の主観的恩恵を高めることが示唆された。

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会 | 【課題A】大学体育の授業をいかに良質なものにするか

学校保健体育研究部会【課題A】口頭発表②

座長：今宿 裕（作新学院大学）

2021年9月7日(火) 13:30 ～ 14:59 会場12 (Zoom)

14:39 ～ 14:59

[学校保健体育-A-10]新型コロナ禍における大学体育実技の学修成果

運動行動変容段階によるオンデマンド型遠隔授業の主観的恩恵の検討

*西田 順一¹ (1. 近畿大学)

新型コロナ禍の大学体育授業において、プレコロナ期の対面授業と比して受講学生は65%程度の学修成果に留まること、また、学修成果は同時双方向型の遠隔授業にて高いこと等が報告されている（西田他、2021）。COVID-19の影響によって人々の生活や社会に大きな変化が生まれる中、大学教育でもDXが導入され、今後、体育実技科目にてDXの採用や、その流れが加速する可能性も考えられる。ほとんどすべての大学体育授業者にとって、コロナを契機に遠隔授業を実施せざるを得ない状況となったことから体育実技の学修成果、とりわけ、遠隔授業（オンデマンド型）の学修成果に関する知見は揃っていない。本研究では、オンデマンド型・体育実技の学修成果と運動行動変容段階による学修成果の差異を明らかにすることを目的とした。‘コロナ禍における体育授業の学修成果の可視化’研究プロジェクトにて、収集されたデータより体育実技の実施を含んだオンデマンド型授業の受講者を分析対象者とした。調査内容は、基本的属性、主観的恩恵（PBS-FYPE）、運動行動変容段階等であった。データ分析を行った結果、対象者の主観的恩恵はPBS-FYPEの基準値と比して有意に低値を示し、遠隔授業全般の学修成果と同等であった。また、PBS-FYPE下位尺度について「協同プレー」は、基準値からの最も隔たりのあった学修成果（43%）であった。一方、「規則的な生活習慣」は97%の得点を示し、対面授業と遜色ない学修成果であった。次いで、運動行動変容段階による主観的恩恵を分析した結果、PBS-FYPE全体得点および全下位尺度得点に差異が認められた。下位検定の結果、「維持期」の者は高値を示した一方、「無関心期」者は主観的恩恵が低値であり、学修成果は著しく低いことが明らかになった。また、無関心期者はオンデマンド型体育実技授業の「受講弱者」として捉えられることが示唆された。

テーマ別研究発表

■ 2021年9月7日(火) 13:30～14:40 | 会場13 Zoom

■ 競技スポーツ研究部会【課題A】口頭発表①

座長：内田 若希（九州大学）

13:30～13:50

[競技スポーツ-A-01] コロナ禍における東京オリンピックの開催可否に対する代表候補選手の意識調査

レスリング競技を事例にして

*前田 翔吾¹ (1. 東洋大学大学院総合情報学研究科総合情報学専攻)

13:50～14:10

[競技スポーツ-A-02] ライフスキルが引退後のキャリア選択行動に与える影響

女性トップアスリートを対象として

*東海林 祐子¹、島本 好平²、鈴木 万紀子³、錦見 綾⁴ (1. 慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科、2. 法政大学スポーツ健康学部スポーツ健康学科、3. 一般社団法人日本トップリーグ連携機構、4. 慶應義塾大学総合政策学部)

14:10～14:25

[競技スポーツ-A-03] 新型コロナウイルス感染症拡大に伴う自粛生活が大学生運動部員のストレス反応に与える影響

ライフスキルのストレス反応緩和効果に着目して

*山田 弥生子¹、守屋 麻樹²、山口 香²、土屋 裕睦³ (1. 大阪体育大学大学院、2. 筑波大学、3. 大阪体育大学)

14:25～14:40

[競技スポーツ-A-04] 大学サッカー選手の危機克服プロセスの可視化

受傷経験に着目して

*黒田 貴稔¹、豊田 則成¹ (1. びわこ成蹊スポーツ大学)

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会 | 【課題A】 トップアスリート養成をいかに効果的に行うか

競技スポーツ研究部会【課題A】口頭発表①

座長：内田 若希（九州大学）

2021年9月7日(火) 13:30 ～ 14:40 会場13 (Zoom)

13:30 ～ 13:50

[競技スポーツ-A-01]コロナ禍における東京オリンピックの開催可否に対する代表候補選手の意識調査

レスリング競技を事例にして

*前田 翔吾¹ (1. 東洋大学大学院総合情報学研究科総合情報学専攻)

現在、新型コロナウイルス感染症の蔓延は全世界に甚大な社会的及び経済的影響を及ぼしている。コロナ禍における生活の変化が起き、新しい生活様式、いわゆる「ニューノーマル」と言われる収束というより新しい常態に備えると言う考えが必要になっている。様々な分野に影響を及ぼしているがスポーツ界も例外では無い。2020年に開催される予定であった東京オリンピック・パラリンピックが2021年に延期となったが、中止や再延期といった声も小さくない。IOCや開催国である日本はどんな形であれ、開催に向けて試行錯誤し、前向きな情報発信を続けているが、中止論に傾いている世論だけでなく、主要国の不参加や無観客試合なども取り沙汰され、その先行きは不透明である。一方で、世論と政治、ビジネスと政治駆け引きなどの狭間にいる五輪候補選手のトップアスリート達はメディアからの情報に翻弄されつつ、「期待」と「絶望」という感情の中で揺れ続けている。健全なトレーニングの弊害になるような精神的ダメージを負っている選手も少なくない。2020年6月にIOCが135カ国のアスリート3289人を対象に行った調査では56%のアスリートが効果的なトレーニングの実施が困難、50%のアスリートがモチベーションの維持に苦慮、32%のアスリートがメンタルヘルスとスポーツキャリアのマネジメントに懸念を示しているといった報告がされている。本研究では東京オリンピック、レスリング日本代表候補選手「男子12名、女子5名（選手の私情により3回目から4名）」を対象に、延期や開催の可否報道に翻弄される選手たちの競技に向けたモチベーション等を中心とした意識の変動について、2020年3月から2021年3月まで、2ヶ月に1度の頻度で計7回にわたる詳細なインタビュー調査を行い、五輪開催の現状が与えるトップアスリート達の意識への影響についての分析を行った。

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会 | 【課題A】 トップアスリート養成をいかに効果的に行うか

競技スポーツ研究部会【課題A】口頭発表①

座長：内田 若希（九州大学）

2021年9月7日(火) 13:30 ～ 14:40 会場13 (Zoom)

13:50 ～ 14:10

[競技スポーツ-A-02] ライフスキルが引退後のキャリア選択行動に与える影響

女性トップアスリートを対象として

*東海林 祐子¹、島本 好平²、鈴木 万紀子³、錦見 綾⁴ (1. 慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科、2. 法政大学スポーツ健康学部スポーツ健康学科、3. 一般社団法人日本トップリーグ連携機構、4. 慶應義塾大学総合政策学部)

本研究の目的は日本の女性トップアスリートのライフスキル獲得レベルの実態を調査し、それまでのコーチングとの関連とそれが引退後のキャリア準備に与える影響について明らかにする。

日々のスポーツやその周辺活動で獲得されるライフスキルは、意図的なコーチングによっても高まると考えられる。さらに現役を引退した後もデュアルキャリアとして構築されることが重要であり、それは人格形成や自己実現の促進などに影響を及ぼす（JSC、2014）。こうしたことから指導者の影響は競技スキルだけではなく、競技を終えたあとのキャリアに向けた準備にも影響を及ぼすのではないかと考えられる。

調査期間は2021年3月、日本トップリーグ連携機構に加盟する7つのリーグの女性アスリート（サッカー、ソフトボール、バスケットボール、バレーボール、ハンドボール、フットサル、ホッケー）829名を対象とした。調査は島本ら（2013）のライフスキル評価尺度と引退後のキャリアに向けた準備に関する質問をGoogleフォームによって調査した。結果として、高校時代に「選手の意見を聞いてくれる」、「適切なフィードバックがある」などの意図的なコーチングを受けた選手はそうでない選手と比較すると『考える力』のレベルが有意に高かった（ $F(16,812)=4.46, p<.001$ ）。次に大規模ファイルのクラスター分析を行ったところ、①全ての獲得レベルが高い「全体高群」、②社会規範が高い「社会規範群」、③社会規範と問題解決スキルが低い「問題解決低群」、④全ての獲得レベルが低い「全体低群」であった。「全体高群」は他の群と比較して、キャリア準備のための「SNSの発信」や「チーム活動とは別に自らの課題に基づいた社会貢献活動」を目指していることが確認でき、選手のキャリア準備のためには、指導者の将来に向けた意図的なコーチングが重要であることが示唆された。

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会 | 【課題A】 トップアスリート養成をいかに効果的に行うか

競技スポーツ研究部会【課題A】 口頭発表①

座長：内田 若希（九州大学）

2021年9月7日(火) 13:30 ～ 14:40 会場13 (Zoom)

14:10 ～ 14:25

[競技スポーツ-A-03]新型コロナウイルス感染症拡大に伴う自粛生活が大学生運動部員のストレス反応に与える影響

ライフスキルのストレス反応緩和効果に着目して

*山田 弥生子¹、守屋 麻樹²、山口 香²、土屋 裕睦³ (1. 大阪体育大学大学院、2. 筑波大学、3. 大阪体育大学)

緒言：2020年1月以降、新型コロナウイルス感染症(COVID-19)が拡大し、2021年5月時点でも収束の見通しは立っていない。大学生運動部員にも練習制限や競技会の中止などの影響が出た。このような不測の事態に対する個人の対処資源の一つとして、「日常生活におけるさまざまな問題や要求に対して、建設的かつ効果的に対処するために必要な能力」(WHO、1997)と定義されるライフスキル(LS)がある。大きなライフイベントに対して備えるスキルであり(Gould & Carson、2008)、COVID-19拡大状況においても活用できる可能性が考えられる。本研究の目的は COVID-19拡大に伴う自粛生活が大学生運動部員のストレス反応に与える影響及び LSのストレス反応緩和効果の検証であった。

方法：2020年12月に体育系 A大学(大阪府)の運動部員123名(20.35歳±1.17; 男性57名、女性66名)を対象として実施した。ストレス評価には「アスリート用 COVID-19ストレス尺度」(Yamaguchi et al., 2021)に本研究の対象に合わせ項目を追加して用いた。ストレス反応は「スポーツ選手用ストレス反応尺度」(煙山、2013)、LSは「日常生活スキル尺度(大学生版)」(島本・石井、2006)を用いて評価した。

結果：ストレス反応を従属変数、ストレス及び LSを独立変数とする重回帰分析の結果、ストレスはストレス反応に有意な正の影響($\beta = .36$)、LSは有意な負の影響を及ぼしていた($\beta = -.30$)。決定係数は $R^2 = .20$ であった(いずれも $p < .001$)。

考察：COVID-19拡大に関するストレスは大学生運動部員のストレス反応に正の影響を及ぼし LSによって緩和される可能性が示された。COVID-19拡大のような事態における運動部員のメンタルヘルス維持のために LS教育の有益性が示唆された。

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会 | 【課題A】 トップアスリート養成をいかに効果的に行うか

競技スポーツ研究部会【課題A】口頭発表①

座長：内田 若希（九州大学）

2021年9月7日(火) 13:30 ～ 14:40 会場13 (Zoom)

14:25 ～ 14:40

[競技スポーツ-A-04]大学サッカー選手の危機克服プロセスの可視化

受傷経験に着目して

*黒田 貴稔¹、豊田 則成¹ (1. びわこ成蹊スポーツ大学)

本研究の関心事は、大学サッカー選手が直面している危機を克服していくプロセスの可視化をすることにある。本事例で紹介する選手は、受傷経験をきっかけに「今まで出来ていたのにパスを出す際のボールを蹴る強さが分からなくなった」と語り、休部に至った。サッカー選手にとって、ボールを蹴る強さが分からなくなるという事は、競技継続の危機に瀕した状態であるかもしれず、ひいてはドロップアウトしてしまう可能性も含まれている。一方で、そうした危機に直面することが転機となり、その経験を語りによって肯定的に意味づけることで心理的な成熟につながるという報告もされている（杉浦、2001；2004）。しかし、そこでは語られた内容や特徴は示されているものの、選手が具体的に危機経験をどのように意味づけていったのかというプロセスは定かになっていない。危機を克服していくには、選手がどのように危機経験を意味づけていくのかということを構造的に理解していくことが求められる。今まさに危機に直面し、悩み苦しんでいる選手の語りに耳を傾けることは、危機克服プロセスのさらなる理解を深める一助となるに違いない。そこで本研究では、「大学サッカー選手は危機経験をどのように意味づけていくのか」というリサーチクエスチョンを設定し、受傷経験をきっかけに休部に至り、現在も復帰出来ていない大学サッカー選手1名に対して、50分程度の1対1形式の半構造化インタビューを複数回実施することとした。そこでの会話をICレコーダーに録音し、会話内容を逐語化して発話データとし、質的なアプローチを行い概念図を生成することで、サッカー選手の危機克服のプロセスを可視化したいと考えている。

テーマ別研究発表

■ 2021年9月7日(火) 13:30 ~ 14:40 | 会場14 Zoom

■ 競技スポーツ研究部会【課題A】口頭発表②

座長：荒井 弘和（法政大学）

13:30 ~ 13:50

[競技スポーツ-A-05] 陸上競技・跳躍種目における競技パフォーマンスの動態に関する研究
男女学生競技者の性差に着目して*三木 圭太¹、青山 亜紀¹、青山 清英¹ (1. 日本大学)

13:50 ~ 14:10

[競技スポーツ-A-06] イップスチェックリストの開発および信頼性と妥当性の検討

*栗林 千聡¹、武部 匡也²、荒井 弘和³ (1. 国立スポーツ科学センター、2. 立正大学心理学部、3. 法政大学文学部)

14:10 ~ 14:25

[競技スポーツ-A-07] 筋電図を用いた社会人硬式野球チーム投手へのサポート事例報告

*太田 洋一¹、島 典広² (1. 静岡福祉大学、2. 東海学園大学)

14:25 ~ 14:40

[競技スポーツ-A-08] 人工知能に基づく人間の姿勢推定による飛び込み競技の空中運動解析の創意工夫

*野村 照夫¹、来田 宣幸¹ (1. 京都工芸繊維大学)

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会 | 【課題A】 トップアスリート養成をいかに効果的に行うか

競技スポーツ研究部会【課題A】口頭発表②

座長：荒井 弘和（法政大学）

2021年9月7日(火) 13:30 ～ 14:40 会場14 (Zoom)

13:30 ～ 13:50

[競技スポーツ-A-05]陸上競技・跳躍種目における競技パフォーマンスの動態に関する研究

男女学生競技者の性差に着目して

*三木 圭太¹、青山 亜紀¹、青山 清英¹ (1. 日本大学)

陸上競技選手の最大の目標は、目標とする試合で自己最高記録および年間最高記録の達成である。この目標達成のためにはスポーツフォームの獲得が必要不可欠である(青山、2015)。スポーツフォームの分析・評価は競技記録そのものが競技力の総合的指標としてとらえることができるという理由から、測定種目を対象に行われてきた(村木、1994)。このような観点から陸上競技については村木(1994)が種目特性を考慮したスポーツフォームの判定基準を以下のように作成した。自己最高記録に対してトラック種目では98%、比較的技術性の高いフィールド種目の跳躍種目では97%、投てき種目では96%とされる。この判定基準を用いて、これまで世界のトップレベル選手や日本国内学生競技者を対象とした研究が行われてきた(村木、1987、1989；青山、2010；藤光ら、2011；川口ら、2016)。このうち、日本学生競技者を対象とした先行研究では、競技特性や競技力レベルの相違については考慮されているが、性差は考慮されていない。女性は男性と比較し、専門的な身体作業能力が劣る(シュモリンスキー、1982)点などから、競技パフォーマンスの動態に関する研究では性差を考慮する必要性があると考えられる。よって本研究では、跳躍種目について、男女学生競技者を対象に、性差に着目した近年の主要試合における競技パフォーマンスの動態の傾向を明らかにすることを目的とした。そこで、学生競技者にとって重要な競技会として位置づけられる各地区の学生陸上競技対抗選手権大会および日本学生陸上競技対抗選手権大会において発揮された競技記録から年間最高記録の値を除いた記録達成率を算出し、2試合間の記録達成率の伸び率を男女それぞれ比較した。その結果、両性間で伸び率の度合いに差異があり、男女それぞれの競技パフォーマンス発揮に特徴があることが示唆された。

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会 | 【課題A】 トップアスリート養成をいかに効果的に行うか

競技スポーツ研究部会【課題A】口頭発表②

座長：荒井 弘和（法政大学）

2021年9月7日(火) 13:30 ～ 14:40 会場14 (Zoom)

13:50 ～ 14:10

[競技スポーツ-A-06] イップスチェックリストの開発および信頼性と妥当性の検討

*栗林 千聡¹、武部 匡也²、荒井 弘和³ (1. 国立スポーツ科学センター、2. 立正大学心理学部、3. 法政大学文学部)

イップスは「スポーツパフォーマンスにおける微細運動技能の実行に影響を及ぼす、心理、神経筋の障害」のことを指し (Clark et al, 2015)、アスリートの競技生活においてさまざまな悪影響を及ぼす。これまでイップスのアセスメント法は統一されておらず、介入法確立の妨げとなっている (栗林ら、2019)。本研究では多様な競技に使用可能なイップスチェックリストを開発し、信頼性と妥当性を検討することを目的とした。

予備調査ではイップス操作的定義基準案 (栗林ら、2019) を参考に、大学教員2名とスポーツメンタルトレーニング指導士の協議によって項目を作成した。準備した項目について、大学教員や神経科医などの専門家4名が選定基準に沿って評定した。選定基準は(a) イップスの操作的定義 (栗林ら、2019) に沿った項目である、(b) 日本語を母国語とする高校生以上のアスリートが理解可能な表現である、(c) 特定のスポーツに限定されない項目である、であった。4名の専門家の一致率が100%であった10項目を準備した。

本調査では大学生アスリート215名を調査対象とし、そのうちイップス有と回答した77名を分析対象者とした (男性 26名、女性 51名、平均年齢 19.87、 $SD=1.24$)。探索的因子分析を行った結果、2因子 (第1因子：ジストニア、第2因子：不安) 10項目が抽出された。 α 係数を算出したところ、「ジストニア」は $\alpha=.91$ 、「不安」は $\alpha=.77$ であった。妥当性の検討を行うために、作成した尺度とスポーツにおける競技特性不安尺度 (橋本ら、1993) との相関係数を算出したところ、「ジストニア」は $r=.28$ ($p<.05$)、「不安」は $r=.40$ ($p<.001$) であり、それぞれ中程度の相関が認められた。

今後は本研究で開発した尺度を精緻化し、幅広い年代や競技歴のアスリートにおけるイップスの実態を把握することが望まれる。

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会 | 【課題A】 トップアスリート養成をいかに効果的に行うか

競技スポーツ研究部会【課題A】口頭発表②

座長：荒井 弘和（法政大学）

2021年9月7日(火) 13:30 ～ 14:40 会場14 (Zoom)

14:10 ～ 14:25

[競技スポーツ-A-07]筋電図を用いた社会人硬式野球チーム投手へのサポート事例報告

*太田 洋一¹、島 典広² (1. 静岡福祉大学、2. 東海学園大学)

投球動作の映像は野球投手へのサポート手段として広く活用されているが、投球時の選手自身の意識や感覚は動作だけでは不明な点が多い。そこで、投球時の筋電図測定を実施し実際に意図した筋活動がみられるか、意図しなくてもどのような筋活動が行われているかを確認できれば、選手の意識や感覚を明確化（見える化）出来ると考えた。本サポート事例では、ダイナミックな動作が少ないものの、現場では投球の善し悪しを決定すると考えられている投球動作初期の軸足の筋活動の「見える化」に着目した。本サポートは、発表者の他に社会人硬式野球チームアナライザー1名（以下アナライザー）を中心に企画・実施された。サポート対象者は右投げ4名、左投げ2名であった。筋電図は、腹横筋、非軸足側の外腹斜筋および軸足側の中殿筋、内転筋、外側広筋、大腿二頭筋、前脛骨筋、内側腓腹筋から導出した。筋電図は無線筋電計を用いて測定した。投球動作と筋電図を同期させるために、ハイスピードカメラにて投球側側から240fpsで撮影をした。投球試技は、ストレートおよび変化球とし、ストレートはストライクが5球測定できるまで投球した。変化球はアナライザーが指示した球種を複数投球し、ストライクもしくは「良い球」がそれぞれ5球測定できるまで投球した。筋活動は、非軸足の離地から接地までを局面分けし局面毎に分析した。各筋の局面毎の筋活動結果は、選手内での球種間の違いや、選手間での筋活動の違いを比較するために使用された。選手へのフィードバックにより、選手の感覚と数値化された筋活動の違いが明白となり、選手自身の意識や感覚が見える化することに繋がった。また、指導者陣からは、動作では分からない選手の意識やイメージが見える化され、フォーム改造への取り組み方を共有できるとの意見があり、選手だけでなく監督やコーチなどチーム全体へのサポートにも役立つものとなったと考えられる。

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会 | 【課題A】 トップアスリート養成をいかに効果的に行うか

競技スポーツ研究部会【課題A】 口頭発表②

座長：荒井 弘和（法政大学）

2021年9月7日(火) 13:30 ～ 14:40 会場14 (Zoom)

14:25 ～ 14:40

[競技スポーツ-A-08]人工知能に基づく人間の姿勢推定による飛び込み競技 の空中運動解析の創意工夫

*野村 照夫¹、来田 宣幸¹ (1. 京都工芸繊維大学)

運動パフォーマンスは、マーカレスでデジタイズされてきたが、近年 AIによる姿勢推定が行われている。飛込競技は飛び出し時のスキルのみならず、空中での姿勢調節も重要なので、より迅速なフィードバックのために AIの活用が適切と思われる。しかし、一般的な姿勢推定法は、頭が上にある姿勢が多く学習され、自在に変化する空中姿勢をとらえにくい。そこで、飛込競技の空中姿勢をとらえる方策を検討することを目的とした。NFの許可を得て固定カメラにより撮影した FINA Diving World Series2018の演技映像を対象とした。Pythonおよび OpenCVを用いて演技動画を回転させた動画を作成し、Posenetにより姿勢推定を行った。回転角度ごとに断片的に抽出された座標を統合し、演技座標を得た。単体動画より多くの姿勢が検出された。これにより、フィードバックの時間短縮が見込まれ、飛込競技のサポートへの貢献が期待される。

テーマ別研究発表

■ 2021年9月7日(火) 13:30 ~ 14:40 | 会場15 Zoom

■ 競技スポーツ研究部会【課題A】口頭発表③

座長：須甲 理生（日本女子体育大学）

13:30 ~ 13:50

[競技スポーツ-A-09] 日本の大学スポーツにおける学連組織の実態と課題

*小野里 真弓¹、朝倉 雅史²、石川 智³、相原 正道⁴、木村 和彦⁵ (1. 尚美学園大学、2. 筑波大学、3. 作新学院大学、4. 大阪経済大学、5. 早稲田大学)

13:50 ~ 14:10

[競技スポーツ-A-10] 「感覚」を「言語化」することによる投球パフォーマンスの安定
プロ野球投手へのメンタルサポートの可視化*豊田 則成¹、黒田 貴稔¹ (1. びわこ成蹊スポーツ大学)

14:10 ~ 14:25

[競技スポーツ-A-11] プロのダンスアーティストの創作技術と舞踊思想に関する質的研究

*三輪 亜希子¹、高木 英樹² (1. 尚美学園大学、2. 筑波大学体育系)

14:25 ~ 14:40

[競技スポーツ-A-12] 大学サッカー部における競技力向上に向けたクラブ規範の取り組み

*東海林 毅¹、東海林 祐子² (1. 城西大学 経営学部、2. 慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科)

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会 | 【課題A】 トップアスリート養成をいかに効果的に行うか

競技スポーツ研究部会【課題A】 口頭発表③

座長：須甲 理生（日本女子体育大学）

2021年9月7日(火) 13:30 ～ 14:40 会場15 (Zoom)

13:30 ～ 13:50

[競技スポーツ-A-09]日本の大学スポーツにおける学連組織の実態と課題

*小野里 真弓¹、朝倉 雅史²、石川 智³、相原 正道⁴、木村 和彦⁵ (1. 尚美学園大学、2. 筑波大学、3. 作新学院大学、4. 大阪経済大学、5. 早稲田大学)

わが国の大学スポーツは競技者育成をはじめスポーツ指導者の養成や医科学的な側面から競技力向上を支え、これまでプロスポーツ選手や実業団スポーツ選手を数多く輩出するなどスポーツシステムにおいて重要な役割を担ってきた。2019年3月には一般社団法人大学スポーツ協会（UNIVAS）が創設されスポーツの普及やスポーツ界全体の発展、さらには地域貢献や地域活性化など大学スポーツに大きな期待が寄せられている。これまで体育・スポーツ経営学における大学スポーツを対象とした研究は数多く報告されているがその中心的なテーマは、大学運動部のチームマネジメントや組織におけるリーダーシップスタイル、運動部経験により培われる能力やスキルに関するアプローチが取り上げられる。当然のことながら、これらの視点は大学スポーツの発展に重要な課題であるが研究対象として各競技種目の統括組織である学生連盟（以下、学連）の存在は等閑視されてきた。そこで本研究では、大学スポーツの競技活動を支える学連組織に着目しその実態を明らかにすることを目的とした。方法としては、日本スポーツ協会に加盟している63競技団体を対象に各学連組織のホームページを検索し、目的・理念、事業、中央競技団体との関係、学生の参加形態などについて資料を収集した。その結果、当初想定していた通り、各学連組織の構成は多様であることが明らかとなった。例えば、地区・地域別に学連組織は存在するがそれらを統括する全国組織が存在しない競技種目、また定款や目的・理念、事業内容などの情報が開示されていない学連組織も見受けられた。これらの結果を手掛かりとして、大学スポーツにおける学連組織の課題を検討するとともに、今後のスポーツマネジメント研究の可能性を考察する。※本発表は、日本体育・スポーツ経営学会のプロジェクト研究「大学スポーツのマネジメント研究」の成果の一部を報告するものである。

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会 | 【課題A】 トップアスリート養成をいかに効果的に行うか

競技スポーツ研究部会【課題A】 口頭発表③

座長：須甲 理生（日本女子体育大学）

2021年9月7日(火) 13:30 ～ 14:40 会場15 (Zoom)

13:50 ～ 14:10

[競技スポーツ-A-10] 「感覚」を「言語化」することによる投球パフォーマンスの安定

プロ野球投手へのメンタルサポートの可視化

*豊田 則成¹、黒田 貴稔¹ (1. びわこ成蹊スポーツ大学)

本発表では、プロ野球投手が『自身の「感覚」を「言語化」する』ことを通じて、投球パフォーマンスを安定化していった事例を紹介する。プロ野球選手としての日々の取り組みは、言わずもがな、自身のパフォーマンスを高次元に維持し、本番で発揮することを目指している。ただし、全ての選手が本番で実力発揮できる訳ではない。本事例もまた、前シーズンにおいてトップチーム（1軍）で活躍していた投手が、新しいシーズンを迎えるに際してファーム（2軍）での調整を余儀なくされ、トップチーム復帰を目指してメンタル面の強化を希望することからスポーツメンタルトレーニング（以下、SMT）に取り組んでいる。特に、日々の地道な取り組みから、シーズン半ばにトップチームに復帰し、登板するまでの間に、SMTの一環として『自身の「感覚」を「言語化」する』ことを継続した。本発表では、その「言語化」について質的にアプローチした結果、プロ野球投手の心理変容を可視化し、発展継承可能な議論を展開したい。特に、①「良い球が投げられるが打たれてしまう」といった混乱期から、② SMTを導入し（SMT導入期）、③試行錯誤を繰り返す中（試行錯誤期）、④「取り組むべき課題を選定できる」ようになり（課題発見期）、⑤「明確な課題に取り組む」を経て（錬成期）、⑥「パフォーマンスが向上し、安定」（向上・安定期）していくプロセスについて「言語化」された質的データから追跡した。このように、SMTにおける選手の取り組みを可視化し、その成果を検討することは、これまでの実践報告にも見られることでもある。そのような中、本発表では質的研究法を導入し、成果の可視化を試みた。ちなみに、質的研究法は、SMTの成果の検証に寄与するが、決して「お手軽な研究法」ではない。特に、選手の取り組みを深く理解していく上で、どのような理論的センシティブリティを求めていくべきかについても検討したい。

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会 | 【課題A】 トップアスリート養成をいかに効果的に行うか

競技スポーツ研究部会【課題A】口頭発表③

座長：須甲 理生（日本女子体育大学）

2021年9月7日(火) 13:30 ～ 14:40 会場15 (Zoom)

14:10 ～ 14:25

[競技スポーツ-A-11]プロのダンスアーティストの創作技術と舞踊思想に関する質的研究

*三輪 亜希子¹、高木 英樹² (1. 尚美学園大学、2. 筑波大学体育系)

近年、認知科学の研究分野では人間の創造性といった非物質的で明示が難しいとされてきた領域の解明が続いている（縣・岡田、2013：阿部、2006：Weisberg, 1986）。阿部（2006）は創造性が特定のアーティストの神業ではなく蓄積された実践知であると示し、縣・岡田（2013）はアーティストのフレームワーク的な思考による創作ビジョンの蓄積と発展について報告している。舞踊研究においては、作品の構造分析や著書・批評文から抽出した言語の分析を用いて創造性を明文化したものが多く報告されている（例えば、太田、2019：酒向、2018：昆野、2012）。創作技術の研究は、作品の振付や構成を具現化する際に核となる手法の構造分析が主であり、舞踊思想は作家の言説を基に社会的・歴史的・哲学的視点によるダンス観や作品観を分析したものが並ぶ。いずれも特定の舞踊家の特徴を捉えることが目的とされており、ダンスアーティストという立場の実践知に関する報告は未だ少ないのが現状である。そこで本研究は、ダンスアーティストの実践知に関する理論的構造の解明を目的とした。事実の概念化を目指すため、Corbin and Strauss（1999）を参考に、社会的現象の複雑性を維持しながらデータ上の考えを階層的に検証する質的研究に則り、調査は半構造化インタビューを採用した。インタビュー対象はプロのダンスアーティスト6名とし、対象者の選定はサトウ・春日・神崎（2019）を参考に研究者と創作現場で深い関わりのある者を選定理由とし、データの精緻な背景理解と研究者間の相互作用の質保証を図った。分析は理論生成の志向性を重視した木下（2014）のM-GTAを採用した。結果、「メソッド確立期」、「文脈からの独立」、自身の身体を素材とした「身体性の確立」、日常風景からの「観点採取」、連作による「フレームワーク」といった特徴が顕在化した。

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会 | 【課題A】 トップアスリート養成をいかに効果的に行うか

競技スポーツ研究部会【課題A】口頭発表③

座長：須甲 理生（日本女子体育大学）

2021年9月7日(火) 13:30 ～ 14:40 会場15 (Zoom)

14:25 ～ 14:40

[競技スポーツ-A-12]大学サッカー部における競技力向上に向けたクラブ規範の取り組み

*東海林 毅¹、東海林 祐子² (1. 城西大学 経営学部、2. 慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科)

ゴール型のボールゲームであるサッカーは、試合中の選手間の相互作用機会が多いといわれる。競技スキルを高めるためにはコミュニケーションスキルなどの社会的スキルを高めることが必要である。社会的スキルはサッカーのトレーニングから得られることだけでは不十分であり、それ以外のオフザピッチの空間（東海林、2020）での部員間の関わりが重要であると仮説を立てた。対象はR大学サッカー部員70名、研究期間は2016年から2019年までの4年間である。オフザピッチにおける取り組みは、新入生研修プログラムなど3つのプログラムを核として実施された。それぞれのプログラムでは部員間で決定した役割があると同時に、指導者の関わりは、「直接的介入のコーチング」から徐々に「選手間の協力関係を醸成するコーチング」（東海林、2016）へと権限の介入を減少させていった。チーム全体の目標として競技力を向上させるだけではなく、プログラムを成功に導くための暗黙のルールが徐々に醸成されていった。結果として、2016年度は都県リーグのカテゴリーから、2017年度には関東大学リーグ2部、2019年度には関東リーグ1部での所属となり、より高いレベルにおいて競技ができる環境となった。また、社会的スキルを測る尺度としては類似した概念である島本ら（2013）のライフスキル評価尺度を用いた。試合頻度別グループ（トップチームレギュラー・サブ・セカンドチーム）×時間（4地点）の分散分析の結果、『感謝する心』（ $F(6,237)=4.45, p<.001$ ）で交互作用が有意であった。また時間（4地点）において2016年度と比較すると『礼儀マナー』など3尺度を除く『コミュニケーションスキル』などで主効果が見られた。すなわち、2016年度の取り組み以降、試合出場頻度に関わらず、部員が役割に応じた取り組みを実装したことがその要因と考えられる。

テーマ別研究発表

■ 2021年9月7日(火) 13:55 ~ 15:00 | 会場17 Zoom

生涯スポーツ研究部会【課題A】口頭発表②

座長：吉岡 尚美（東海大学）

13:55 ~ 14:10

[生涯スポーツ-A-04] オーストラリアの障害者を包摂した水泳チームに対するエスノグラフィー

*瀬川 海¹ (1. 兵庫教育大学)

14:10 ~ 14:25

[生涯スポーツ-A-05] 障害者スポーツ・レクリエーション体験会における障害者の継続的なスポーツ参加につながる主催事業体の行動について

*飯田 望見¹、澤江 幸則¹、齊藤 まゆみ¹、松原 豊¹ (1. 筑波大学)

14:25 ~ 14:40

[生涯スポーツ-A-06] パラスポーツ観戦意欲向上のための要因

パラ陸上における競技者意識と観戦者意識の関係性に着目して

*井上 幹智¹、齊藤 まゆみ²、澤江 幸則²、松原 豊² (1. 筑波大学大学院、2. 筑波大学)

14:40 ~ 15:00

[生涯スポーツ-A-07] わが国の障害者スポーツ推進のあり方に関する試論

*藤田 紀昭¹ (1. 日本福祉大学)

テーマ別研究発表 | 生涯スポーツ研究部会 | 【課題A】 共生社会の実現に向けた生涯スポーツ政策と協働システムをいかに構築するか

生涯スポーツ研究部会【課題 A】口頭発表②

座長：吉岡 尚美（東海大学）

2021年9月7日(火) 13:55 ～ 15:00 会場17 (Zoom)

13:55 ～ 14:10

[生涯スポーツ-A-04]オーストラリアの障害者を包摂した水泳チームに対するエスノグラフィー

*瀬川 海¹ (1. 兵庫教育大学)

日本の障害者の運動実施率は30%に満たない。一方、オーストラリアの障害者の運動実施率は53.2%と比較的高い（Australian Sports Commission、2021）。さらにパラリンピックにおけるメダルランキングは世界でも上位である。特にパラ水泳では金メダリストを多数輩出しており、草の根からトップアスリートまでの障害者に親しまれている。そのパラ水泳が普及・発展している要因に、地域のスイミングクラブで障害者が日常的に水泳練習に取り組むことができるインクルーシブな環境が関連していると考えられる。先行研究では、障害者が健常者と共に運動する環境によってパラスポーツへの早期参加が促され、パラリンピックを目指すうえで実力を伸ばしやすい可能性が示されている。しかしながら、その具体的な要因までは明らかとなっていない。そこで、本研究の目的は、オーストラリアのインクルーシブなパラ水泳環境と、パラスポーツの普及・発展との関連要因について明らかにすることとした。調査対象はオーストラリア QLD州の水泳チームXであり、健常スイマー約10名と障害のあるスイマー6名が所属していた。調査期間は2019年9月～2020年3月である。選手や指導者を中心に参与観察や聞き取りを行うエスノグラフィーの手法を用いてインクルーシブな水泳練習の環境に関する記述を行った。その結果、指導者の発言から、オリンピック・パラリンピックの代表選考会が同じ試合で同時に行われてきた歴史的な背景が、日常におけるインクルージョンな環境を作り上げてきたことに関連する可能性が示唆された。その大会によってパラリンピックを目指すパラ水泳選手の姿を見る機会が創出され、観戦した人や出場する健常選手の障害者に対するインクルージョンへの考えをポジティブに変容してきたと考えられる。そのため、障害者が水泳に取り組みやすい環境が育まれた可能性がある。

テーマ別研究発表 | 生涯スポーツ研究部会 | 【課題A】共生社会の実現に向けた生涯スポーツ政策と協働システムをいかに構築するか

生涯スポーツ研究部会【課題A】口頭発表②

座長：吉岡 尚美（東海大学）

2021年9月7日(火) 13:55 ～ 15:00 会場17 (Zoom)

14:10 ～ 14:25

[生涯スポーツ-A-05]障害者スポーツ・レクリエーション体験会における障害者の継続的なスポーツ参加につながる主催事業体の行動について

*飯田 望見¹、澤江 幸則¹、齊藤 まゆみ¹、松原 豊¹ (1. 筑波大学)

近年日本国内の障害者スポーツ事業が増加の傾向を見せる一方で、障害児者のスポーツ・レクリエーション実施率については、健常者と比べ増加率に伸び悩みが見られる。その中で障害者スポーツ・レクリエーション体験会は、障害者の身体活動普及手段の一つとして推進施策が多々見られるが、スポーツを「体験する」だけではないスポーツ体験会のあり方を検討する必要性が指摘されている。そこで本研究では、障害者スポーツ・レクリエーション体験会において、参加する障害者を取り巻く環境の構造を明らかにし、その後のスポーツ継続に影響する事業体の行動について検討することを試みた。対象は東京都の障害者スポーツポータルサイトから目的的分類によって抽出された、2014年度から2019年度の間に障害者が訪れる体験会を開催した5つの事業体とし、担当者に2020年7月から10月を調査期間として半構造化面接を行った。分析はTA(Thematic Analysis)をBrown & Clarke (2006)が提示する手順を参考にして用い、対象間を横断したテーマを生成することとした。その際、Bronfenbrenner(1979)が提唱する生態学的システム理論をもとに演繹的に分析を進めることとし、分析の厳密性を確保するため Boyatzis(1998)を参考に過程を参考記述箇所と共に書き記した。その結果生成された10のテーマと30のサブテーマをもとに、障害者の体験会参加に関わる周囲の個人や組織の行動とその関係を入れ子のような段階をもつ構造で表した。その結果、主催者である事業体が全ての構造段階に関わり、体験会内部の関係者や外部の関係団体と連携をとる多角的なアプローチを行っていることが推察された。また、障害者のスポーツ継続に影響を及ぼす行動としては、「情報支援の継続」と「障害者と支援者の運動に関する認識の共有」などが示唆された。

テーマ別研究発表 | 生涯スポーツ研究部会 | 【課題A】 共生社会の実現に向けた生涯スポーツ政策と協働システムをいかに構築するか

生涯スポーツ研究部会【課題 A】口頭発表②

座長：吉岡 尚美（東海大学）

2021年9月7日(火) 13:55 ～ 15:00 会場17 (Zoom)

14:25 ～ 14:40

[生涯スポーツ-A-06]パラスポーツ観戦意欲向上のための要因

パラ陸上における競技者意識と観戦者意識の関係性に着目して

*井上 幹智¹、齊藤 まゆみ²、澤江 幸則²、松原 豊² (1. 筑波大学大学院、2. 筑波大学)

国際パラリンピック委員会のビジョンとして「パラスポーツを通じたインクルーシブな社会の創出に向けて」が掲げられている。つまり、パラスポーツは多様性を認め障害のある誰もが活躍する場であり、共生社会へのヒントが詰まっている。しかし観戦者数という観点において陸上競技日本選手権大会とパラ陸上競技日本選手権大会を比較したところ、後者の観戦者数は少なくパラスポーツの社会的影響が効果的に享受されていないことが課題である。また、Kotler(1995)は、「観戦意欲向上には観戦者の期待を明確にした上でそれらに応えうる物事が備わっている必要である」としており、競技者のスポーツ価値意識と観戦者が期待する内容の一致が必要である。しかし、現状ではパラ競技者のスポーツ価値意識と観戦者がパラスポーツに期待する内容は明らかになっていない。

そこで本研究では、パラ競技者が抱くスポーツ価値意識と大学生が抱く競技への期待から今後のパラスポーツ観戦のあり方を検討する。

日本パラ陸上競技連盟強化指定選手及びT大学の共通体育受講者を対象とし、20XX年6月にアンケート調査を行った。パラ競技者へのアンケートでは、逢坂(1999)を参考にスポーツ価値意識に関する質問項目を設定し、ここから得られる結果と先行研究(上杉 1990)における健常の一流競技者のスポーツ価値意識との比較により、パラ競技者特有のスポーツ価値意識を明らかにした。

また大学生へのアンケート項目では藤田(2018)と押見(2010)を参考に「パラ競技観戦意欲」と「競技への期待」を設定し、パラ競技観戦意欲の高い者と低い者とをスポーツに期待する内容の観点から比較した。その結果パラ競技への観戦意欲向上に影響する要因が明らかとなった。

テーマ別研究発表 | 生涯スポーツ研究部会 | 【課題A】共生社会の実現に向けた生涯スポーツ政策と協働システムをいかに構築するか

生涯スポーツ研究部会【課題A】口頭発表②

座長：吉岡 尚美（東海大学）

2021年9月7日(火) 13:55 ～ 15:00 会場17 (Zoom)

14:40 ～ 15:00

[生涯スポーツ-A-07]わが国の障害者スポーツ推進のあり方に関する試論

*藤田 紀昭¹ (1. 日本福祉大学)

わが国における障害者スポーツの推進は2013年までは主として厚生労働省で、2014年以降は文部科学省あるいはスポーツ庁において行われている。2013年以降の障害者の週1回以上のスポーツ実施率は18.2%

（2013年）、19.2%（2015年）、20.8%（2017年）、25.3%（2019年）、24.9%（2020年）と微増傾向にある。一方で、障害のない人の実施率と比べると半数以下という状況が続いており、大きな伸びはみられないというのが現状である。

その理由の一つが障害者の持つ多様性にあると考えられる。障害のある人は障害種類や程度、障害発生時期、年齢（障害発生時の地域状況や医療制度）によって、スポーツへのアクセス条件が異なる。障害者のスポーツ実施率の向上にはこうした多様性をカバーできる施策が必要となる。そこで本研究では現在の障害者スポーツ推進の状況を中央競技団体の状況、地域の障害者スポーツ協会等の事業、学校における状況、一般の人々の理解の状況などについて触れ、今後必要となる施策の在り方について述べる。

障害者のスポーツ推進の長期的な施策としては、中央競技団体の連携や統合に向けた取り組み、学校体育において、スポーツの好きな子どもたちを多く作ること、広く国民に対して障害者スポーツの理解を促し、障害者に対する意識をより肯定的にすることが重要である。中期的な施策としてはにおける各種障害者スポーツ推進事業や学校におけるパラリンピック教育等の継続的な実施が必要がある。短期的な施策として、地域における障害者スポーツの推進体制の構築（スポーツ推進計画に障害者スポーツ推進を位置づけることや関連組織の連携、協議会等の設置等）、障害者や当事者団体に対する直接的な働きかけが必要である。

テーマ別研究発表

■ 2021年9月7日(火) 14:05 ~ 15:00 | 会場16 Zoom

生涯スポーツ研究部会【課題A】口頭発表①

座長：後藤 光将（明治大学）

14:05 ~ 14:20

[生涯スポーツ-A-01] 台湾における野球振興計画の事業化の現状と課題

S社による大学グラウンドの再利用の事例から

*童 安伏¹ (1. 鳴門教育大学)

14:20 ~ 14:40

[生涯スポーツ-A-02] 総合型地域スポーツクラブにおけるミッションの形成過程

行政主導型クラブに着目して

*柴田 紘希¹、清水 紀宏² (1. 山梨学院大学、2. 筑波大学)

14:40 ~ 15:00

[生涯スポーツ-A-03] 総合型地域スポーツクラブにおける市民の自主運営構築プロセス

*千葉 洋平¹ (1. 岐阜薬科大学)

テーマ別研究発表 | 生涯スポーツ研究部会 | 【課題A】 共生社会の実現に向けた生涯スポーツ政策と協働システムをいかに構築するか

生涯スポーツ研究部会【課題A】口頭発表①

座長：後藤 光将（明治大学）

2021年9月7日(火) 14:05 ～ 15:00 会場16 (Zoom)

14:05 ～ 14:20

[生涯スポーツ-A-01]台湾における野球振興計画の事業化の現状と課題

S社による大学グラウンドの再利用の事例から

*童 安佚¹ (1. 鳴門教育大学)

コロナ感染症が世界に広まった中、世界一早く台湾のプロ野球の試合が再開した。徹底した防疫対策を行い、その後観客を入れたことができ、世界中に注目されてきた。台湾野球は、政府の野球振興政策の功を奏し、高度競技スポーツとしてのプロ野球のみならず、アマチュア野球と学生野球にも大きな発展をもたらしたが、台湾野球の現状には生涯スポーツの観点から課題がまだ多く残されている。台湾は、高度競技スポーツとしての野球が今までめざされてきた。しかし、高度化し続けてきた野球によって発生したプロ野球の八百長事件、学生選手のバーンアウト問題などを解決するため、台湾政府は野球振興計画を策定した。したがって、そこでは台湾野球が生涯スポーツとして健全に発展しているかどうかの問題なのである。他方、台湾では2011年に運動産業発展条例が策定され、生涯を通してスポーツを楽しむ政策が打ち出された。そこで生涯スポーツの推進に必要なのは、「野球を楽しむ」という視点であり、自由に野球ができる環境の整備が重要であると考えられる。しかし、現在の台湾社会では、自由に野球を行う広いグラウンドが少なく、学校の部活動やプロ野球のような高度化に進む競技スポーツ以外の生涯スポーツとしての野球をどのように発展させていくのが課題である。そこで本発表では、少子化によって学生が減少した大学のグラウンドを再利用して、野球を楽しむ場を作る民間企業に着目し、政策(官)と企業(民)とが協働をしながら、台湾の共生社会の実現に向けた生涯スポーツとしての野球推進の可能性を明らかにする。台湾野球は、高度競技スポーツとして発展してきた文化の中で、生涯スポーツとして発展していくため、「官,学,民」の協力なしにできないと考えられる。S社の事例から明らかになったのは今後の台湾における野球の発展と共生社会の実現に寄与するであろうということである。

テーマ別研究発表 | 生涯スポーツ研究部会 | 【課題A】共生社会の実現に向けた生涯スポーツ政策と協働システムをいかに構築するか

生涯スポーツ研究部会【課題A】口頭発表①

座長：後藤 光将（明治大学）

2021年9月7日(火) 14:05 ～ 15:00 会場16 (Zoom)

14:20 ～ 14:40

[生涯スポーツ-A-02]総合型地域スポーツクラブにおけるミッションの形成過程

行政主導型クラブに着目して

*柴田 紘希¹、清水 紀宏² (1. 山梨学院大学、2. 筑波大学)

総合型地域スポーツクラブ（以下、「総合型クラブ」とする）は、1995年より育成が進められてきたが近年では解散・統廃合するクラブ数が増加の一途をたどり、成長に翳りがみられる。総合型クラブの育成をめぐるのは、かねてより行政が中心となって創設されたクラブ（以下、「行政主導型クラブ」とする）で住民による自発的活動への発展がなされない等の問題が指摘されてきた。また、筆者らの研究でも行政主導型クラブの成長性が低いことが明らかにされている。なぜ、行政主導型クラブ成長は鈍化・停滞するのだろうか。他方、筆者らはこれまでに総合型クラブの成長性に関連する要因を定量的に分析し、ミッションの形骸化がクラブの成長性に負の影響を及ぼすこと、ミッションの形骸化にはミッションの形成過程が関連することを明らかにした。しかし、総合型クラブにおいてそもそもどのような議論を経てミッションが形成されるのか、ミッションの形成過程は詳細に明らかにされていない。そこで、本研究では行政主導型クラブのミッションの形成過程に着目し、人々の行為や意図、背景をクラブヒストリーとして詳細に記述する。そして、なぜ行政主導型クラブでミッションの形骸化が生じ成長が鈍化・停滞するのか、その要因を考察することを目的とした。調査は関東地区に所在する行政主導型クラブを事例としてクラブの理事長等に対するインタビューと関連資料の収集を行った。調査の結果、事例クラブのミッションは規約に記載するためだけに形式的に定められており、創設時のメンバーは内容を共有し、ミッションの達成に向けて強く動機づけられているわけではなかった。その背景には、計画に基づきクラブの早期設立に向けて効率的・合理的に作業を進めようとする行政や創設メンバーの意図が影響を及ぼしており、クラブづくりの意味の共有がなされなかったことがミッションの形骸化の理由として検討された。

テーマ別研究発表 | 生涯スポーツ研究部会 | 【課題A】 共生社会の実現に向けた生涯スポーツ政策と協働システムをいかに構築するか

生涯スポーツ研究部会【課題 A】口頭発表①

座長：後藤 光将（明治大学）

2021年9月7日(火) 14:05 ～ 15:00 会場16 (Zoom)

14:40 ～ 15:00

[生涯スポーツ-A-03]総合型地域スポーツクラブにおける市民の自主運営構築プロセス

*千葉 洋平¹ (1. 岐阜薬科大学)

総合型地域スポーツクラブ（以下、総合型クラブ）は、市民による自主的な運営が基盤とされる。しかしながら、これまで会員が運営に携わろうとする意識や行動を醸成していくことの困難さが指摘されてきた。

本研究では、総合型クラブの運営に関わる市民を対象としてインタビュー調査を行い、そのデータを修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（M-GTA）によって分析した。そして総合型クラブにおける市民の自主運営のためのマネジメントについて検討した。

その結果、まず総合型クラブには、様々な立場や価値観の人びとが集まるため、共通理解を図り、クラブを前進させていくことの難しさがあることが確認された。一般的に非営利組織は、小さな組織から設立され、スピード感のある運営が可能となる。一方、多くの総合型クラブでは、行政が公平性を意識し、地域の人びとに広く声を掛け創設される。そのため、クラブ運営に対する〔熱意の差〕や〔総合型クラブに対する理解度の違い〕がメンバー間に生じ、クラブ運営の進め方や方向性に関する〔問題共有の難しさ〕が生まれていた。

こうした状況に対して市民は、自分との価値観が近い【パートナーとの協働】を通して、総合型クラブを〔できる範囲で前に進めていく〕努力を重ねていたことが確認できた。そして自らもパートナーとの関係の中で、〔クラブの実情〕や自身の〔生活や関心との照らし合わせ〕、簡単には〔投げ出せない〕といった事柄を突き合わせながら、総合型クラブに対する〔自分なりの関わり方〕を構築していた。また、会員や指導者等から〔パートナー探し〕を行うことや講習会への参加や他クラブへの視察を通して、クラブ内での〔パートナーの育成〕を行おうとしていた。

総合型クラブにおける市民の自主的な運営は、【パートナーとの協働】を契機としており、そこへの働き掛けの必要性が考えられる。

テーマ別研究発表

■ 2021年9月7日(火) 13:30～14:40 | 会場18 Zoom

健康福祉研究部会【課題A】口頭発表①

座長：大塚 隆（東海大学）

13:30～13:45

[健康福祉-A-01] 大学教育における健康持続のためのレジリエンスプログラム開発

*高橋 和子¹ (1. 静岡産業大学)

13:45～14:05

[健康福祉-A-02] メディカルフィットネスにおける利用者のロコモ度と性格特性の関連の検討

*高士 真奈¹、武市 寿子³、梅本 安則^{1,2}、上條 義一郎⁴、指宿 立⁵、川端 浩一⁶、中山 亜未⁷、三井 利仁^{8,1}、田島 文博^{1,2} (1. 和歌山県立医科大学げんき開発研究所、2. 和歌山県立医科大学リハビリテーション医学講座、3. 和歌山県立紀伊コスモス支援学校、4. 濁協医科大学埼玉医療センターリハビリテーション科、5. 医療法人温和会 明野中央病院リハビリテーション科、6. 宝塚医療大学理学療法学科、7. 大阪体育大学、8. 日本福祉大学スポーツ科学部)

14:05～14:20

[健康福祉-A-03] コロナ禍における精神障害のある人の運動・スポーツ参加

就労継続支援B型事業所の調査から

*永田 真一¹、八重田 淳¹ (1. 筑波大学)

14:20～14:40

[健康福祉-A-04] オンライン社会における「社会的健康」を問い直す

「かかわる」とはどのような身体活動なのか

*田中 愛¹ (1. 明星大学)

テーマ別研究発表 | 健康福祉研究部会 | 【課題A】健康増進につながる体力・運動の在り方をいかに考えるか

健康福祉研究部会【課題 A】口頭発表①

座長：大塚 隆（東海大学）

2021年9月7日(火) 13:30 ～ 14:40 会場18 (Zoom)

13:30 ～ 13:45

[健康福祉-A-01]大学教育における健康持続のためのレジリエンスプログラム開発

*高橋 和子¹ (1. 静岡産業大学)

本研究は他者とのかかわりを大事にし、生涯にわたり健康的で活動的な生活を持続的に実現する為のレジリエンス（生きる力）プログラム開発を目的とする。プログラム教材の有効性を検証する為、「自他のからだへの気づき」「コミュニケーションスキルアップ」を目指し、約150名の大学生に2020/21年度に半期、教材を実践し、「授業で学んだ事」（1000字以上記述）を定量テキスト分析した。コロナ禍の状況や対象者に配慮した為、教材に違いが生じたが、主に次の教材を実践した。「呼吸法」「姿勢術」「操体法」「自然探索」「目隠し歩き」「手当」「子どもの遊び」「健康調査（貧血・骨密度・生活習慣）」「卵は立つ？」「表現（群像・マイシリエット・金魚鉢）」「主権的幸せグラフによる人生の振り返り」等。その結果、多くの対象者が共通に記述したのは「自然探索（1時間1人になって自然豊かな所で文字世界に触れずに過ごす）」や「卵は立つ？」教材と、「自他」「感じる」「かかわる」「健康」に関する語句であった。大学生は人格形成にある時期であり、コロナ禍で他者とのかかわりが希薄になる中、心身を動かし自他を感じ考えた授業は、貴重な時間になったと言える。なお、健康調査での数値を自覚し食や運動を改善する記述はあったものの、継続の影響を明らかにすることはできなかった。以上の事より、教材の有効性はある程度実証できたと言える。

テーマ別研究発表 | 健康福祉研究部会 | 【課題A】健康増進につながる体力・運動の在り方をいかに考えるか

健康福祉研究部会【課題 A】口頭発表①

座長：大塚 隆（東海大学）

2021年9月7日(火) 13:30 ～ 14:40 会場18 (Zoom)

13:45 ～ 14:05

[健康福祉-A-02]メディカルフィットネスにおける利用者のロコモ度と性格特性の関連の検討

*高士 真奈¹、武市 寿子³、梅本 安則^{1,2}、上條 義一郎⁴、指宿 立⁵、川端 浩一⁶、中山 亜未⁷、三井 利仁^{8,1}、田島 文博^{1,2} (1. 和歌山県立医科大学げんき開発研究所、2. 和歌山県立医科大学リハビリテーション医学講座、3. 和歌山県立紀伊コスモス支援学校、4. 濁協医科大学埼玉医療センターリハビリテーション科、5. 医療法人温和会 明野中央病院リハビリテーション科、6. 宝塚医療大学理学療法学科、7. 大阪体育大学、8. 日本福祉大学スポーツ科学部)

日本整形外科学会は運動器障害による移動機能が低下した状態で要介護や寝たきりになる、又はそのリスクが高い状態をロコモティブシンドローム(以下：ロコモ)と提唱している。ロコモの予防には、日常生活での運動習慣とそれを実行するための行動変容が重要である。昨今、運営形態は様々だが医療機関が運営し、医療の要素を取り入れたスポーツ施設「メディカルフィットネス（以下 MF）」が登場しつつあり（山下ら、2017）、その利用はロコモ予防に有用だと考えられる。一方、様々な医療現場において、生活習慣病の行動変容の介入として「性格特性」の活用が行われ、疾患予防と性格特性の関連性が示されているが、ロコモとの関連性は明らかになっていない。そこで、MFとして運営している本研究所のトレーニングルーム利用者に対し、身体状態、性格特性、ロコモの実態を調査し、ロコモと性格特性の関連性を検討した。対象は研究所の利用者80名(20歳以上；平均年齢65.3歳；男/女=34/46)。調査期間は2019年4月から5月の1ヶ月とした。対象者には個人特性や社会的背景を調査するフェイスシート、性格特性心理検査(EPQ-R)、体組成測定(InBody770)、ロコモ度テストを行った(ロコモ25・立ち上がりテスト・2ステップテスト)。ロコモ度テストの結果及び測定項目の数値を従属変数とし、説明変数を性格特性、体組成データの数値を説明変数とし分析を行なった。結果、ロコモ該当有無と年齢において有意差が認められた。次に対象者を利用状況や社会的背景において群分けを行い、それぞれの測定項目の数値と分析をかけたところ、有意差が認められる項目があった。MF施設における利用者の実態を明らかにし、個人特性を考慮した効果的な運動指導が必要である。

テーマ別研究発表 | 健康福祉研究部会 | 【課題A】健康増進につながる体力・運動の在り方をいかに考えるか

健康福祉研究部会【課題 A】口頭発表①

座長：大塚 隆（東海大学）

2021年9月7日(火) 13:30 ～ 14:40 会場18 (Zoom)

14:05 ～ 14:20

[健康福祉-A-03]コロナ禍における精神障害のある人の運動・スポーツ参加

就労継続支援 B型事業所の調査から

*永田 真一¹、八重田 淳¹ (1. 筑波大学)

精神障害のある人にとって運動・スポーツは健康とウェルビーイングに結びつく重要な活動である。新型コロナウイルスがパンデミック化し、多くの運動・スポーツ活動が中止されたり施設利用が制限されたりしているが、精神障害のある人がどの程度運動・スポーツに参加しているのか、そしてその参加についてどう考えているのかは明らかにされていない。本研究では就労継続支援 B型事業所の精神保健福祉手帳所持者を対象として令和2年11月から令和3年2月にかけてテンプレ大学地域参加指標の日本語版を用いた質問紙調査を行い、254名が質問紙に回答した。67%の参加者が男性、年齢の中間値が40代、過半数の者が過去30日の間に16日以上 B型事業所を利用していた。運動・スポーツで体を動かすことについて満ち足りていると答えたのは参加者全体の8%で、もっと体を動かしたいと希望している人は51%であった。参加者の過去30日における平均運動実施日数は公園やスポーツセンターで1.9日、フィットネスジムで0.6日、チームスポーツや他の集団身体活動で0.2日、スポーツイベントの観戦で0.2日であった。公園やスポーツセンターへ行くことが重要だと考えている人は全体の40%、フィットネスジムは31%、団体活動は18%、そしてスポーツ観戦は20%であった。これらの活動が重要だと感じている人のうち、その活動に十分に参加していると感じている人の割合は公園・スポーツセンターで62%、フィットネスジムで41%、団体活動は45%、スポーツ観戦で37%であった。このように、就労継続支援 B型事業所を利用する精神障害のある人はコロナ禍において運動・スポーツに参加したいと希望しているにもかかわらず十分に参加できていないことが明らかになった。今後の研究で彼らが十分に参加できていない理由を早急に明らかにし、運動・スポーツ参加への支援をするべきだと考えられる。

テーマ別研究発表 | 健康福祉研究部会 | 【課題A】健康増進につながる体力・運動の在り方をいかに考えるか

健康福祉研究部会【課題A】口頭発表①

座長：大塚 隆（東海大学）

2021年9月7日(火) 13:30 ～ 14:40 会場18 (Zoom)

14:20 ～ 14:40

[健康福祉-A-04]オンライン社会における「社会的健康」を問い直す

「かかわる」とはどのような身体活動なのか

*田中 愛¹ (1. 明星大学)

本研究の目的は、近年普及しつつあるオンライン社会における「健康」を問い直す観点から、「他者とのかかわり」とは何かを再考することである。テレワークをはじめとする社会のオンライン化は、「直接対面状況」と「オンライン上でやりとりすること」との違いについて再考する機会を我々にもたらしている。「直接対面状況」における「かかわり」に着目すれば、それはひとつの「身体活動」として捉え直すことができる。そうであれば、「かかわる」とはどのような身体活動であるのかを考察し、オンライン社会でのそれがどう変わるのかを検討することによって、社会的健康を再考することが可能となる。その際、哲学的な身体論は一つの有効な視点となるだろう。

以上を踏まえ本研究では、オンライン社会における他者とのかかわりについての具体的事例を取り上げつつ、直接対面状況における身体性に言及する文献を中心に考察を加える。その際、次の3点を中心に議論を進める。すなわち、（１）「他者とのかかわり」における身体活動の役割（２）直接対面状況における暴力性（３）オンライン社会における身体の意味、の3点である。

以上の考察から、オンライン社会において、「健康」とくに「社会的な健康」の考え方がどのように位置づけられるのか、さらには、「健康」についてより多角的に議論を進めるための視点を提示したい。

各種会議・ミーティング

🎵 2021年9月7日(火) 12:30 ~ 13:30 | 🏠 会場3 Zoom

🎵 名誉会員懇談会

本部総会

■ 2021年9月7日(火) 9:00 ~ 10:20 | ■ 会場1 Zoom

オープニング・本部総会

交流企画

🎵 2021年9月7日(火) 17:30 ~ 19:00 | 🏠 会場3 Zoom

若手研究者委員会プレゼンツ「学会の未来を語る会」

今回の学会大会は、学会名称の変更、オンライン開催、テーマ別研究発表・シンポジウムの実施といった「初めて」尽くしの大会となりました。そこで初日を振り返り、学会役員、組織委員会の先生方やシンポジストを交え、これからの学会並びに学会大会の未来について語り合う場を設けました。追加の参加費は必要ありません。多くの方のご参加をお待ちしております。